出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う

矢野遺跡第２地点発掘調査報告書

平成３年（１９９１）３月

出雲市特別事業部

出雲市教育委員会

序

矢野遺跡は、出雲市矢野町一帯に広がる大規模な集落遺跡で、斐川町の荒神谷遺跡との関連も指摘されている重要な遺跡です。

このたび、出雲市の出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴って、緊急に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、溝で囲まれた屋敷地遺構のほか、木簡、高下駄、漆器などが出土し、中世の地方農村の生活の一端を浮き彫りにすることができました。

こうした貴重な成果は、矢野遺跡の実態を究明するうえで、新しい展望がひらけたものと確信しております。

本書が、郷土の文化財保護や研究の資料として広く活用されることを期待するとともに、調査のご指導を賜りました先生方、また、厳しい暑さのもとでお世話になりました調査員や作業員の皆さん、さらにはご協力いただきました出雲市特別事業部をはじめ関係各位に心から感謝いたします。

平成３年（1991）３月

出雲市教育委員会

教育長　松　元　昭　憲

例　　言

1、本書は出雲健康公園整備プロジェクトに伴う矢野遺跡第2地点発掘調査の記録である。

2、発掘調査は、出雲市特別事業部の依頼により、出雲市教育委員会が平成2年5月14日から同年9月19日まで実施した。

3、発掘地点は次の通りである。

矢野遺跡第2地点　出雲市矢野町966−1他

矢野遺跡第6地点　出雲市矢野町1015−2、1066他

3、調査体制は、次の通りである。

事　務　局　出雲市特別事業部

調　査　員　川上　稔（出雲市教育委員会　主事）

調査補助員　松山智弘（出雲市特別事業部臨時職員）、米田美江子（同）

調査指導者　田中義昭（島根大学法文学部教授）

松下正司（広島県立博物館）

村上　勇（広島県立美術館）

黒谷達典（平田中学校教頭）

片寄義春（出雲教育事務所指導主事）

丹羽野 裕（島根県教育委員会文化課）

4、調査に当たっては地元の方々をはじめ、下記の方々より多大の協力を得た。井上寛司（島根大学法文学部教授）、岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター）、西尾克己（島根県教育委員会文化課）、内田律雄（同）、広江耕史（同）、中筋組

5、本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＤ－溝、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＫ－土壙、ＳＥ－井戸

6、本調査の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

7、本書の執筆・編集は川上と松山が協議して行った。

目　　次

第１章　　調査に至る経緯…… 1（川上）

第２章　　地理的環境…… 2（川上）

第３章　　歴史的環境…… 4（川上）

第４章　　遺跡の概要…… 5（松山）

第５章　　試掘の概要…… 7（川上）

第６章　　本調査の概要

1　第６地点 …… 9（川上）

2　第２地点西側調査区 …… 12（松山）

3　第２地点東側調査区 …… 71（川上）

第７章　まとめ…… 81（松山）

第１章　調査に至る経緯

出雲健康公園整備プロジェクトは、「出雲ドーム建設事業」と「出雲健康遊園地整備事業」からなり、出雲市ではこれまでにない大規模な開発事業である。「出雲ドーム」は平成４年３月、「出雲健康遊園地」は同年８月完成が予定されている。

当該事業が市内矢野町の新内藤川と古内藤川に挟まれた地域に計画されたが、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（矢野遺跡）に隣接し、その範囲に含まれる可能性が強かったため、島根県教育委員会文化課から文書により、試掘調査を実施するよう指導があった。そこで、約90,000m²の開発予定地に、50ｍおきに２×２ｍのグリッドを設定し、市教委職員の立ち会いのもとで機械を使用して遺構及び遺物の有無について確認調査を行なった。調査は、平成元年12月25日から12月29日まで行ない、その結果、北部の一部のグリッドでは水田下1～1.5ｍの砂層から少量の遺物が出土した。遺物が出土したグリッドについては、その範囲を限定するため、さらに密にグリッドを設定して、試掘調査を行なった。

北部の遺物出土地点は、局所的で、かつ砂層から出土していることからみても、流れてきたものであり、遺物の出土範囲を確認したうえで、平成２年４月11日から発掘調査に着手し、４月19日に終了した。

南西部の遺物出土地点は、調査対象面積が約4,000m²の広い範囲に及ぶため、発掘調査員の確保が急務となった。島根県教育委員会、島根大学、近隣市町村等に折衝し、なんとか調査体制を整え、ほぼ１カ月後の５月14日から発掘調査に着手することができた。６月初旬から７月中旬にかけての梅雨時には、周囲の水田よりも低いこともあって、雨水の処理に予想以上の労力と時間を費やし困難を極めたほか、遺構のなかには深いものもあるため、高い地下水位にはばまれ、遺構の精査や実測に支障をきたしたことも少なくない。また、今年の夏は例年に比べとくに暑い夏であったが、遺跡の土が大きくひび割れをおこし、調査にもかなりの影響が出ている。

発掘調査は、機械によって水田耕土（約30cm）を掘削したのち、全域に５×５ｍのグリッドを設定し、南北にＡ～Ｋ、東西１～16をグリッド番号として付けた。そして、西側調査区から発掘に着手し排土地が北側にある関係で南から掘り初め、順次北へ掘り進んだ。西側調査区の遺構を検出してある程度見通しが立った段階で、東側調査区の発掘に入った。

ほぼ調査を終えた９月４日に、現地説明会（150名参加）を開催したのち、９月19日に発掘調査の全てを終了した。

第２章　地理的環境

南北を島根半島と中国山地に挟まれた出雲平野は、山陰随一の沃野であり、北西の季節風から家屋を守るために植えた防風林である築地松の広がる風景は、独特の地域景観を生み出している。

矢野遺跡のある出雲市四絡地区は、この出雲平野のほぼ中央に位置し、西に浜山を臨む田園地帯にある。市街地のすぐ北にあり、市内でも有数の人口増加地域で近年宅地化が進んでいる。

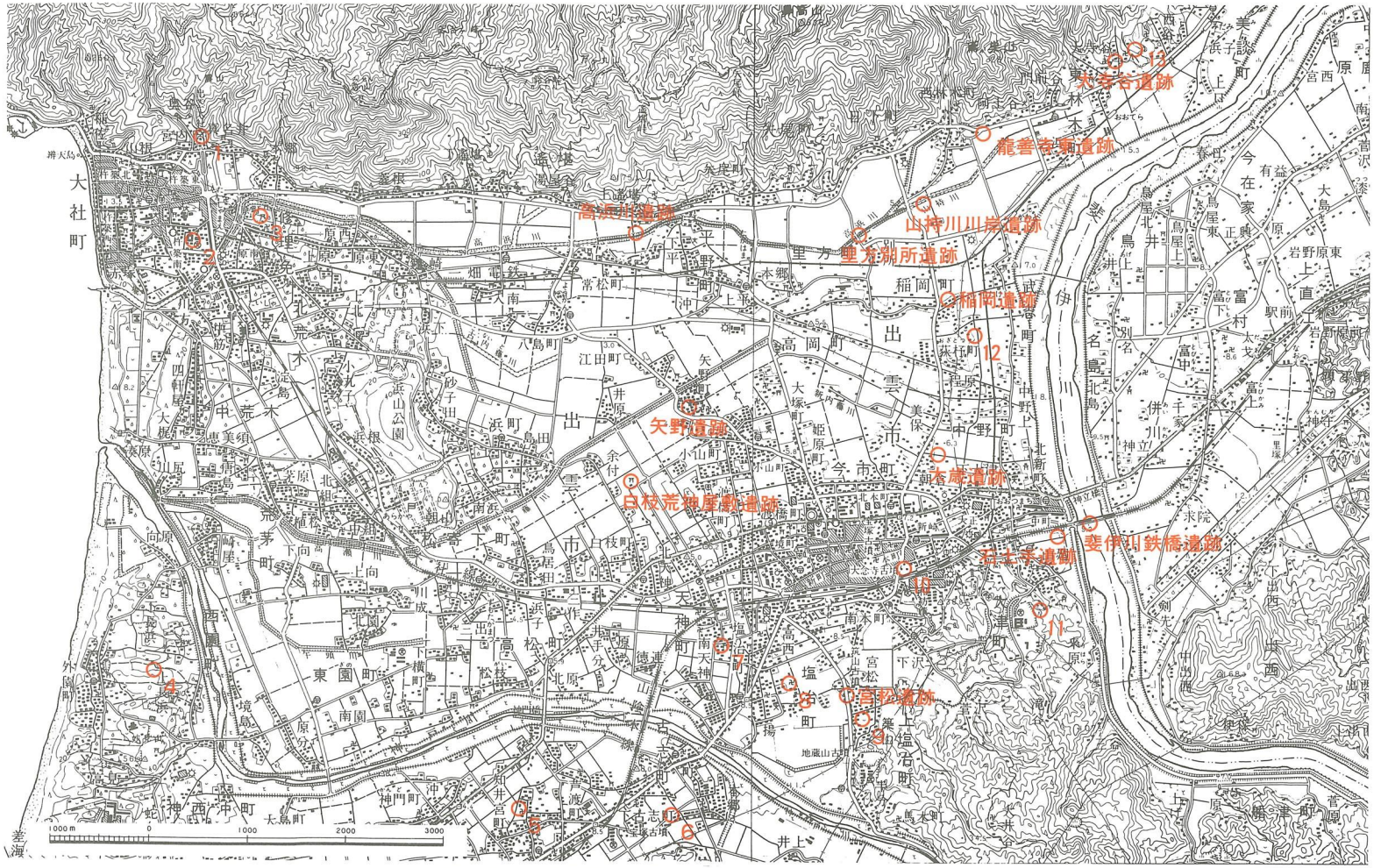
地区内には、中野町に発し堀川に注ぐ流長5.6kmの古内藤川が北部を東から西に流れているほか、中央部には大津町山廻に源をもつ全長11kmの新内藤川が西に流れ、浜山の南を経て神戸川の川尻に注いでいる。いずれも排水幹線であり、受益地域が広い。

矢野町は、四絡地区（4.11km²）の北部に位置している。家屋が密集し、その多くは四絡公民館付近から北西に伸びる微高地状の旧自然堤防上に立地している。微高地は、沖積低地である水田面から１ｍほど高く高燥の地となっている。

矢野遺跡は、現在集落や畑地となっているこの旧自然堤防上に立地している。それは、出雲平野における古代集落の立地の典型といえる。矢野遺跡では、東西300ｍ、南北450ｍの広い範囲に縄文後期から近世にいたる幅広い時代の遺物の散布が確認されており、一部では水田からも遺物は出土しているがほとんどは旧自然堤防上である。付近の小山、大塚とともに四絡遺跡群として把えられているが、そこでは矢野遺跡も第１地点から第５地点に区分されている。このうち、出雲健康公園整備プロジェクトに伴う発掘調査が行なわれた地点は、第２地点の東端付近である。

矢野遺跡では、縄文後期の土器片が採取されており、これが遺跡の初現である。このころは、海面が低下する海退期にあたっており、当時の海水準は現在よりも低かったと考えられている。したがって、三角州に形成された微高地状の高まりに人が移ってきたものであろうが、遺物が極めて少量の土器片であることからみても、とても定住して生活が営まれたとは考え難い。また、縄文後期から弥生時代の終わりごろにかけては、弥生の小海退とよばれる海退期にあたっており、このころ平野面が拡大し、稲作を主体とする農耕集落が生成される素地ができあがっている。そうしたなかで、矢野遺跡は、出雲平野における中心的な拠点集落として成長していくが、なかでも弥生中期から古墳時代初期にかけては飛躍的な集落の拡大が顕著にあらわれている。このことは、矢野遺跡の人を養い得る社会変革があったと考えられる。

また、奈良時代には、『出雲国風土記』に記載されている「神門水海」が、出雲平野西部に広がっており、この存在が当時の人々の生活に大きな影響を及ぼしている。



第24図　出雲平野の主要遺跡と紹介遺跡の位置図

1.大社境内遺跡　2.鹿蔵山遺跡　3.原山遺跡　4.上長浜遺跡　5.知井宮多聞院遺跡　6.田畑遺跡　7.天神遺跡
8.神門寺境内廃寺　9.上塩冶築山古墳　10大念寺古墳　11.西谷墳墓群　12.荻杼古墓　13.大寺古墳

第Ⅰ図　出雲平野遺跡分布図

第３章　歴史的環境

山陰地方屈指の沃野、出雲平野には、数多くの遺跡や古墳があり、県内でも有数の埋蔵文化財密集地となっている。これまで、旧石器時代の遺跡は、出雲平野とその周辺からは発見されてはいない。最も古い遺跡は、北山山麓にある縄文時代早期末の菱根遺跡で、土器のほか石鏃、石匙などの石製品、イノシシ、シカなどの獣骨、タイ、フグなどの魚骨が出土している。北山で狩りをし、海で漁をする生活を営んでいたが、石鏃が隠岐島産の黒曜石でつくられていることからもわかるように、広い地域間交流が行なわれていた。

縄文後期から晩期にかけて、菱根遺跡の周辺に原山遺跡や大社境内遺跡があり、平野中央に矢野遺跡、東の丘陵下に三田谷遺跡が営まれ、次第に平野の全域に広がる傾向にある。しかし、この時期の遺物は少なく、集落を形成するほどのものではない。

弥生時代になると、原山遺跡や矢野遺跡のように縄文時代から引き続き生活が営まれ、定着しつつある。それが弥生中期になると、入海のまわりには新しい集落が次々と生まれ、飛躍的な人口増加が認められる。特に、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡、多聞院遺跡などの大規模集落遺跡が展開し、経済的基盤としての農業経営が軌道にのりつつあることを示している。また、矢野遺跡、古志本郷遺跡、多聞院遺跡には、遺跡の一部に貝塚を伴い、ヤマトシジミのほか、サザエ、ハマグリ、カキなどの貝類が多量に出土している。このことは、手近にとれる豊富な幸が重要な食料源として大きなウェートをしめていたことをうかがわせる。弥生後期には、これらの居住空間はさらに拡大し、やがてこの地域を総括した指導者を葬った墓である西谷墳墓群が築かれていく。中でも四隅突出型墳丘墓は、四隅が突出した特異な形の墓で、出雲地方を中心に分布している。西谷墳墓群では６基が確認され、３号墓の発掘調査では１号埋葬主体が棺槨二重構造であったことや、供献土器のなかに吉備地方の特殊な土器が少なからず含まれていたことから、吉備との交流がうかがわれるなど貴重な成果を得ている。

古墳時代の前半期には、県内で類例のない筒形銅器を副葬した山地古墳や、県内最古の前方後円墳である大寺古墳のほかには、あまり見当たらないが、後半期にはそれぞれに特色ある横穴式石室をもつ古墳が卓越し、それらの頂点に国指定史跡の今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、上塩冶地蔵山古墳、宝塚古墳がある。これらは、いずれも石室内に１～２基の家形石棺を置くが、なかでも今市大念寺古墳の石棺は日本で最大級のものである。

奈良時代以降の大遺跡は、これまであまり知られていないが、出雲健康公園整備に伴う矢野遺跡の発掘調査で中世の大きな遺構が検出されたように、これからの調査によって新たに発見される可能性が高い。

第４章　矢野遺跡の概要

出雲平野のほぼ中央部に位置する矢野町・小山町・大塚町・渡橋町を四絡地区と呼んでおり、矢野遺跡・小山遺跡・大塚遺跡を四絡遺跡群と呼んでいる。これらの遺跡は、東西１km・南北1.2kmにわたり周囲の水田面より１ｍ程度高い神門川の同じ旧自然堤防上に位置している。小山遺跡は１～３地点・矢野遺跡はこれまで５地点確認されていたが、今回の試掘調査・本調査によって、新たに第６地点が発見され、第２地点はさらに範囲が広がることが確認された。

四絡遺跡群は山本清による大塚古墳（大塚町）の報告が初出で、その後、四絡小学校敷地内やＮＨＫラジオ放送所敷地内より土器が採集され、矢野・小山・大塚と四絡地区一帯に遺物が散布することが確認された。

1958年には、山本清と旧島根県考古学会により第１地点の発掘調査が行われており、貝層が確認されている。以後矢野貝塚（現在の第１地点）として知られるようになり、1959年には市の史跡に指定されている。

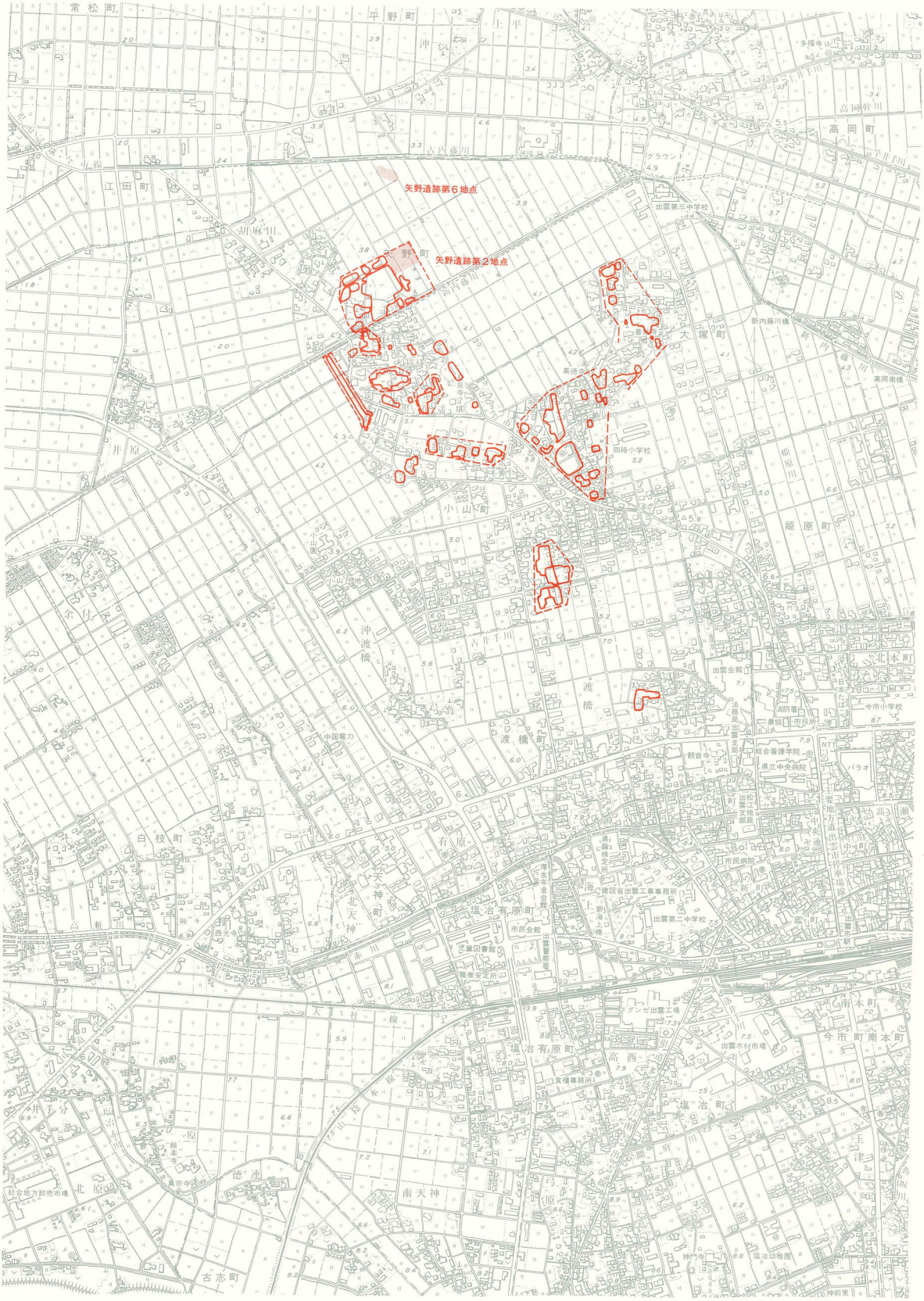
出雲平野の弥生時代・古墳時代の集落の動向について体系的にまとめ、その中で矢野遺跡を位置ずけたのは出雲考古学研究会である。四絡遺跡群については、綿密な分布調査を行い、遺物の散布密度から矢野遺跡を１～５地点、小山遺跡を第１～３地点に区分して紹介している。特に矢野第３地点からは吉備の特殊土器が表採されていることや、遺跡全体を見ても他の遺跡と比較して遺物の量が多いことなどから、矢野遺跡を出雲平野の拠点集落として位置づけている。

この出雲考古学研究会の基本的な作業を受け継いだ形で、島根大学の田中義昭を中心とする出雲集落遺跡研究会により矢野遺跡の発掘調査が継続して行われている。

以下、これまでの成果を踏まえ、矢野遺跡の概要についてのべる。

第１地点

矢野遺跡の中心部に当たり、前述のように矢野貝塚として知られている。微高地の最も高いところに位置し、現状は畑地で、周囲は宅地となっている。1953、1971、1973年に、トレンチによる調査が行われており、黄色シルト層よりヤマトシジミを中心とする貝塚や土壙墓と思われる遺構が検出されており細身の管玉が出土している。土器は弥生後期のものが量的に多く、弥生時代前期から古墳時代初頭まである。また、縄文後期・晩期の土器が若干表採されている。



第２図　四絡遺跡群分布図（Ｓ＝1/2,000）

第２地点

新内藤川より北の現在畑になっているところである。

1985年に出雲集落遺跡研究会によって、矢野神社の周辺にトレンチが入られている。遺構としては、近世と思われる溝状遺構と、古墳時代初頭の竪穴住居と考えられるものの一部と、これに伴うと思われる柱穴が検出されている。

第３地点

1986～87年にかけて出雲集落遺跡研究会によって発掘調査されている。後世の攪乱が著しく良好な遺構は検出できなかったものの、大量の土器・石器が出土している。土器については、弥生中期中葉～後期中葉を中心に弥生前期から古墳初頭まである。また、このときにも吉備から搬入されたと考えられる特殊土器、特殊器台が出土している。玉作関係の遺物も出土しており、玉生産を行っていたようである。

第４・５地点

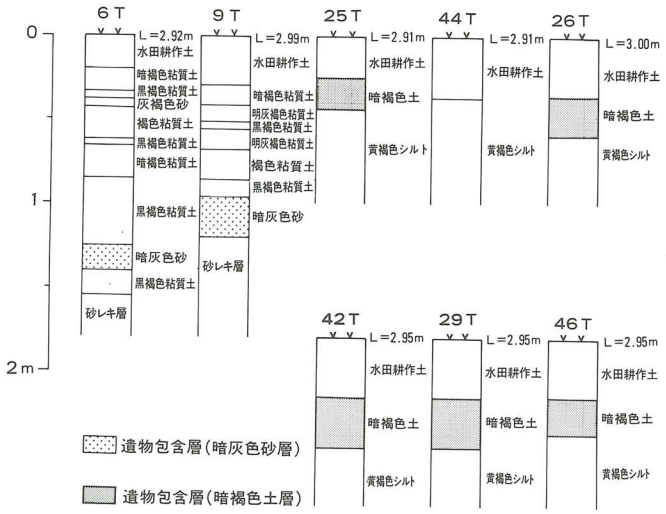
第４地点は、微高地の南縁に辺り、旧河道と考えられる水田に面している。第５地点は、水田内に水路が掘削された際に、遺物が採集されている。

このように、矢野遺跡では、弥生時代から古墳時代初頭の遺物を中心に出土している。しかしながら、今回の調査では、弥生時代から古墳時代前・中期の遺構はなく、遺物が若干表採されただけであった。古墳時代終末を最古に、平安時代から中世にかけて中心に営まれた集落跡で、他の地点とは様相が異なる。

第５章　試掘調査の概要

出雲健康公園整備プロジェクト事業が市内矢野町を予定地として計画策定されたが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である矢野遺跡に隣接し、遺跡の範囲に含まれる可能性が強かったので、試掘調査を実施し、遺構、遺物の有無について調べた。

開発予定地は、自然堤防状微高地わきの水田で、海抜約３ｍの地点である。北と南を古内藤川と新内藤川に挟まれた水田地域で、開発面積は92,829㎡と広大なため、ほぼ50ｍおきに２×２ｍのグリッドを縦横に配置した。掘削は、調査員立ち会いのもと、機械で行ない、遺構が発見されたグリッドの付近はその分布範囲を限定するために、さらに新しいグリッドを設定した。調査したグリッドは42カ所で、そのうち遺構を検出したり、遺物を出土したグリッドは、古内藤川に近い６、９Ｔと、南西部の25、26、29、42、44、46Ｔ付近の８か所であった。北側のグリッドはやや離れているが、南西部ではやや広い範囲に及ん



でいる。南西部は、その分布状態からみて矢野遺跡第２地点の一部と考えられる。

北部のグリッドのうち、６Ｔでは水田面が海抜2.92ｍで、層序は水田耕土の下に暗褐色粘質土、黒褐色粘質土があり、薄い灰褐色砂を挟んでその下に褐色粘質土、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土と続き、さらに遺物を含む暗灰色砂から黒褐色粘質土、砂れ

きとなっている。最も厚い層でも40cmしかなく、堆積環境の変化が激しかったことを示している。このうち、遺物を包含する暗灰色砂の上面は水田下1.25ｍで、15cmの厚さに過ぎない。また、９Ｔでは水田面が海抜2.99ｍで、層序は水田耕土の下層に６層の粘質土があり、その下は暗灰色砂、砂れきとなっている。暗灰色砂の上面は水田面下１ｍで、厚さは20cmである。出土遺物として、６Ｔから下駄、漆器の一部、９Ｔからは少量の土器片があった。

しかし、周辺のグリッドにはほとんど暗灰色砂を含んでいないことから、きわめて局所的な分布範囲と推定される。また、砂層から遺物が出土していることからみて、近くの遺跡から流されてきて堆積したものと思われ、集落があったとは考えられない。

南西部の調査グリッドのなかでは、遺物を出土した８カ所のグリッドのうち、26、29、42Ｔからの遺物の出土が多く、29Ｔからは径45cmのピット、44Ｔからは径20cmのピットを検出した。そうしてみると、南北50ｍ、東西80ｍの範囲の4000m²が発掘対象面積となるが、試掘調査の結果をもとに開発者と協議を行なったところ、どうしても計画を変更し現状保存を図ることができなかったため、当該部分については、第２地点とし、６Ｔ、９Ｔを第６地点として、やむを得ず発掘調査を実施することにしたものである。

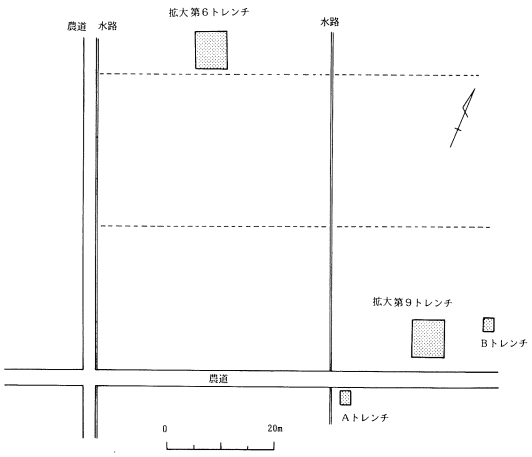
第６章　本調査の概要

１．第６地点の概要

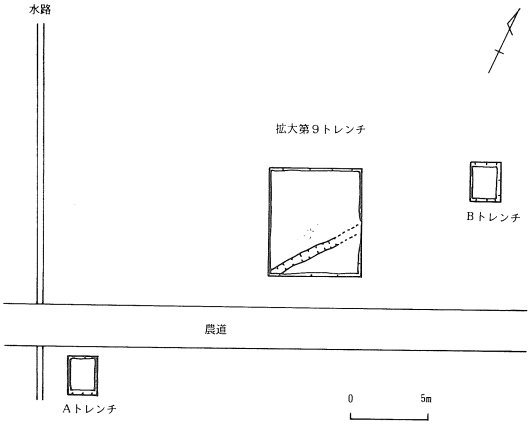
矢野遺跡第６地点では、遺物を包含する層が水田面から約１ｍ下の暗灰色砂層であることから、流れてきた可能性が強く、また遺物を包含する暗灰色砂層の分布範囲が極めて限られていたことから、試掘調査のときに遺物を出土した６Ｔ、９Ｔを中心として調査することにした。

発掘調査は、６Ｔを中心とした東西６ｍ、南北７ｍの調査区（拡大６Ｔ）と９Ｔを中心とした東西６ｍ、南北７ｍの調査区（拡大９Ｔ）を設定した。

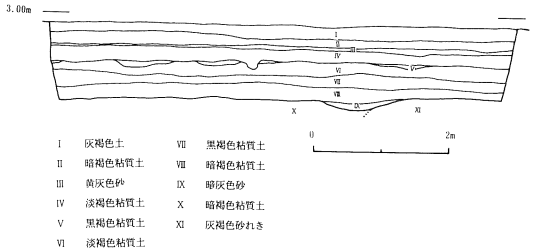
拡大６Ｔでは、水田面から約１ｍ



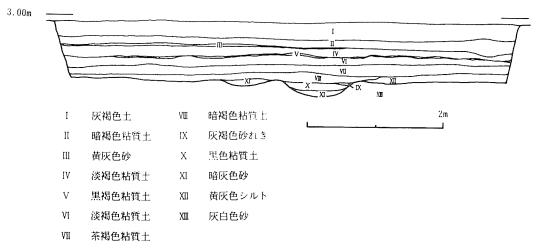
第５図　第６地点トレンチ配置図



第６図　拡大第９トレンチ付近位置図



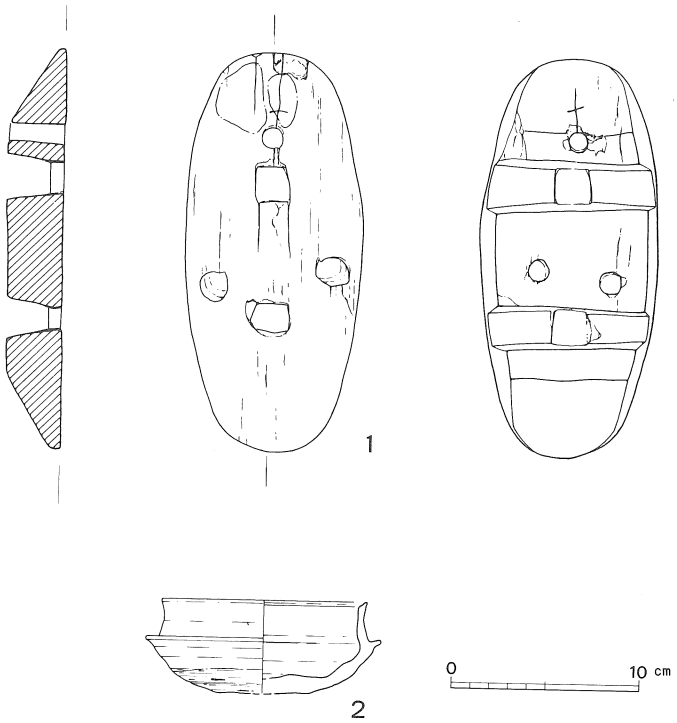
第７図　拡大第９トレンチ東壁セクション図



第８図　拡大第９トレンチ東壁セクション図

下の遺物を包含する暗灰色砂層を確認した。同層は、層厚10～20cmで、凹地に堆積し、その範囲はトレンチのほぼ南半分にみられた。遺構は全く検出されなかったが、遺物として、須恵器や土師器の破片が十数片出土したほかには、中世のものと思われる下駄や漆器が認められた。同層と下層の荒砂層からは湧水が多く、調査に障害となった。

拡大９Ｔでは、水田面下0.9～1.2ｍに暗灰色砂層があり、厚さは10～30cmであった。同層は、0.5～0.7ｍの幅で伸びる流路跡を中心として分布している。流路跡では黒色粘質土の下層に堆積しているが、その北側では、約１５cm高い位置に広がっている。流路は、浅い皿状になっていて、黄褐色シルト層と灰白色砂を刻んでいる。トレンチ中心部での断面観察によれば、内部には下底に荒砂があり、薄い粘質土を挟んで



第９図　６Ｔ出土遺物

その上に遺物包含層があり暗灰色砂が堆積していた。さらにその上部には、５～15cmの黒色粘質土が蔽っていた。流路跡が0.5～0.7ｍ幅でほぼ直線状に伸びていたことから、その方向にＡトレンチ（南西）、Ｂトレンチ（北東）を設定して流路跡が認められるかどうか調査したが、検出されなかった。遺物としては、土師器を主として十数片出土しているに過ぎない。

調査の結果、水田面から約１ｍ下の遺物を包含する暗灰色砂層からは、土器等の出土はあるものの、河川の洪水等による流砂に含まれるもので、その遺物散布範囲は、限られたものであった。また流路跡についても、両側は灰白色砂になっており、Ａ、Ｂトレンチで検出されなかったことを考えあわせると、水田遺構にともなう溝状遺構とは考え難い。

２．第２地点西側調査区の概要

(1)　西側調査区概要

この調査区は微高地の中心部側にあたることから、東側調査区より若干高い位置にあたり、黄色シルト層（地山）で標高2.5～2.6ｍである。東側調査区の北東隅では、2.14ｍを測り北東に向かって低くなることが判る。矢野遺跡の位置する微高地の中心部と同様のシルト層で標高4.7ｍを測ることから、今回の調査区は１ｍ以上低い位置にあり、旧自然堤防の縁辺部に当たると思われる。そのためシルト層から１ｍほど下げると砂礫層に達し、かなりの湧水がある。

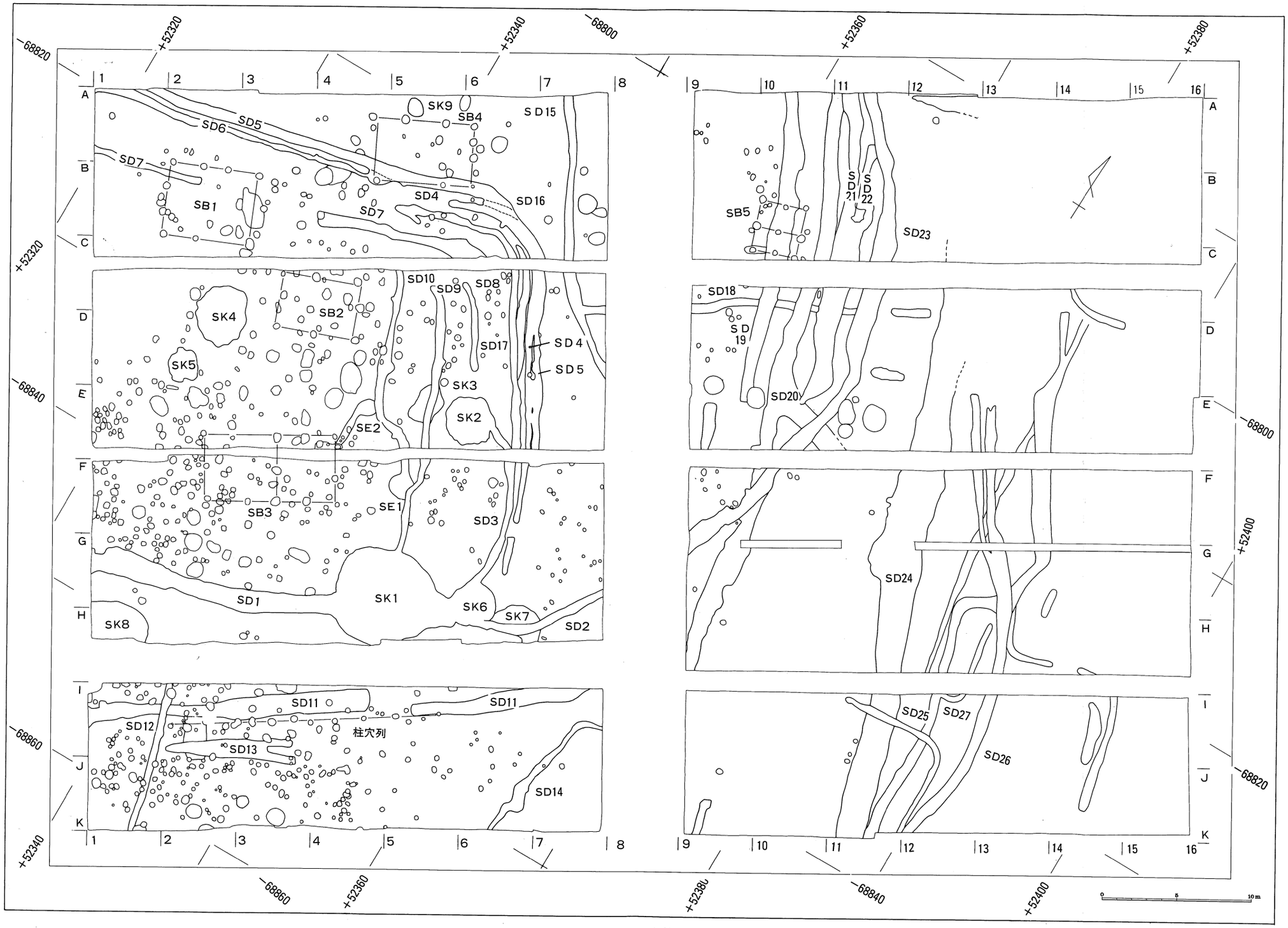
遺構は、５ラインより西側に集中しており、これより東側は、徐々に遺構の数が減少し、７ラインちょうどＳＤ05を越えるところから柱穴等の遺構は減少する。これは、地山のレベルに対応しており、標高2.4ｍが居住区の限界になっている。

検出した遺構としては、中世の屋敷地を区画する溝を中心に、その内外に900以上の柱穴土壙・井戸・住居等が確認された。遺構の時期としては、古墳時代終末から中世までであり、古代前半・中世の遺構がまとまっている。遺物も、古代前半・中世のものが大半を占める。また、遺跡が低湿地に位置することから、木製品が比較的良好に残っていた。

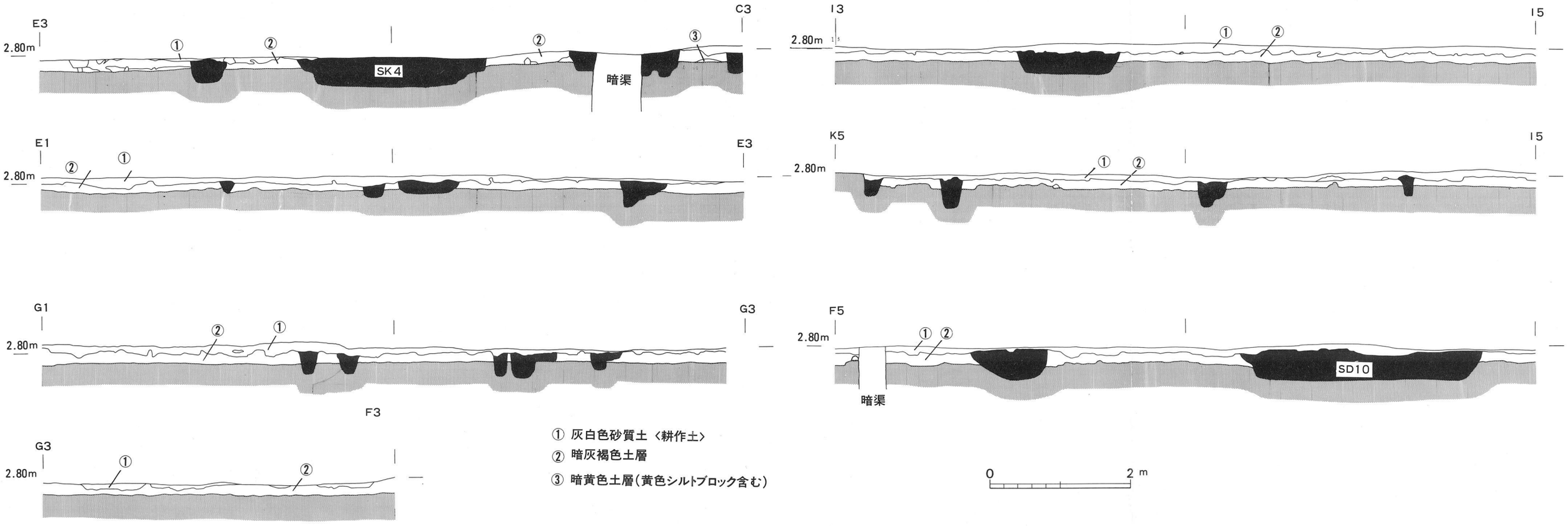
(2)　土層について

西側については、表土の下は褐色土（Ⅱ層）が平均厚さ15cmありその下は黄色シルト層（地山）である。これは、すでに土地改良が行われてそのときに他の遺物包含層は削平されたものと考えられる。そのため唯一の遺物包含層であるⅡ層もかなり削平されており、上面は一定の面を持たずほとんど残ってないところもある。このⅡ層はよくしまった土でシルトのブロックを含む。シルト層の下１ｍは砂礫層となる。遺構はこのⅡ層か、さらに上にあったと思われる層から堀り込まれたものと考えられる。

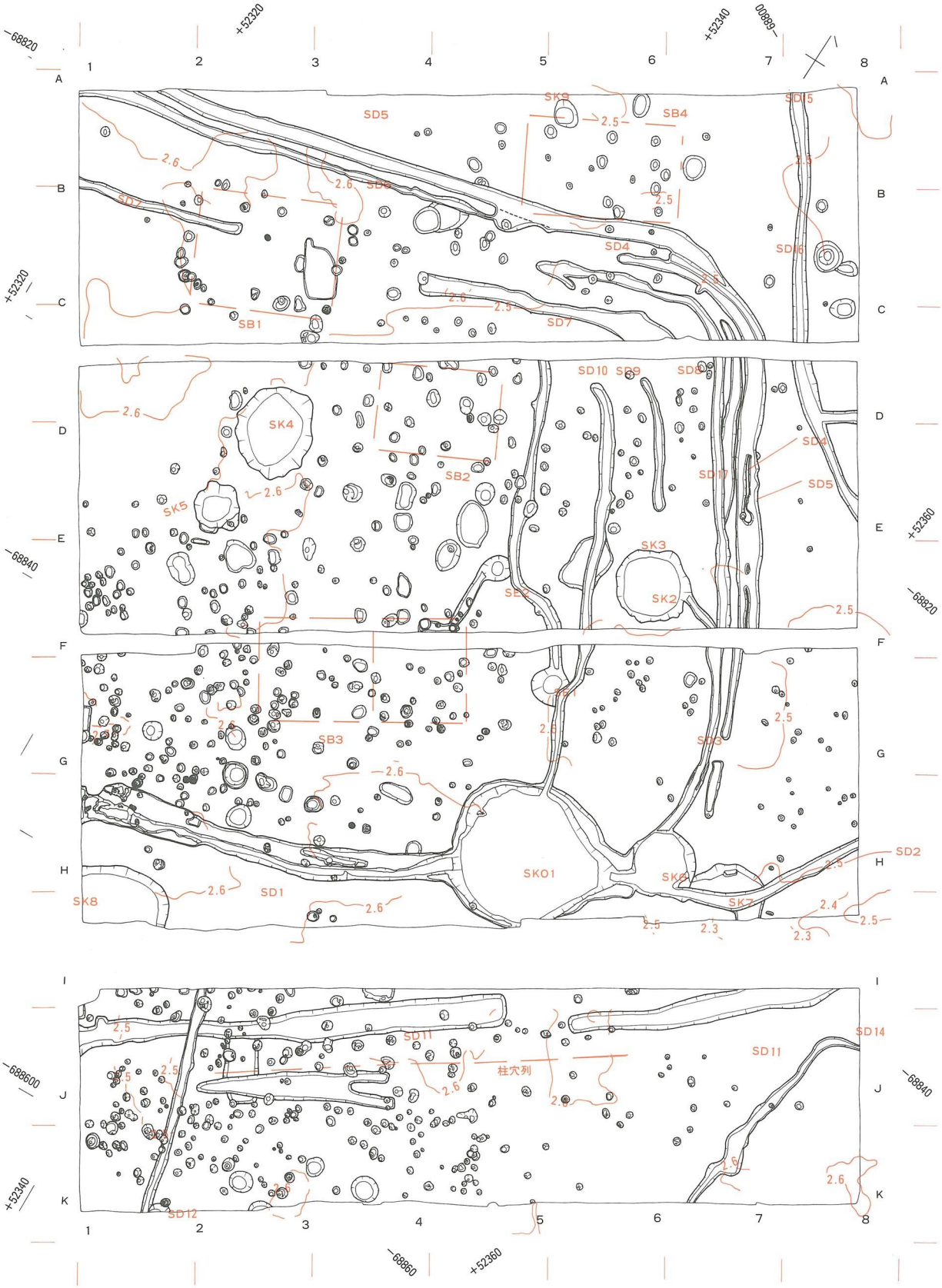
遺構内の土としては、中世の遺構には、炭化物を含む暗黒褐色土が入っている。



第10図　第２地点調査区全体図



第11図　西側調査区層図



第12図　西側調査区全体図

(3) 遺構と遺物

ＳＫ－01（第13図）

この遺構は、屋敷地を区画する溝（ＳＤ－01）の東南コーナーに位置し、溝とは切り合いはなく一連のものである。南北6.6ｍ・東西6.8ｍを計る大きな遺構である。深さは60cmで地山の砂礫層まで達しており、かなりの湧水がある。土壙の壁は、45度の角度で傾斜し底に至る。下端の直径は5.4ｍである。床には、人頭大の石がいくつか出土しており、また、東側の溝との接続部分からも同様の石があるが、石組のようなものがあった形跡はない。この土壙には、計３本の溝が接続している。うち西側の溝は屋敷を区画する溝（ＳＤ－01）である。東側の溝は、ＳＫ－06をつなぐ短いものである。溝はどれも深さ30cm程度でありＳＫ－01の深さに比べて浅い。埋土は、基本的には４層からなり、最下層の暗黒茶褐色土の上部は植物を含んでいた。

遺物としては、土師器・須恵器・土師質土器・常滑焼・須恵器系中世陶器・白磁・砥石・木製品などが出土している。また、弥生土器が一点出土してしている。これは、遺構の規模が大きいため古い遺構を壊していることが予想され、遺構に直接伴うものではない。同様に土師器や須恵器の中にも混入品などを含んでいると思われる。また、陽物など木製品も出土している。

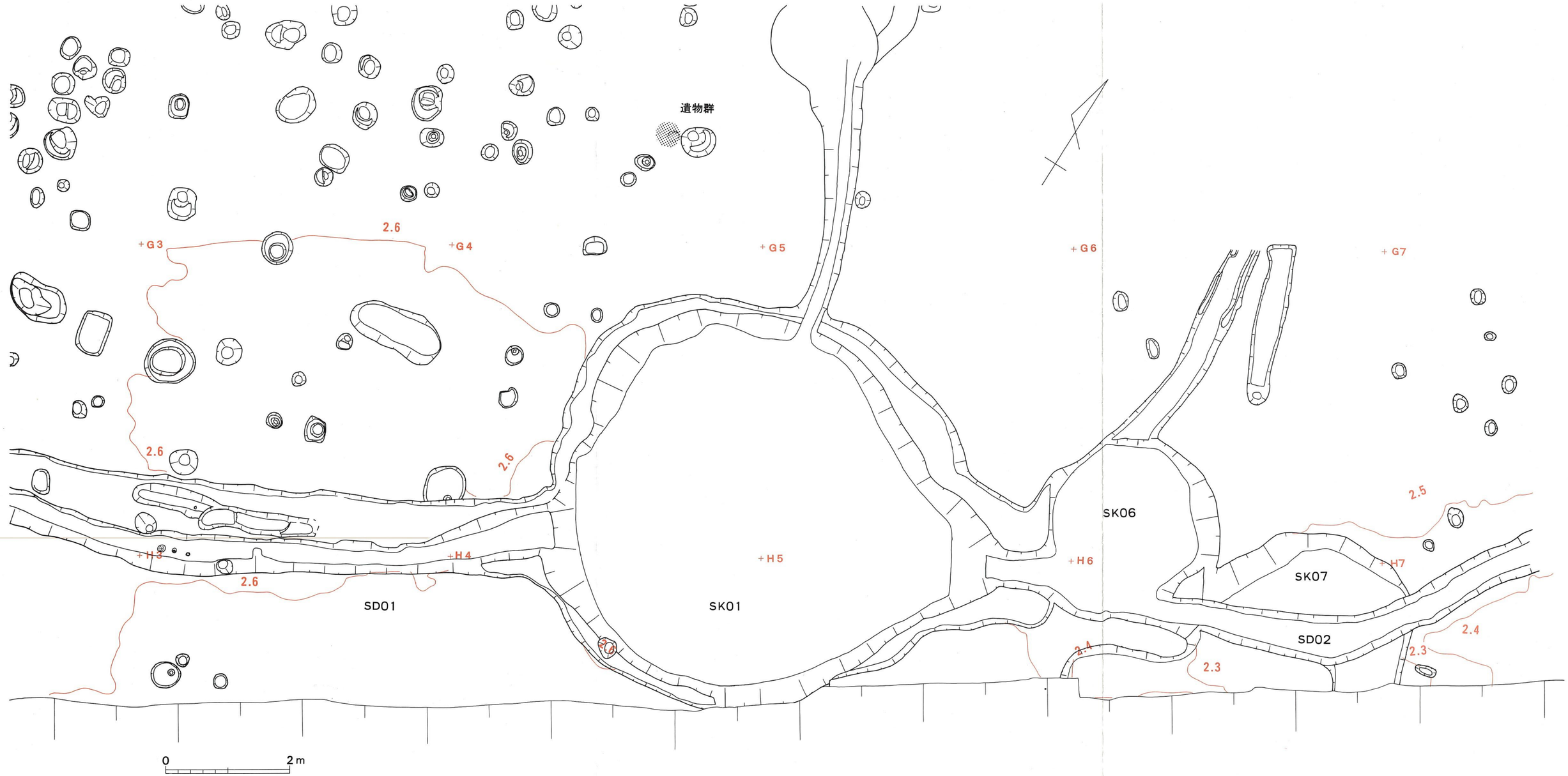
どの層からも土師質土器・常滑焼きなどが出土し、最下層からも同様の遺物が出土している。これは、連続する溝（ＳＤ－01）の出土遺物の時期と矛盾しない。

ＳＫ－01の出土遺物

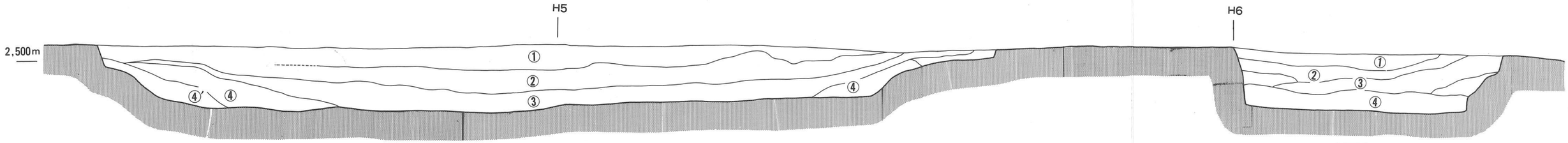
土器（第15・16図）

(1)～(5)は、土師質の擂鉢である。土師質と言う呼び形は、適当とは言えないが、胎土が白く土師質土器の杯の胎土とよく似ていることから、ここでは土師質を読んでおく。(1)～(3)は、擂鉢である。(1)は、体部から口縁部にかけて直線的に伸びる逆ハの字形を呈する。口縁端部は、カットされたような平坦面を持ち断面は矩形を呈する。内外面とも縦方向の刷毛目の後でナデ調整している。刷毛目の消えてないところもあり雑なナデ調整である。内面は、口縁端部より2.5cm下より１単位７本からなる幅2.1cmの擂目を施している。(2)・(3)は擂鉢の底部である。(2)は、内・外面ともナデ調整されており、内面には一部に刷毛目もみられる。擂目は、６本で１単位を成す。また、底部外面は、まったく調整されておらず、３mm程度の小さな円形の凹があるのみである。

(3)は、外面は風化が著しいが、体部は縦方向の刷毛目を施しているようである。底部付近はナデている。内面は、刷毛目調整の後で一単位６本幅２cmの擂目を、反時計周りに施

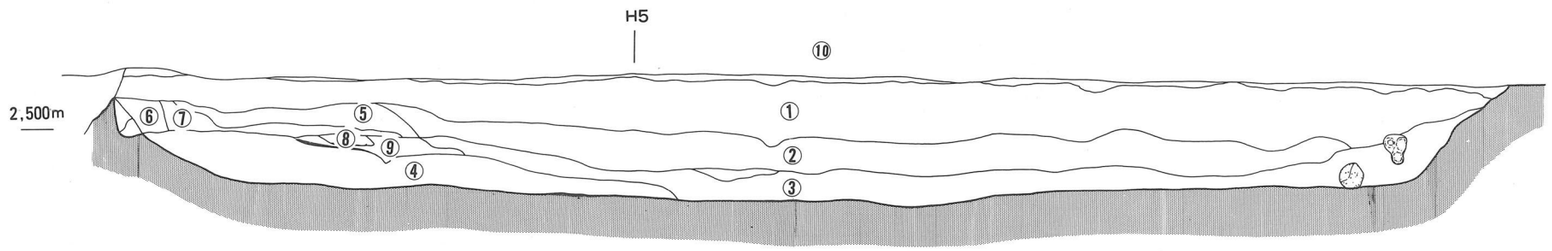


第13図　S K01・06・07 平面図

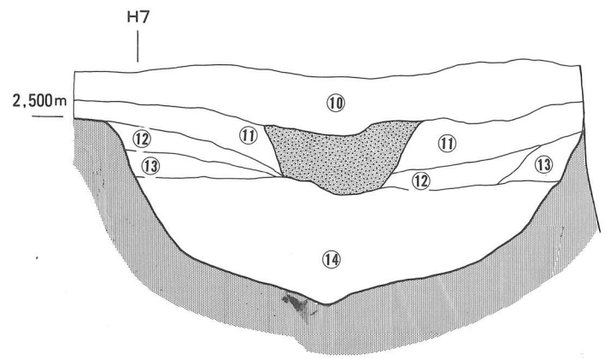


SK01 東亜セクション

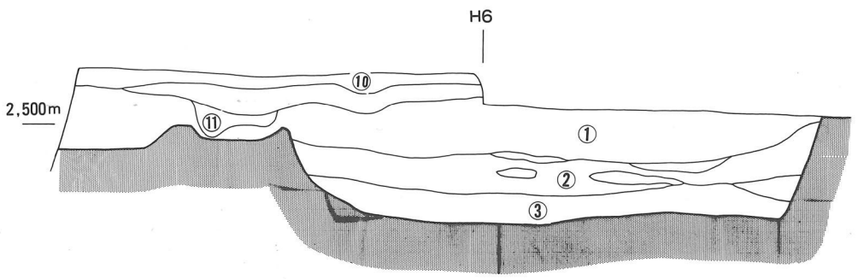
SK06



SK01 南北セクション

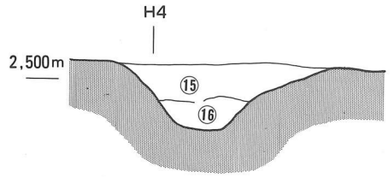


SK07 南北セクション



SK06 南北セクション

① 黒褐色土層
② 暗黒色土層
③ 暗黒茶褐色土層
④ 暗茶褐色土層
④ 〃
⑤ 暗黒色砂質土層
⑥ 暗茶褐色土(シルトブロック含む)
⑦ 〃
⑧ 白褐色土層
⑨ 黒茶褐色砂質土層
⑩ 灰白色砂質土層(耕作土)
⑪ 黄褐色砂レキ層
⑫ 暗褐色粘質土層(SK07)
⑬ 黄褐色土層 (SK07)
⑭ 灰褐色粘質土層(SK07)
⑮ 黒褐色土層
⑯ 灰褐色土層



SD01 セクション図

第14図 SK01・06・07 土層図

している。

(4)・(5)は、擂目のないこね鉢である。(4)は、(1)と同じ形態をしており、外面は粗い縦方向の刷毛目を施し、下部はナデ調整によって消されれている。内面は、中央部に刷毛目が観察されるがそれより下部は、ナデ調製されており滑らかに仕上げられている。上部は風化が著しいため不明である。(5)は、底部で、外面はナデ、内面は刷毛目が施されている。

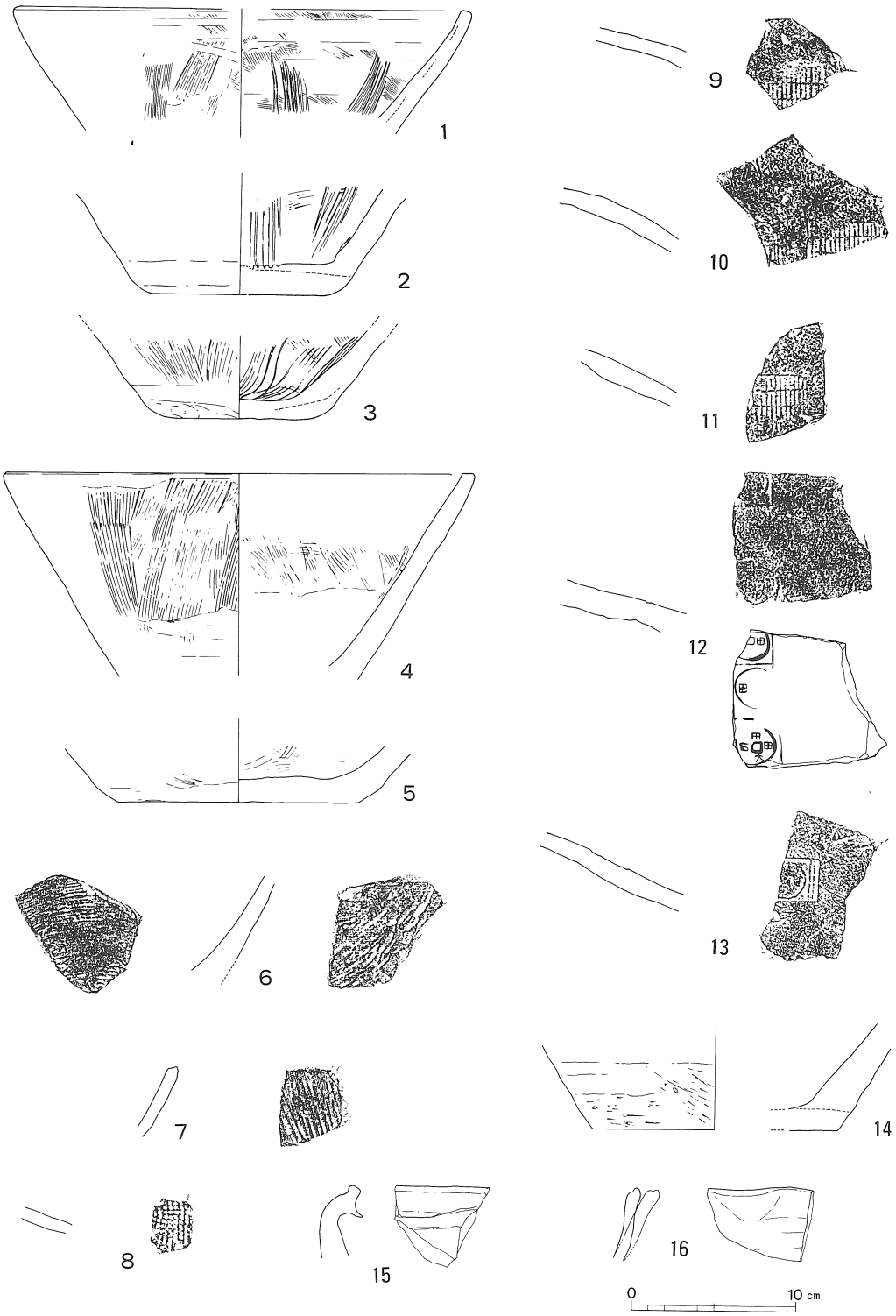
(6)～(8)は、須恵系のもので色調は外面黒灰色・断面灰白色を呈し軟質である。(6)は、鉢の破片と考えられる、内面は櫛状工具による横方向のカキ目、外面はヘラのようなものでナデ付けているようである。(7)は、口縁端部の破片で、平坦面はやや凹線状になっている。内面は刷毛目調整されており、外面はナデ調整されている。色調は、内面は灰白色、外面は淡灰色を呈する。(8)は、外面に幅３㎜の格子タタキが施された小片である。色調は外面は黒灰色、内面が灰色を呈する。

(9)・(15)は、常滑焼と考えられるものである。(9)・(13)は、体部肩の押印帯の部分である。(9)～(11)は、３㎜×８㎜の格子タタキが施されている。(12)・(13)は古銭のような文様がスタンプされている。(12)は、時計周りに田・田・天・田と読め、明瞭ではないがスタンプとスタンプの間が仕切られている。(13)は、一部しかないが方形の枠の中に円形の文様と２本の線が入れられている。字が書かれているかどうかは不明である。(14)は底部で外面底付近はヘラケズリされている。(15)は口縁部である。口縁上端は平坦面を持ち、下端はシャープに薄くのびる。色調は明赤褐色を呈し、口縁内面上端部は灰を被っている。(16)は器種は不明だが口の部分である。端部は外面は丸く収めるが内面は２段になっている。色調は鈍い黄橙色を呈する。

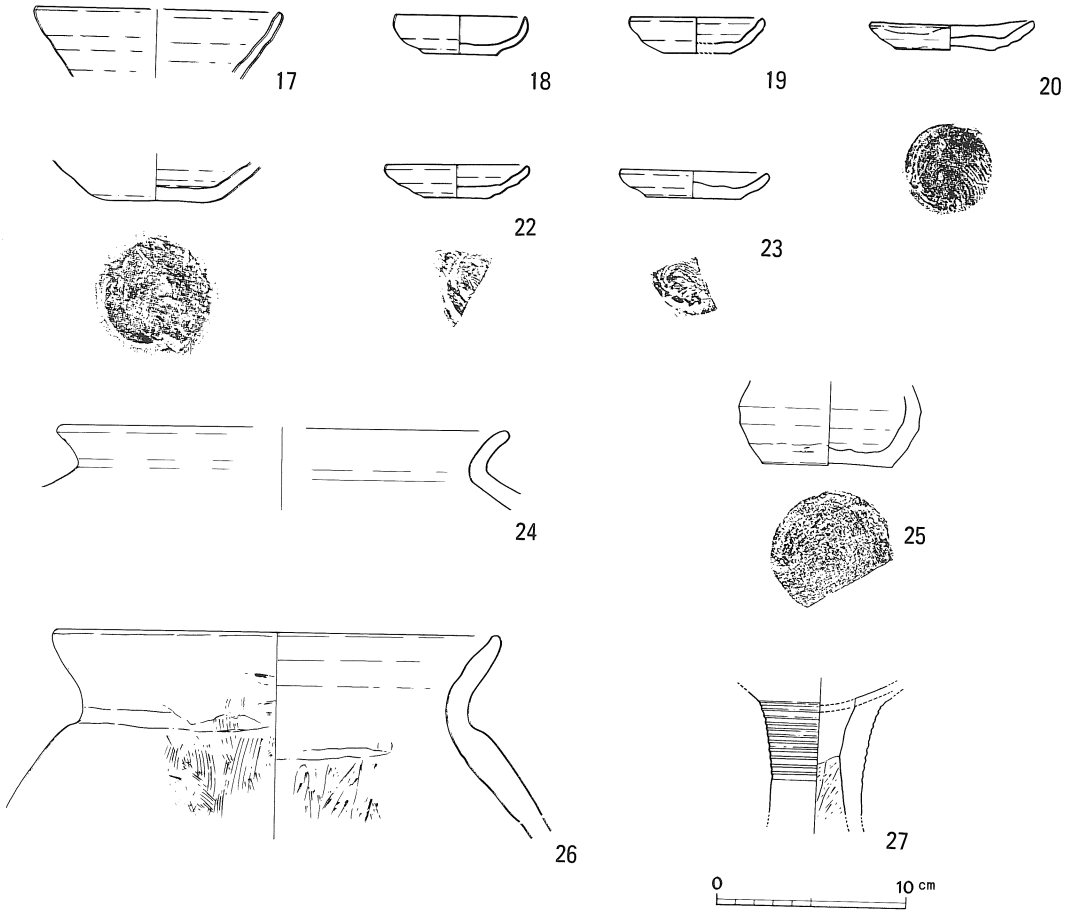
(17)～(23)は、土師質土器である、(17)は杯の口縁部で、直線的に開いている。(18)は、杯の底部で、糸切りである。(17)・(18)とも内外面ナデ調整である。(19)～(23)は、小皿である。(19)は、口縁端部が垂直気味に立ち上がり、全体的に丸みをおびた感じになっている。(20)～(23)については、口縁が直線的に開き端部外側を丸く収めている。(24)は、須恵器甕の口縁部である。口縁は、短く屈曲している。端部は丸く収める。(25)は、須恵器瑳の胴部と思われる。頸部より上は、欠損している。底部は、糸切りである。(26)は、土師器の甕で、口縁は単純口縁でくの字に屈曲し端部は、若干つまみ上げたようになっている。(27)は弥生土器で高杯の脚部である。脚上部は12条の凹線を廻らしている。内面下半分は、ヘラケズリである。

石器（第17図）

(1)～(7)は、砥石である。(1)は、上面は、かなり擦り減って凹んでおり、斜め方向の擦痕がある。その他の面も全面使用している。(2)は、右側面と上面を主に使用している。(3)は、



第15図　ＳＫ01出土遺物(1)



第16図　ＳＫ01出土遺物(2)

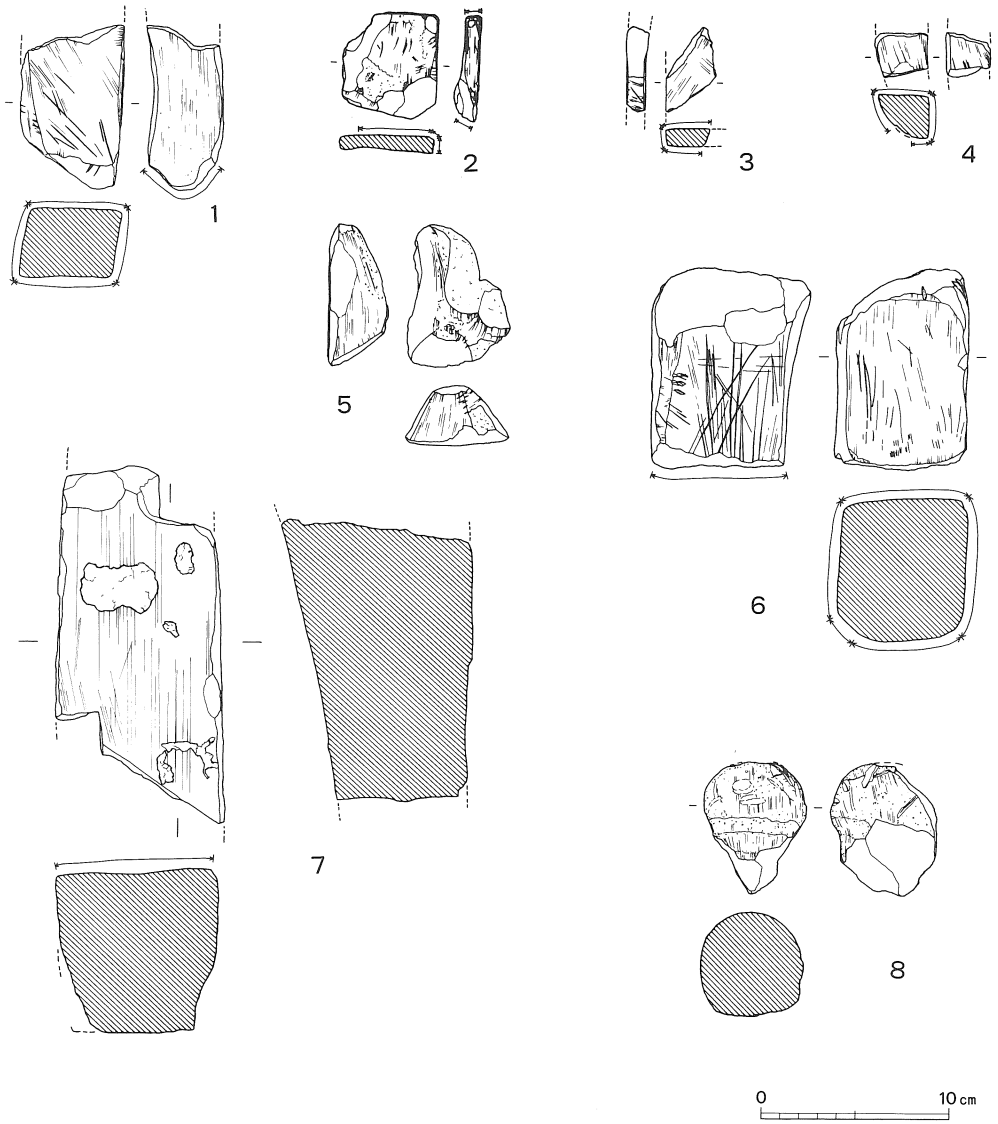
厚さ１㎜ほどのもので、欠損部分以外はどの面も使用されている。(6)は、上下左右の４面を使用している。特に上面はかなりの頻度で使用しており、弧をえがいている。そのほかの面は粗く刃を立てたような擦痕がある。(7)は、大きなもので上面のみ使用している。またこの面のみ２次焼成を受けており煤が付着している。(8)は、欠損しており全体的な形はつかめないが、上部を球形に加工しており、中央が括れている。用途は不明である。

木製品（第18図）

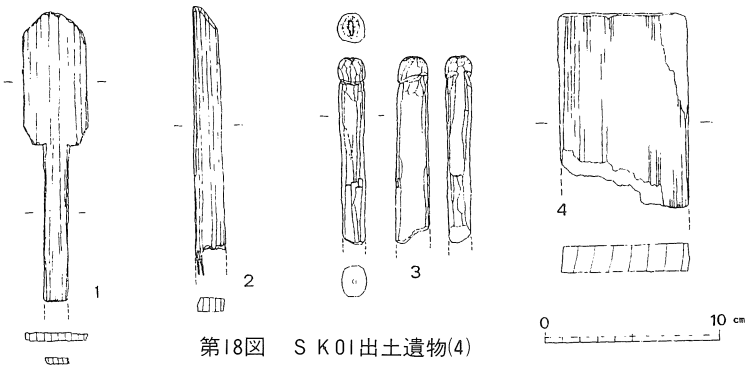
(3)は、陽物である。基底部は折れているが、現状で10.6cmを計り、断面は長方形に近く1.8cm×1.5cmである。全面削って整形しており、先端部には切り込みを巡らしている。また、先端部正面にも切り込みを入れている。(1)は、未成品か、何かの工具のようなものと思われる。(2)は、幅1.5cm厚さ８㎜を計る。欠損しているが、先端は斜めに切られていることから刀形の可能性がある。(4)は、幅7.4cm・厚さ1.5cmを計る、長方形の板材である。

古銭（第19図）

元禧通宝・元豊通宝・元祐通宝・銭種不明が１枚ずつ出土している。



第17図　ＳＫ01出土遺物(3)



第18図　ＳＫ01出土遺物(4)

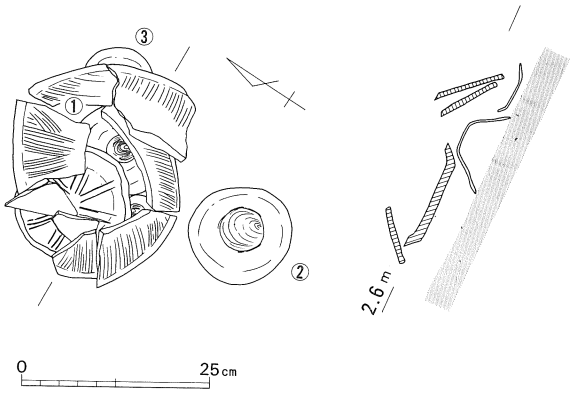
第19図　ＳＫ01出土遺物(5)

ＳＫ－01付近遺物出土状況（第20図）

土師質土器の杯・皿・擂鉢が重なり合って出土している。下には、杯と皿が杯(1)を真ん中にして並べられており、(1)・(4)に伏せておかれている。さらに、(1)・(4)に一部重なるようにして、擂鉢の底部がおかれている。これらを覆い隠すようにして、擂鉢の体部が口縁端部を下にして、立てられている。また、この土器群の南にも杯(2)が伏せて置かれている。

ＳＫ－01付近出土遺物（第21図）

(1)・(2)は土師質土器の杯である。両者とも口縁部は真っ直ぐ外方に開き、端部は直立気味に立ち上がる。底部は、回転糸切りによって離されているが、底部の縁は丸く滑らかに仕上げられており、再調整されているようである。体部もナデ調整しておりロクロ痕を消している。(3)・(4)は、小皿である。(3)は、口縁部がそのまま外方に短くのびる。(4)は口縁部が直立気味に伸び、内面は段がある。底部は(3)・(4)ともに回転糸きりである。(5)は、土師質の片口の擂鉢である。ＳＫ01から出土しているものと同様のものである。口縁部は、底部に対して123度の角度でほぼ直線的に開く。端部は外傾する平坦面を持ち、内側に肥厚している。外面は上半分はタテ方向の粗い刷毛目が施され口縁端部はナデ調整されている。下半分・底部外面は調整が施されておらず凸凹があるのみである。内面は、上半分は横方向の粗い刷毛目が施されており、下半分はナデ調整されている。擂目は、３本で幅１cmの単位をなし、合計10単位が施されている。内面調整の順序としては、刷毛目調整の後で、撫でによって（特に下半分は）平滑に仕上げた後、擂目を入れている。

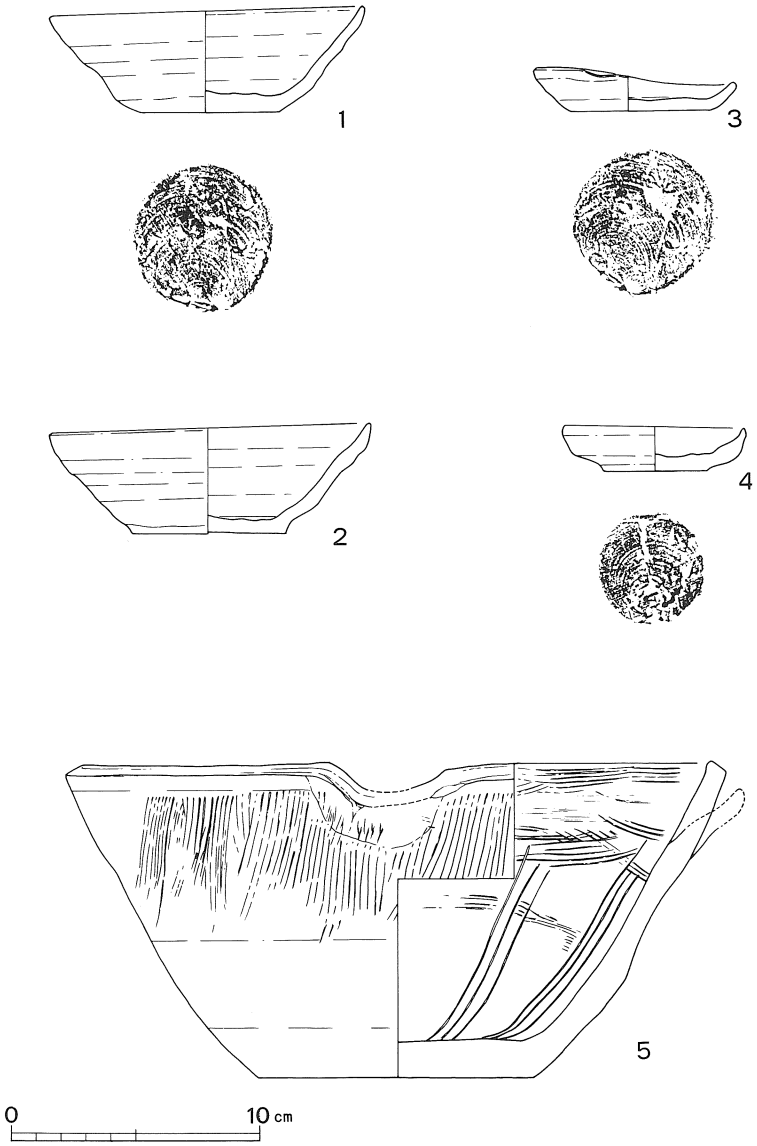


第20図　ＳＫ01付近遺物出土状況

ＳＫ－02

（第22図）

この土壙は、ＳＤ03とＳＤ09の間に位置しており、ＳＤ03と浅い溝でつながっている。南北3.85ｍ・東西3.65ｍを測り、墨丸方形に近い、不整円形を呈する。深さは65cmを測り地山の砂礫層まで堀込んでおり、湧水が激しい。出土遺物としては、土師器・須恵器小片や、１層より古銭が出土している。また、底から曲物やその他の木製品が出土している。

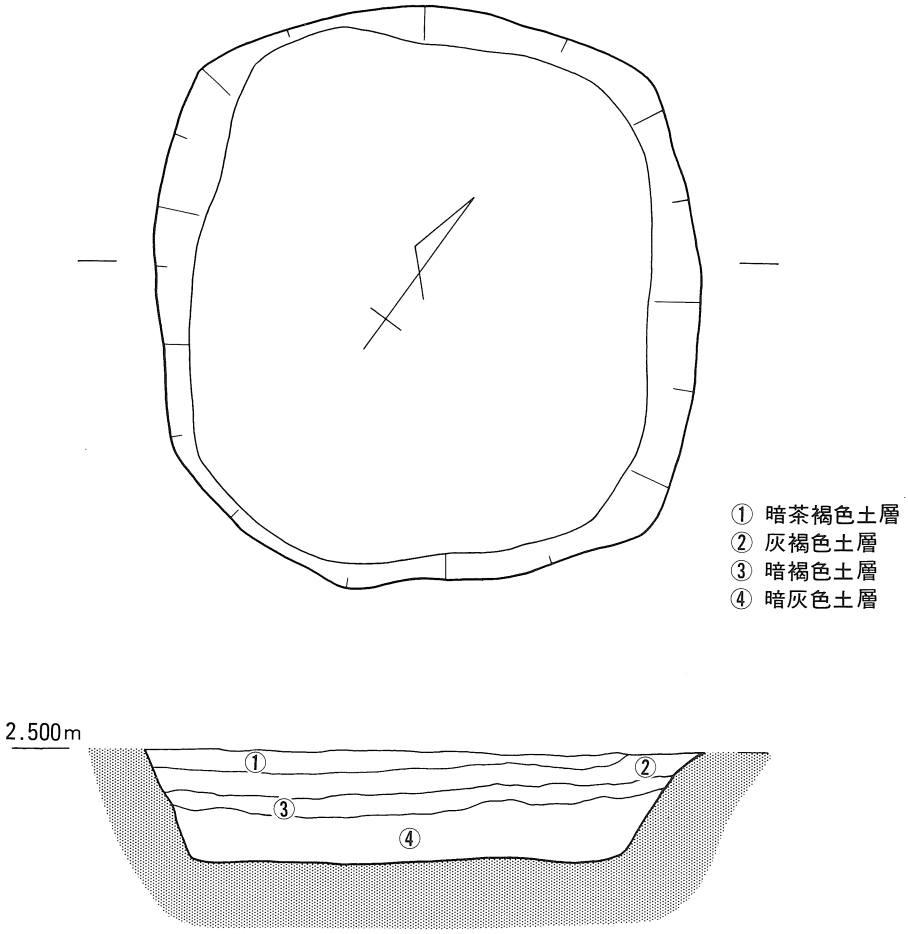


第21図　ＳＫ01付近出土遺物

ＳＫ－02出土遺物

（第22・24図）

(1)は、曲物である。直径19.4cm・深さ13.1cmを測る。厚さ２mmの板を２枚まいておりそれぞれ植物の皮で止めている。板の内側は、縦方向と斜め方向にキズのような切れ込みを入れている。底板は、半分のみ残っており、径18.4cm・厚さ８mmを測る。側面には、３か所の釘穴がある。木釘も２本残っており、２cmで中央が括れおり、ここに側面の板がはまるものと思われる。(2)も底板と思われるもので、復元した径で31.2cm、厚さ1.2cmを測る。釘穴は見られない。また。古銭が２枚付着した状態で出土している。１枚は熙寧通宝である。

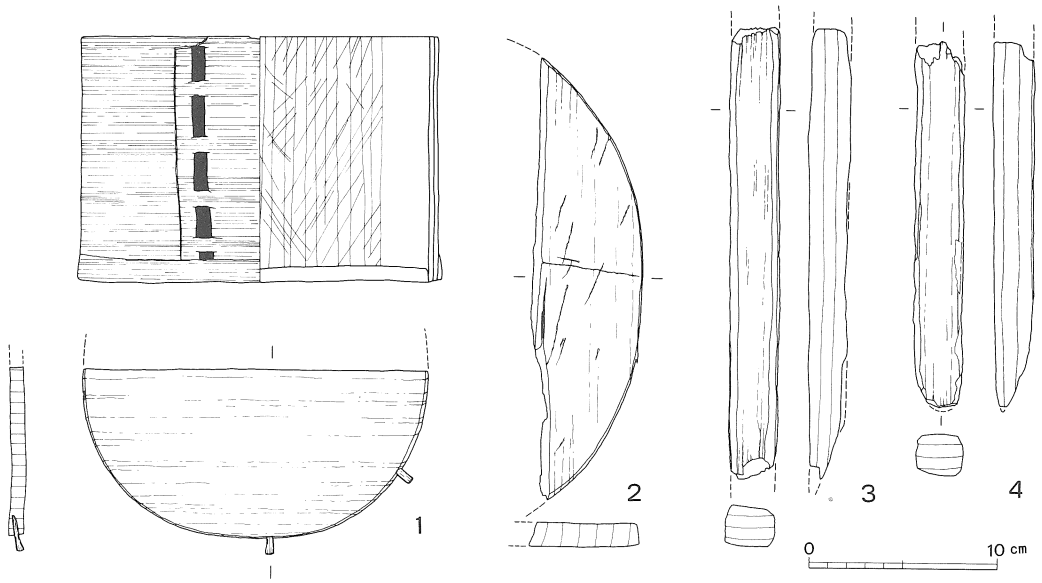


第22図　ＳＫ02

ＳＫ－03（第26図）

この土壙は、Ｅ－３区に位置し、南北2.2m・東西1.95mを測る不整形な楕円形を呈する。深さは78cmを測り地山の砂礫層まで達しており、現状ではかなりの湧水がある。土壙の南隅からは土器が集中して出土している。ほとんどの遺物が砂礫層の上面から出土しており、その他の遺物も灰褐色粘質土中から出土している。時期としては、古墳時代終末ごろと思われる。

また、土壙が埋まった後に、土壙の中央やや東寄りに幅90cm・深さ33cmの中世の溝（ＳＤ09）が掘削されている。



第23図　ＳＫ02出土遺物

ＳＫ－03出土遺物（第26図）

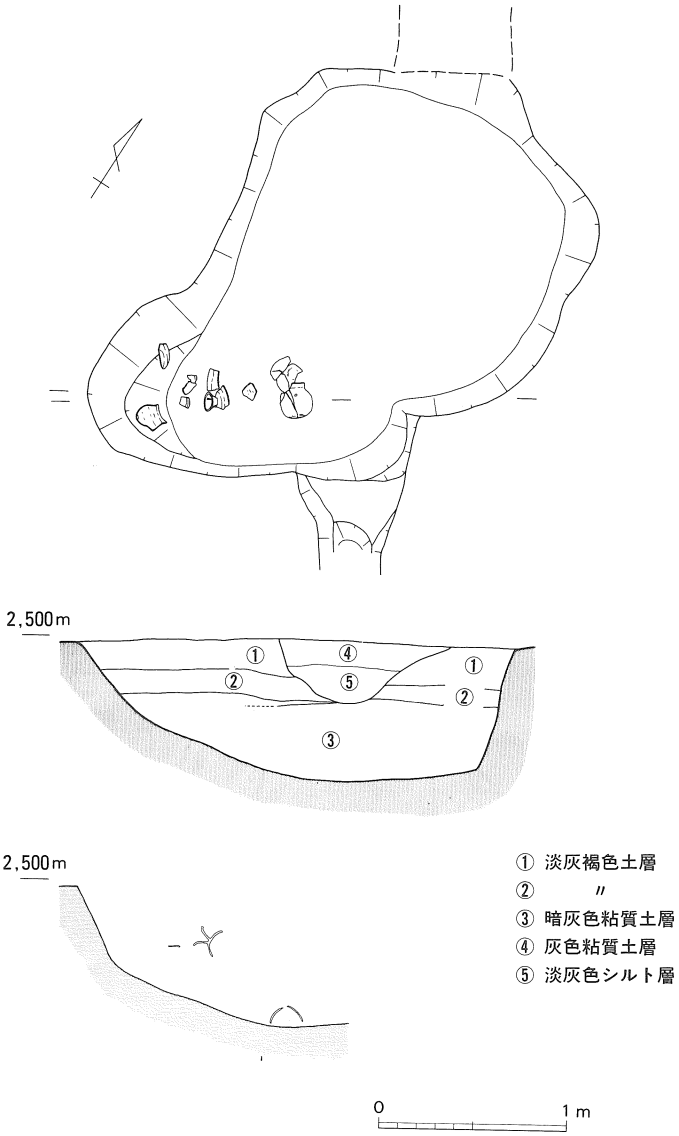
(1)～(4)は土師器の甕で、どれも短小な単純口縁を持つ。(1)は、胴部最大径が中央より下にあり、下膨れのプロポーションを呈し、底部は平らに近い。外面はナデ調整しているようで、刷毛目調整していない。また、外面には赤色顔料が塗布されている。内面は横方向の削りが施されている。(2)は、球形に近い胴部に斜め外方に短く直線的にのびる口縁部を持つ。調整は、口縁部内外面とも横ナデで、胴部外面は上部は縦方向の刷毛目が施されているが、下部は風化が著しく不明である。胴部内面は横方向のヘラケズリが施されている。また、胴部外面は二次焼成を受けており煤が付着している。(3)は、小形の甕でながぼそいプロポーションである。また、頸部が広く口縁は外方に折り曲げた程度の短いものである。外面は、２次焼成をかなり受けており、表面はかなり剝離しており、煤も付着していることから調整はわかりにくいが、縦方向の刷毛目が観察できる。内面頸部以下は横方向のヘラケズリされている。(4)は、甕の口縁部である。内面頸部以下はヘラケズリが施されており、その他はナデ調整されている。

第24図　ＳＫ02出土遺物

(5)～(7)は、須恵器で、(5)・(6)は蓋である。(5)は天井部ヘラケズリし、口縁部はナデ調整されており端部は薄くのびる。(6)は、内外面とも丁寧にナデ調整している。高杯(7)は、杯部は口径に対して浅く、底部は水平に開き口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は外方に折れる。杯部は一部ひしゃげた部分がある。脚は、ハの字状に開き端部は横におれ外側に平

坦面を持つ。また上端で0.6cm下端で1cmの台形の透かしが1カ所設けられており、その反対側には長さ3.1cmの切り込みが入れられている。

(8)は砥石である。上面は断面三角形を呈し、両斜面ともに擦痕がある。下面は、両側から粗く削り出すことによって凸状にしており、細かい溝や削ったような跡がありかなり荒い仕上げとなっている。この凸状部分は残りの良い所で高さ1cmほどある。また、幅1.5cmほどの両側面も砥面として使用しており、右側面には、刃を立てて砥いだような溝が3本ある。

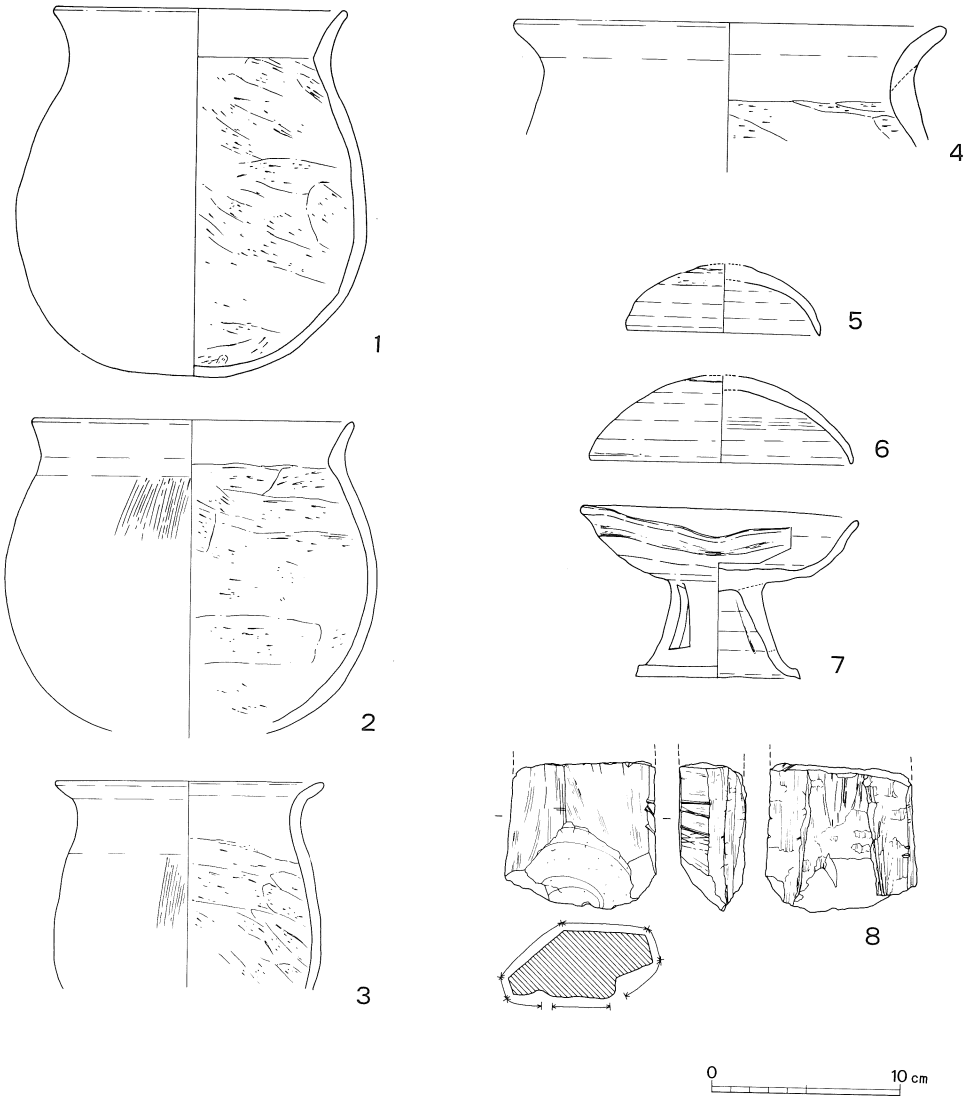


第25図　ＳＫ03

ＳＫ－04（第27図）

この遺構は、調査区の中央西側に位置している。南北4ｍ・東西3.4ｍを測る不整形な楕円形を呈する。土壙は2段に掘られており、内壙では南北3.3ｍ・東西3.2ｍを測る。土壙の壁のラインは1段目の深さは18cmでほぼ垂直におち、2段目の深さは最も深いところで65cmを計り皿状に堀り込んでいる。土壙の底には、厚さ15cmで灰白色の粘土を貼っており、その上に厚いところで16cmの植物層が全面にある。

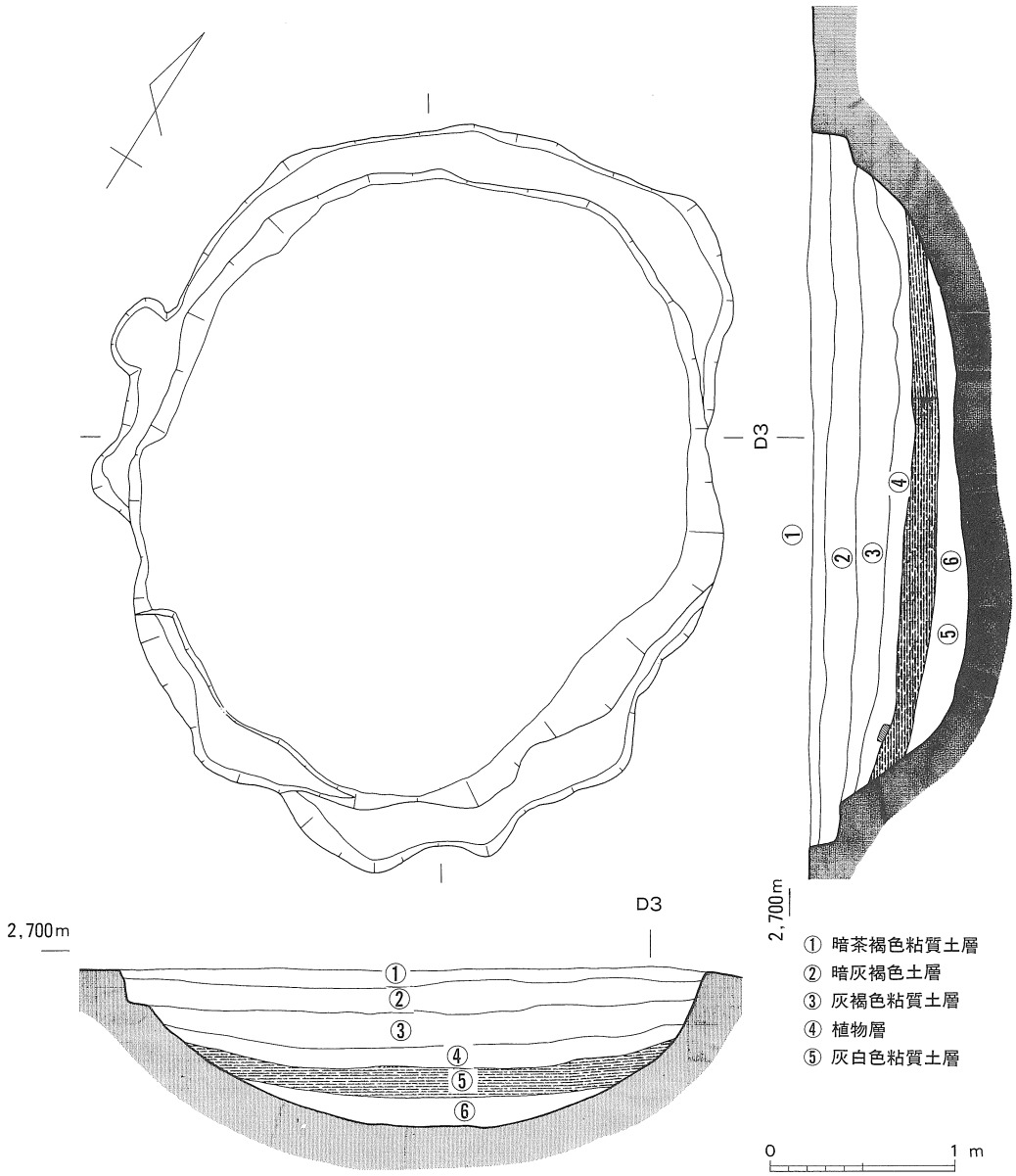
この植物層は、表面のみ炭化しており黒色を呈していたが、表面をはぐと黄褐色を呈している。特に編んだようなところは観察されず、敷き積められたかのようになっている。この層の上面、また中にも、籾が含まれている。



第26図　ＳＫ03出土遺物

遺物としては、古銭（銭種不明）・木製品・漆器・木簡が、植物層より出土している。また、埋土より土師質土器・常滑焼の小片が出土している。時期としては、中世（14世紀初）と思われる。

この遺構の性格としては、木簡の内容や籾が出土していることから、種籾の貯蔵穴の可能性が考えられる。



第27図　ＳＫ04

ＳＫ－04出土遺物（第28図～30図）

(1)は、欠損しているが厚さ５㎜と薄いもので、角を丸く仕上げている。(2)は、幅4.5cm・厚さ４㎜と薄いもので、片側には５㎜ほどの抉りが施されている。(3)は、長さ19.6cm・幅7.2cmを測り、断面長方形の板材である。(4)は、斜め方向に刃物による傷が付けられており、曲

物の一部と考えられる。

⑸は、長さ28.8cm、幅は中央で3.5cm、端で2.7cmを測る。中央部分が膨らみ、端部の幅が狭くなるもので、表面は丁寧に仕上げられている。上下に一つずつ５㎜程度の不整形な孔が貫通している。⑹・⑺は、上下に２対つずつ抉り持つもので長さ23cm・幅3.4cmを計る。板の表面は、わりと粗い仕上げとなっており字の書けるような状態ではない。墨痕も残っておらず木簡ではないようである。⑻は、長さ28.8cm・幅4.3cmを測る。中央よりやや下に切り込みが入れられている。

⑼は、欠損しており全体の形は不明であるが、断面長方形に近い加工木で、下部は斜めにカットされている。⑽は、幅11cm厚さ５cmの加工木である。植物層の上面にのったかたちで出土している。⑾は、長さ32cm・径４cmを測る杭で、樹皮が残っていることからも、先端部のみを加工している。先端部はさほど鋭くはない。⑿は、幅3.5cm、⒀は、幅2.5cmを測る加工木で端部が斜めにカットされている。

⒁は、欠損しており一部分しか残っていないが、片方だけを斜めにカットしている。

⒂は、長さ30cm、幅５cm、厚さが厚いところで３cm・上部では1.6cmを測る。表面は、平坦で左側上部には刃物で削った加工痕が残るが、その外は滑らかに仕上げられている。裏面は、下部の断面は、凸状になっており、真ん中当たりから上部に向けてこの突出した部分が徐々に薄くなり、断面が長方形に近くなっている。また下から　　cmのところには、Ｕ字形の抉りがは行っている。上端で6.3・下端で3.5cmを測り、刃物で削って加工されている。上部は欠損しているが、ここにも抉りがあったようで斜めに削り込まれている。

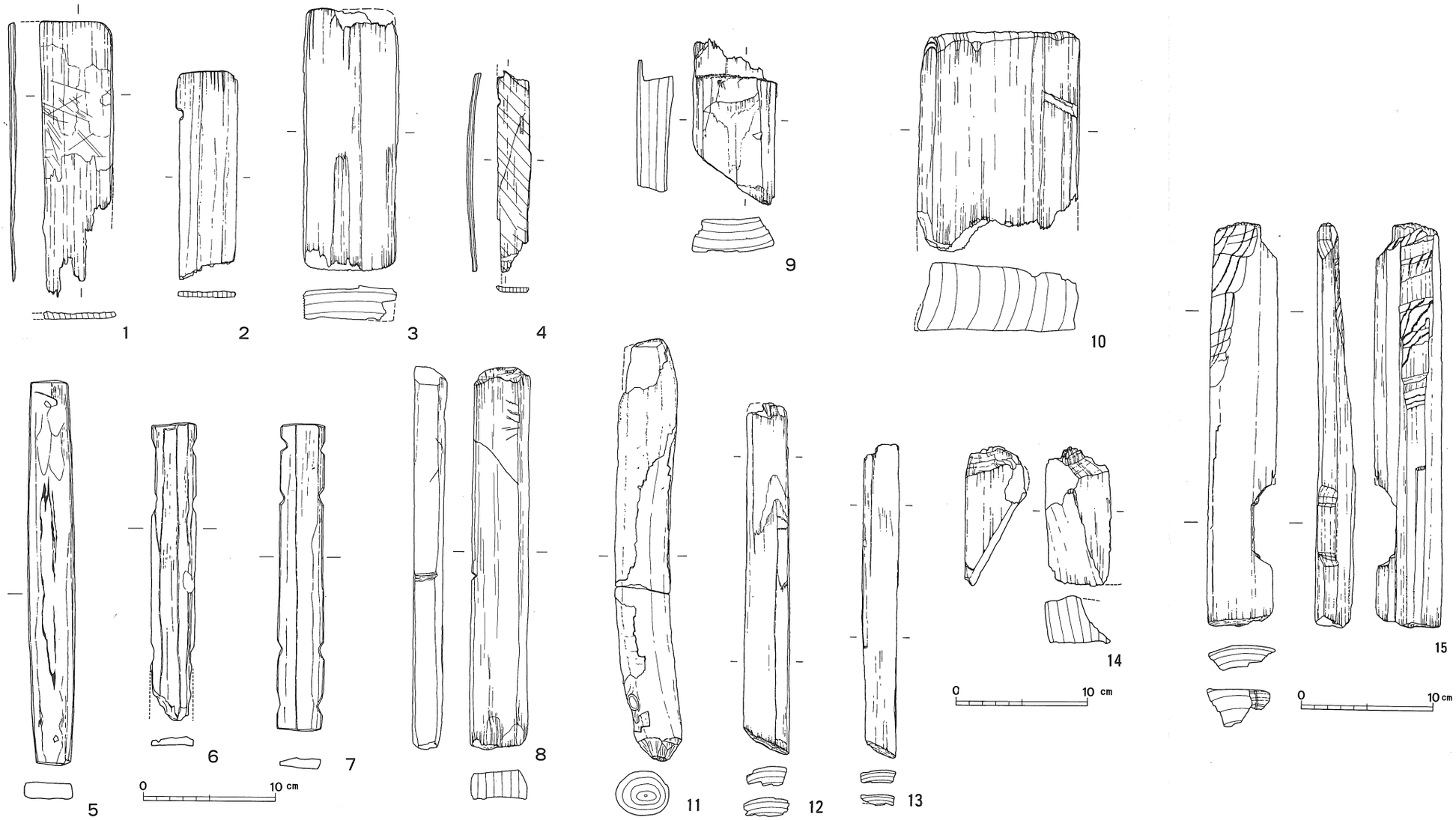
⒃は、長さ35cm、幅13cmを計り、この遺構から出土した木製品の中では、最も大きなものである。表面は、上下に縁があり皿状になっている。裏面は、滑らかに仕上げられており、上下は丸く仕上げられている。

⒄は、漆椀である。植物層の上面に乗る形で出土しており、土圧で潰れており、口縁部も残っていない。高台部分は、幅３㎜、高さ２㎜と非常に小さく削り出されている。模様等は描かれておらず、高台の内側は、漆が塗られていない。

ＳＫ04 出土木簡（第31図）

欠損しており全体は不明であるが、幅2.4cm、厚さ５㎜現状で長さ11.3cmを測り、下端は尖らせている。文字を書きやすいように、表面は非常に丁寧な仕上げとなっている。

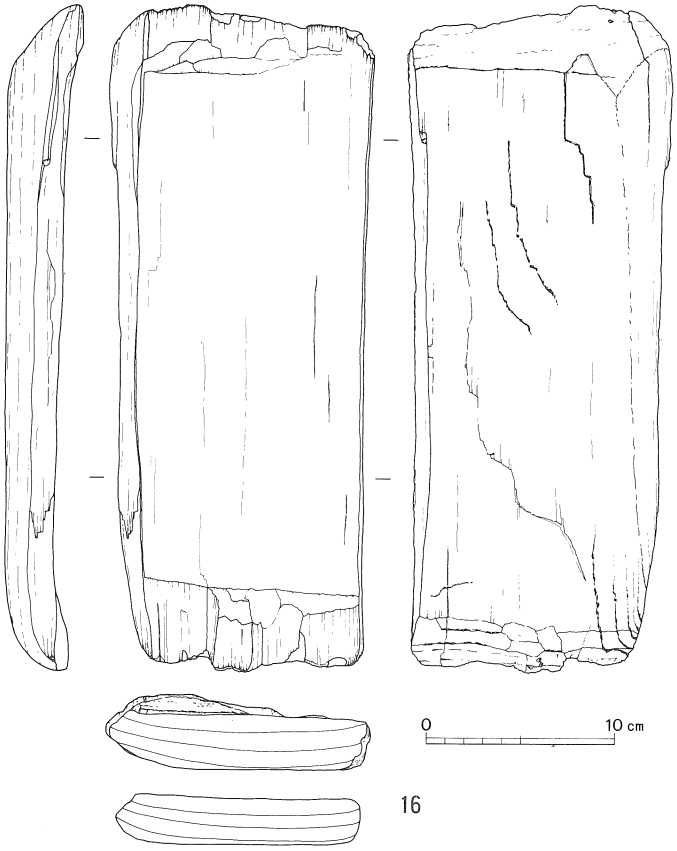
文字は、８文字確認でき全て平仮名である。上部の欠損した部分にも文字があった可能性はあるが、「ち」の上には、４㎜ほどの空白部分があることから、この「ち」より一連の



第28図　ＳＫ04　出土遺物(I)

単語が始まると考えられる。

この木簡の意味であるが、「つぼ」は、場所（田んぼ）を、「たね」は種籾を意味する。「ちやく」は、よく判らないが、全体の意味合いから地名の可能性が考えられる。そう考えると、ある特定の田に蒔く種籾と言う言葉になる。実際にこの土壙からは籾がかなり出土していることからすると、この土壙は種籾の貯蔵穴で、その標として使用したものと考えられる。



第29図　ＳＫ04　出土遺物(2)

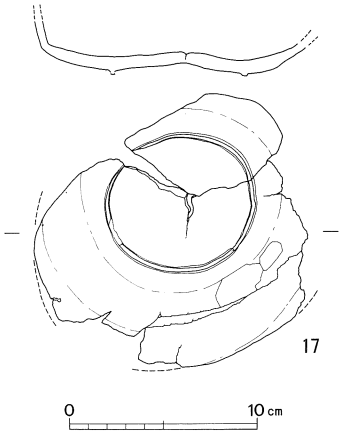
ＳＫ－05（第32図）

この土壙は、ＳＫ04の南に位置し、直径が1.9ｍを計る不正円形を呈し、深さは63cmを計る。堀形は、深さ62cmまでほぼ垂直に落ち、底は皿状を呈する。北側の一部をピットによって切られている。埋土は４層からなり全体に遺物を含んでいる。土師器・須恵器の小片が多く出土しているが、常滑焼の破片が数点出土している。

ＳＫ－06（第13図）

この土壙は、ＳＫ01の東側に短な溝でつながれた土壙で、ＳＫ01やＳＤ02とともに一連の遺構である。直径4.1ｍを計る円形の土壙で深さは48cmでＳＫ－01と同じ深さである。土層の堆積状況も共通しており、最下層の暗黒茶褐色土の上部には植物が含まれている。土壙の南側には、ＳＫ01と結んでいる。溝と同幅・同深さの段があり、これがそのままＳＤ

02へ移行する。ＳＫ01からのびるＳＤ02の北側にＳＫ06が設けられていると言える。土層や出土遺物などからは、ＳＫ01，ＳＤ02，ＳＫ06は、同時期の一連となった遺構であるが、ＳＫ06は、後から、設定された可能性がある。また、この土壙よりＳＤ03が北に延びている。



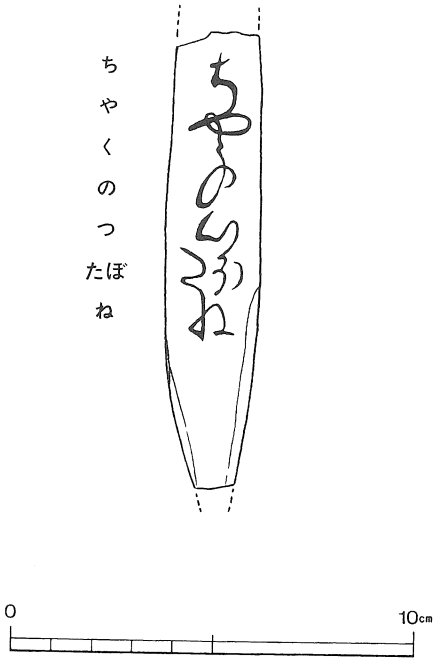
第30図　ＳＫ04出土遺物(3)

ＳＫ07（第13図）

この遺構は、ＳＫ06の東側に隣接しており、ＳＫ06とＳＤ01に切られている。不整形なプランで、規模は東西1.5ｍ・南北1.25ｍ・深さ85cmを測る。ゆるやかに傾斜し底は、皿状を呈する。ＳＤ２は、褐色砂礫層から掘り混まれており、灰褐色粘質土の上面が溝の底となる。

ＳＫ－08（第33図）

この土壙は、調査区の西端のＳＤ01とＳＤ11の間で検出された、調査区ぎりぎりで検出されたため、西側は調査区外に、南半分は暗渠によりすでに失われている。残存している部分は、東西3.76ｍ・南北2.37ｍ・深さ0.9ｍを測る。土壁深さ40cmの当たりからほぼ垂直に落ちている。底は地山である砂礫層まで達している。出土遺物は底から差し歯の下駄と漆椀が出土している。



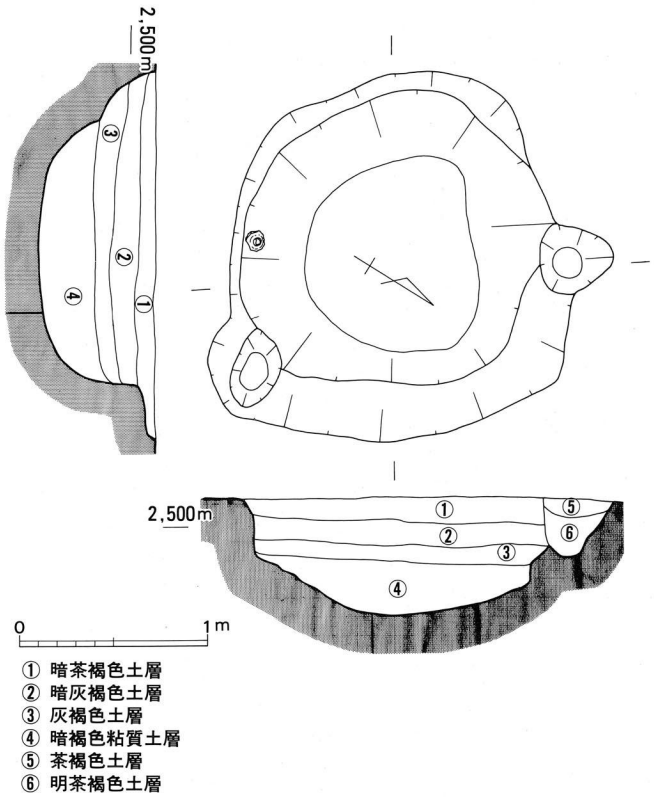
第31図　ＳＫ04出土木簡

ＳＫ08　出土遺物（第34図）

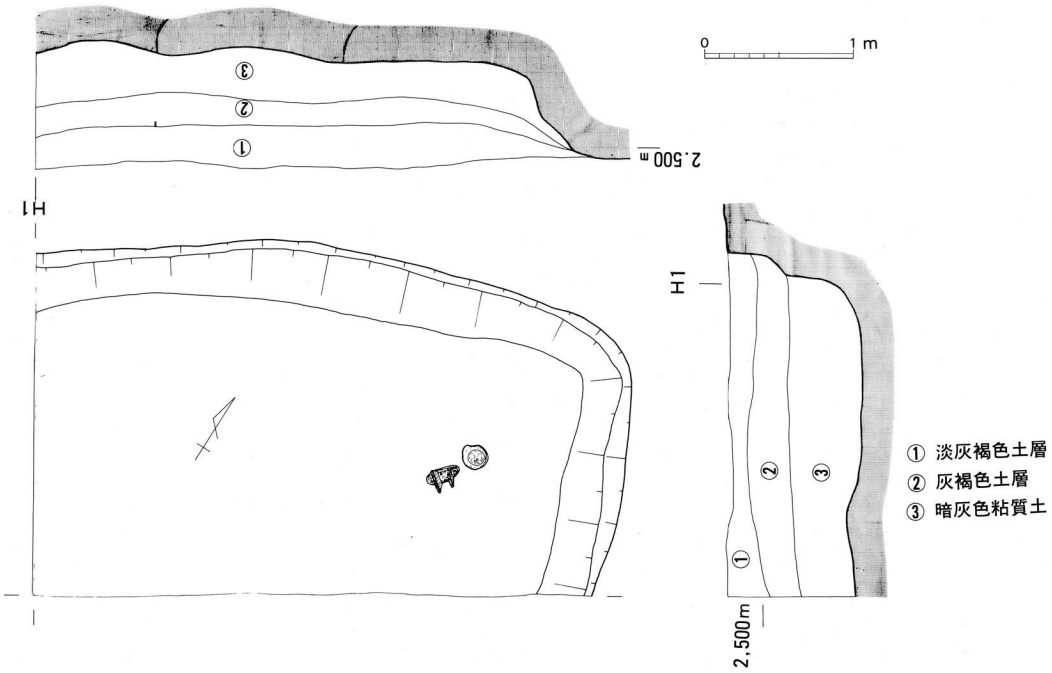
(1)は下駄で、台部に歯部を差し込む差歯下駄である。台部は長さ23cm、最大幅10cm、厚さ3.1cmを測り、一つの歯に対して２か所の穴が2.3cm×１cmの大きさで貫通している。台部は非常に丁寧な仕上げをしており、加工痕は残っていない。歯は、上部8.5cm、下部16cmの台形を呈し、厚さは1.5～２cmを測る。歯は前傾して台部

に装着されている。また、前歯には記号状の切り込みがある。

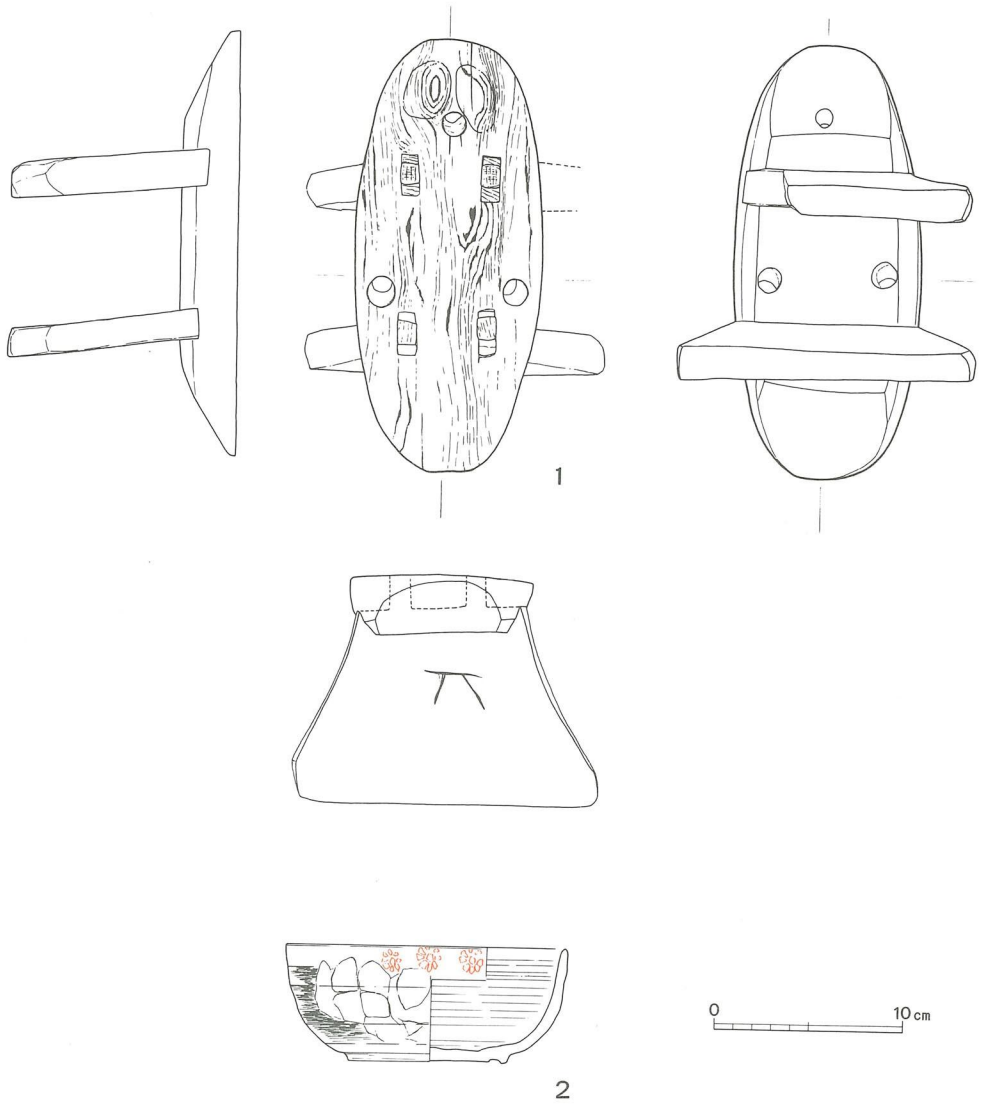
(2)は、漆椀である。内外とも黒漆を塗り、口縁部に花模様をスタンプしている。外面には、加工痕がよく残っている。



第32図　ＳＫ05



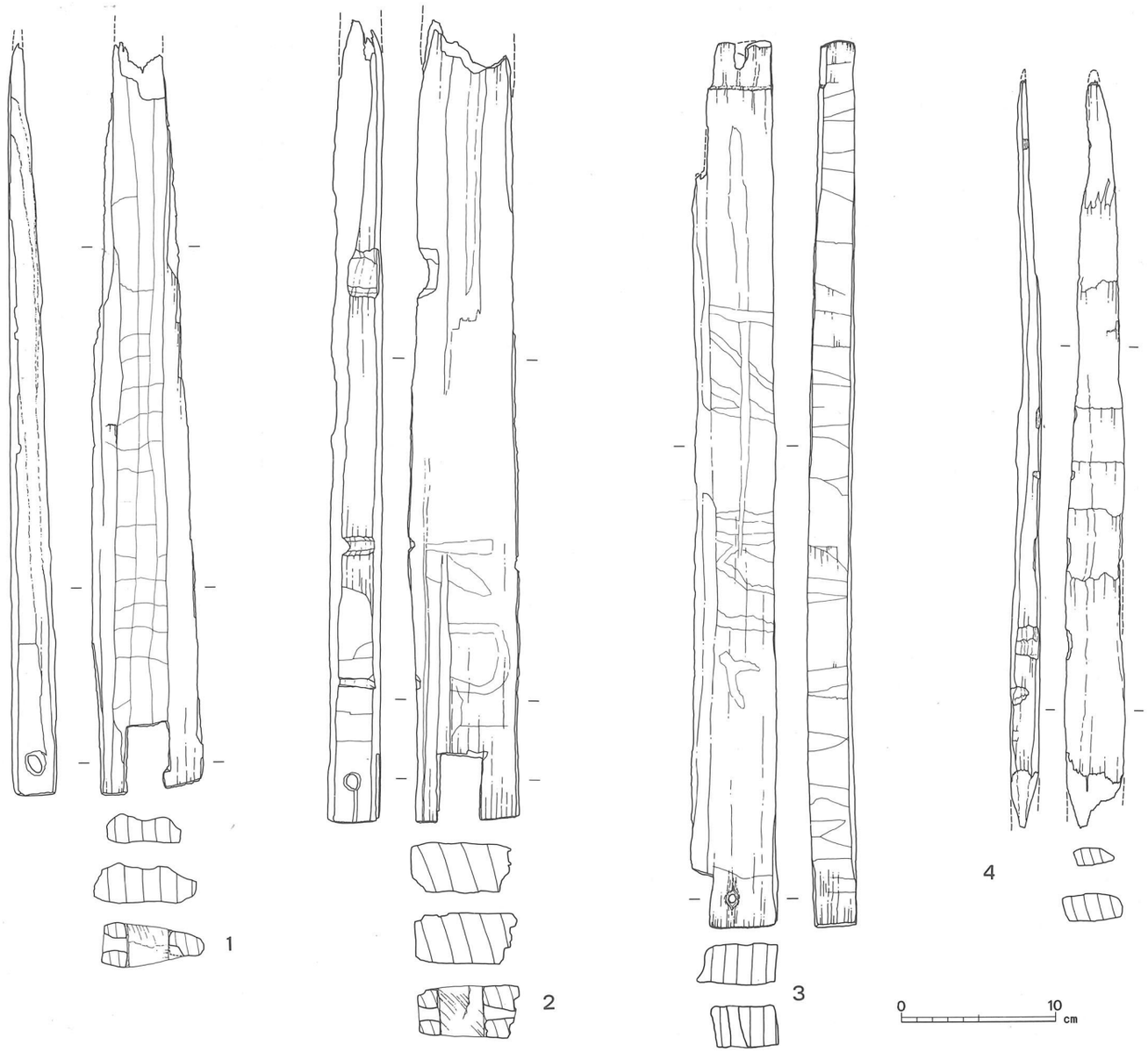
第33図　ＳＫ08



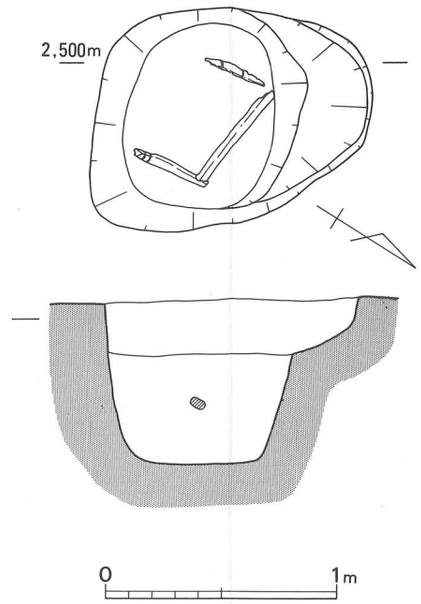
第34図　ＳＫ08出土遺物

ＳＫ－09（第35図）

この土壙は、調査区北端で検出しており、ＳＤ05の北に位置している。径1.8ｍ・深さ70cmを測る。東側は、二段になっているが、２段目は、径80cmで、壁は垂直に近い。また、土壙内からは、井戸枠の部材の可能性が考えられる木製品が出土しており、井戸であった可能性がある。これら３つの部材は、組んだ状態で検出されている。井戸とすると、これら



第36図　S.K09　出土遺物(I)



第35図　S K 09

の部材より、内包で50cmの正方形の井戸枠が想定される。

ＳＫ09出土遺物（第36・37図）

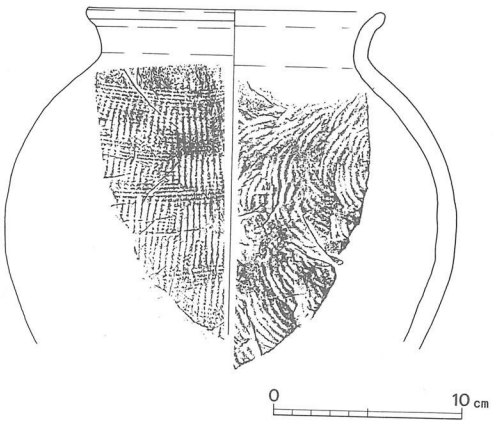
木製品以外に、須恵器の甕が出土している。体部は、球形に近い丸底である、口縁部は、くの字に屈曲くし、端部は、外側に折れ丸く収める。体部外面は、タタキ目の後カキ目が施されている。内面は、同心円のタタキ目、口縁内外面はともにナデ調整である。

木製品

(1)は、現存長48cm、幅6.5cm、厚さ３cmを測る。欠損しており完全には残っていないが、片側には、幅2.5cm・長さ４cmの凹枘が設けられている。また、この枘の中央部には、両側面から貫通孔が穿たれている。おそらく反対側にも同様の凹が設けられていたものと思われる。(2)も(1)と同じもので、(3)は、(1)(2)の凹枘にはめ込まれていたもので、ほぼ完全に残っており、全長57cm中央部で幅5.1cm・厚さ2.7cmを測る。図の上端は片側をカットしており、側面も若干薄くしている。(4)は、現存長48cmで、幅は４cmであるが徐々に幅が狭まり片方は尖っている。

ＳＥ－1（第38図）

この井戸は、堀形は南北1.1ｍ・東西1.2ｍを測る不整円形プランを呈し、西側は２段になっており、内側で東西0.8ｍを測る。深さは0.9ｍを測り、地山の砂礫層まで達しており、底で標高1.62ｍで現在もかなり湧水がある。

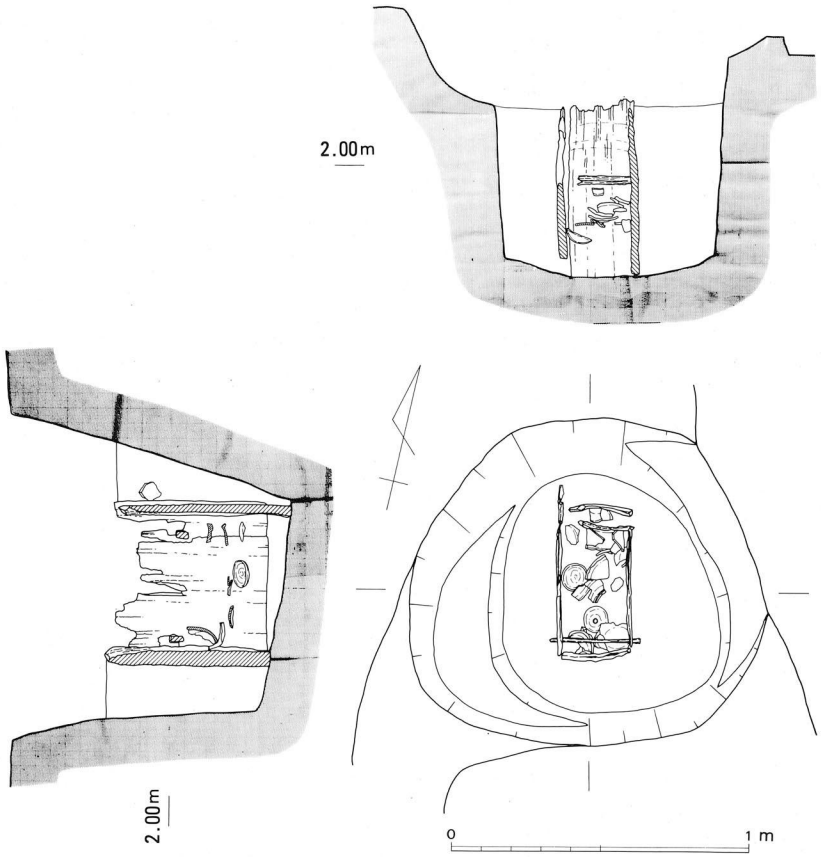


第37図　ＳＫ09出土遺物

土壙の中央には、水溜部分と考えられる４枚の板からなる長方形の枠が残存している。水溜は、縦48cm・横24cmの長方形で、深さは上部は腐蝕しているが現状で58.5cmを測る。板の組み合わせは、小口板を側板で挟み、側板にはほぞ穴が設けられておりそこに横木が渡してあり側板が内側に倒れ込まないようになっている。ほぞ穴は、側板の下端から30.5cm・横端から2.6cmのところに、現状で縦6.6cm・横3.7cmの大きさである。腐蝕が著しいため、本来は小さなものであったと思われる。各板の厚さは1.5～２cmで、小口板は断面がＵ字形になっており、内側は凹でいる。各板の下部約20cmは地山の砂礫層に埋め込まれている。

水溜と土壙の壁との間には、黄褐色の粘土が裏込め土として入れられている。

また、板の下端より、22.5cmの所が内側の底（砂礫層）になっており、砂礫層には土器がふくまれている。土器は、須恵器の蓋杯や土師器の甕などが出土しており、どれも完形に近いことから、井戸祭祀を行ったときに投げ込まれたものと考えられる。



第38図　ＳＥ－１

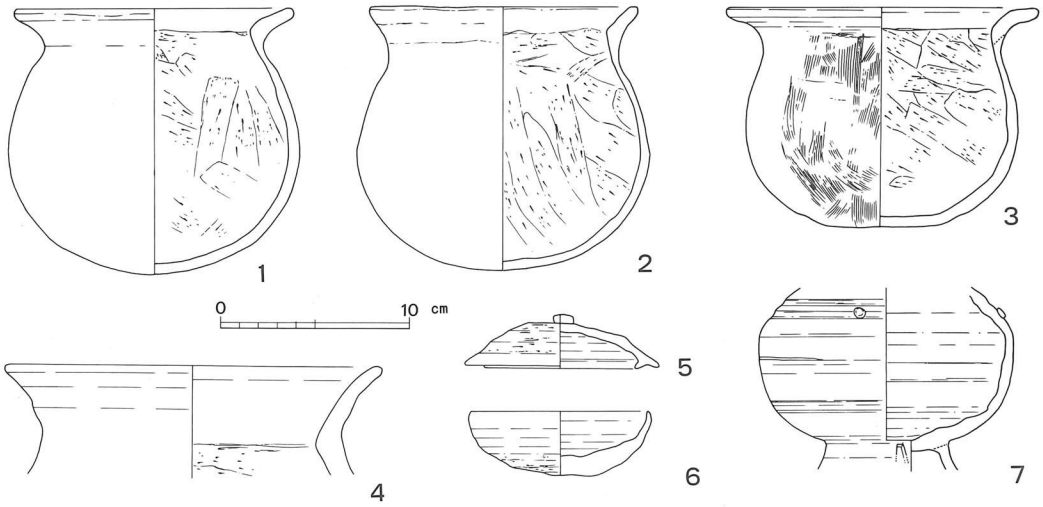
ＳＥ－1出土遺物（第39図）

(1)～(4)は、土師器の甕である。(1)(2)は、大きさ形態とも共通しており、口径15cm・深さ14cmである。口縁部は、短く外反し内外面ともナデ調整している。胴部は最大径が真ん中より下半にあり、下膨れの様相を呈する。また、外面は全面２次焼成を受けており黒色を呈する、そのため外面調整はよく判らない、内面はヘラケズリしている。

(3)も、(1)(2)と共通した形態であるがやや浅いものである。口縁部は短く外反し、胴部は最大経17cm・深さ12cmを計り深さよりも胴部最大経のほうが大きい。調整は、口縁部内外

面ともナデ調整、胴部内面はヘラケズリ、外面は縦方向の刷毛目を施す。

(4)はやや大形の甕である。口縁部は、直線的に外方に伸び、端部がやや折れる。口縁部内外面ともナデ調整、頸部以外内面はヘラケズリしている。(5)(6)は、須恵器の蓋杯のセットで共に完形品である。(5)は口縁部内面に反りがあり、天井部ヘラケズリの後で宝珠状のつまみを付けている。(6)は外面下半分はヘラケズリしているが、そのほかはナデ調整である。(7)は、脚付壺と思われるもので、胴部と脚の一部が残っている。胴部はほぼ球形を呈し、肩に2条の凹線を施しており、下段の凹線にかさなるようにして円形浮紋が3か所に付けられている。脚は、下部は欠損しているが、ハの字に開き、方形の透かしが設けられている。



第39図　ＳＥ－1出土遺物

ＳＥ－2（第40図）

この井戸は、西側調査区Ｅ－5に位置する。井戸の堀形は、南北1.38ｍ・東西1.67ｍをはかる不整円形プランを呈する。西側は、２段になっており内側で東西1.22ｍを測る。深さ0.82ｍで底は地山の砂礫層である。井戸２と同じように湧水がかなりある。土壙の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

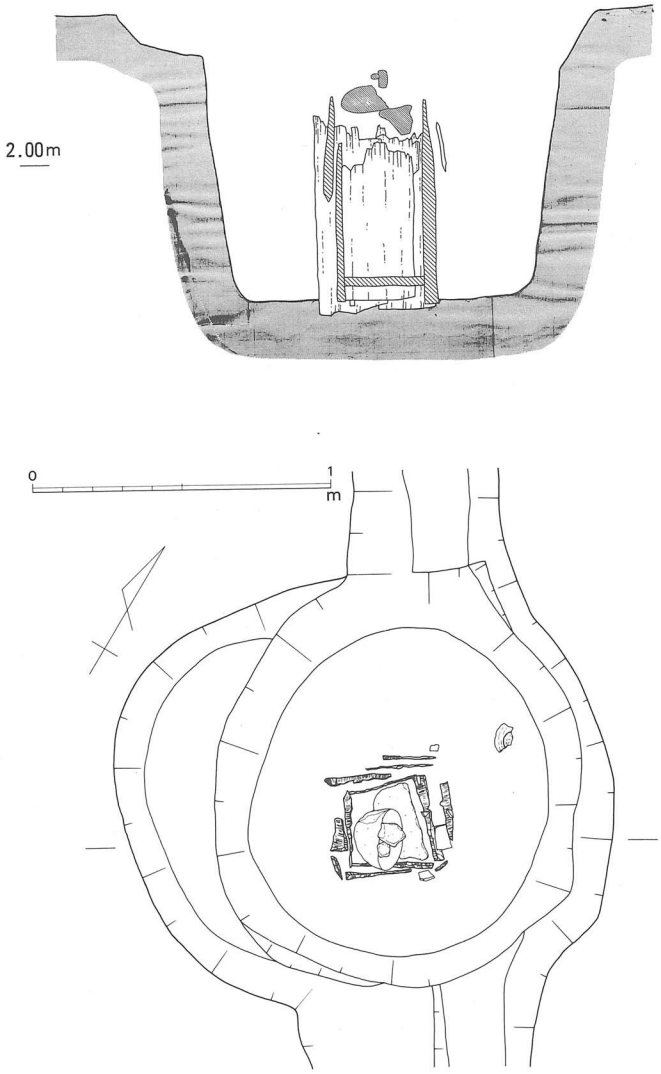
土壙の中央には、板で組まれた正方形に近い水溜がある。水溜の規模は、大きいところで内包が南北40cm・東西43cmを測る。深さは、上部は腐蝕が著しいが、現状で70cmを測る。構造としては、４枚の板で組みさらに外側にも板を立てており、２重から４重に成っている。最も内側の板と北側の外から３枚目以外は井戸の底まで達しているが、それ以外は達しておらず、また、板の底辺を両側から削って尖らせていることから、後から打ち込んだ

ようである。

西側と東側のいたには、横木を挿入するためのほぞ穴が、下から5.8cmのところに設けられている。ほぞあなの大きさは、4.3×2.4cmで貫通している。横木は、長さ33.5cm・断面1.7cm×2.8cmである。またほぞ穴に挿入される部分は、端から5cmの部分に刳込みが施され、断面2cm×3cmである。

板は、地山の砂礫層上面よりさらに8cm下まで達している。この水溜は、砂礫層を堀り込み設定したものか、あるいは砂礫層上面から打ち込んだものかは判らない。砂礫層より上は、粘土で裏込めしている。

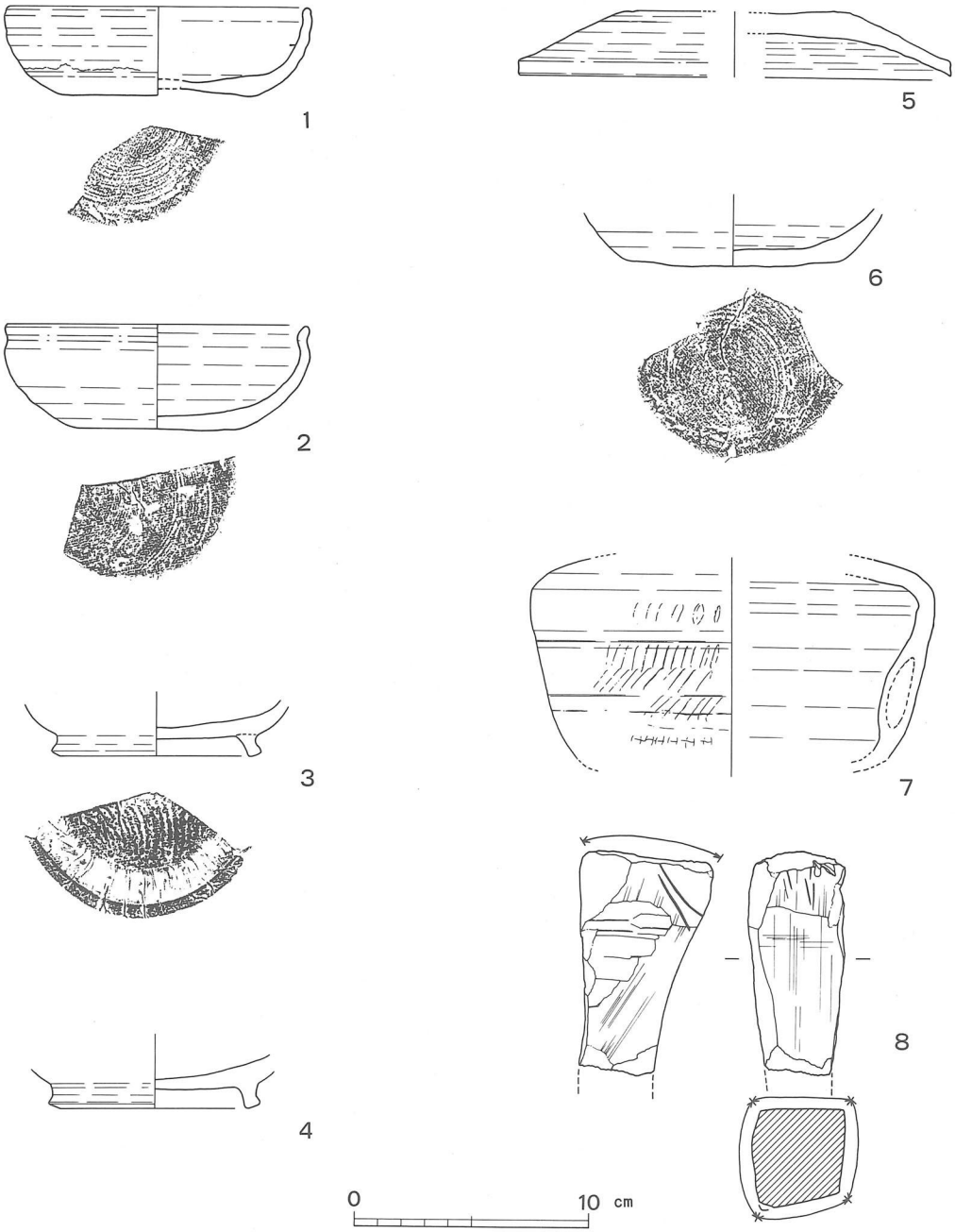
水溜内・裏込め土内から土師器・須恵器片が多数・砥石が1点出土している。また、井戸を埋めた後に石を上に載せていることから、廃絶時に井戸祭祀が行われた可能性が考えられる。



第40図　ＳＥ－2

ＳＥ－2出土遺物（第41図）

(1)・(2)は、無高台の杯で、(2)は、口縁部が括れて端部が外側に折れている。(1)も明瞭ではないが端部が折れている。いずれも底部糸きりである。(3)・(4)は、高台付きの杯の底部と思われるもので、断面方形の高台が開いて端部は、若干外側に肥厚している。(5)は、蓋である。天井部は平らで、口縁部は、屈曲せず端部は外側に面を作っている。(6)は、器種は不明であるが、底部の破片である。底部糸きり内外面ナデ調整である。(7)は、長頸壺の



第41図　ＳＥ－2出土遺物

胴部で、(8)は、砥石でややいびつな長方体で、４面を使用している。

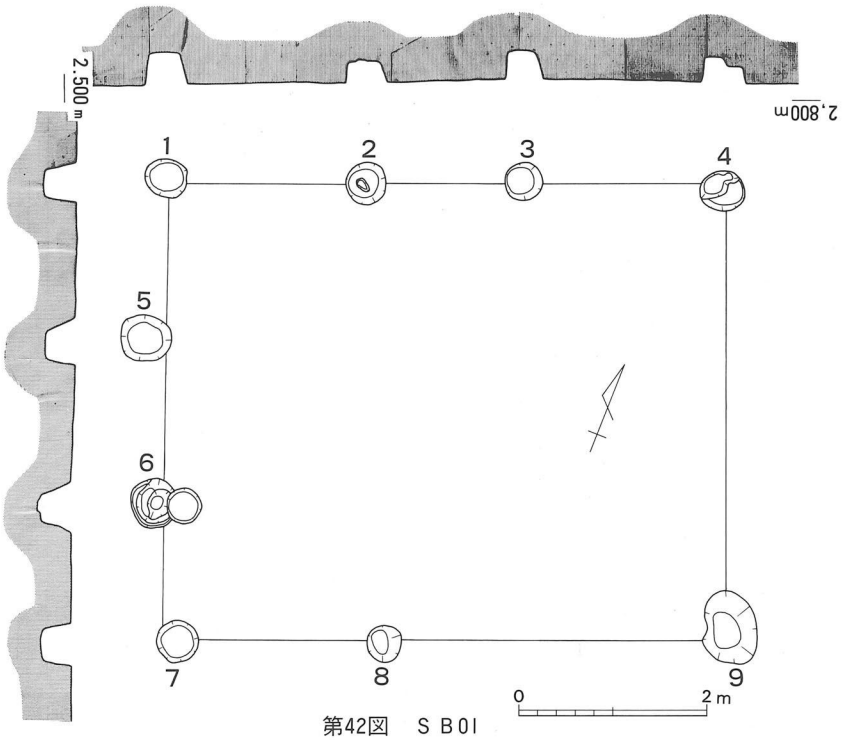
ＳＢ01（第42図）

調査区の北西隅に位置しており、西側調査区の中では、遺構はそれ程密集していない。屋敷地を囲む溝の内側に位置しているものの、柱穴の埋土からこの溝に伴うものでない。

規模は、３間３間で、6.36ｍ×5.32ｍを測る。柱穴は径45㎝前後で、南東隅の柱穴の残りが悪く、いびつな形で、また、北東コーナーの柱穴は、２段に掘られている。柱間は、Ｐ１～Ｐ２が1.6m、Ｐ２～Ｐ３が1.25m、Ｐ３～Ｐ４が1.7m、Ｐ１～Ｐ５は、1.3m、Ｐ５～Ｐ６は1.25m、Ｐ６～Ｐ７が１ｍ、Ｐ７～Ｐ８が1.7m、Ｐ８～Ｐ９が２ｍを、東辺は、両端のみしか柱穴がなく4.05ｍを測る。1.12～1.78ｍと不揃いであるが、1.3ｍ・1.7ｍ前後の２つに大きくは分類できる。

遺物としては、柱穴より須恵器片１と土師器の坏・甕と思われる小片が出土している。また、この遺構に直接伴うものではないが、Ｐｉｔ９の付近から土師質土器の皿が出土している。(2)は、底部は水平で、口縁部は、鈍角に開く。(1)は、底部から口縁部にかけて、丸みをもって移行する。両者とも底部には、指頭圧痕があり、内外面とも朱が塗られている。これらの土器によく似た小片が、Ｐｉｔ２から出土している。

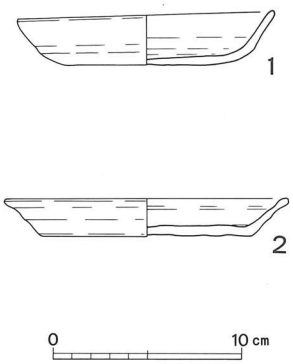
また、柱穴の埋土は、暗黒茶褐色土で、屋敷地を区画している溝の埋土である黒色土とは違っており、この溝とは、時期を異にする。



第42図　ＳＢ01

ＳＢ02（第44図）

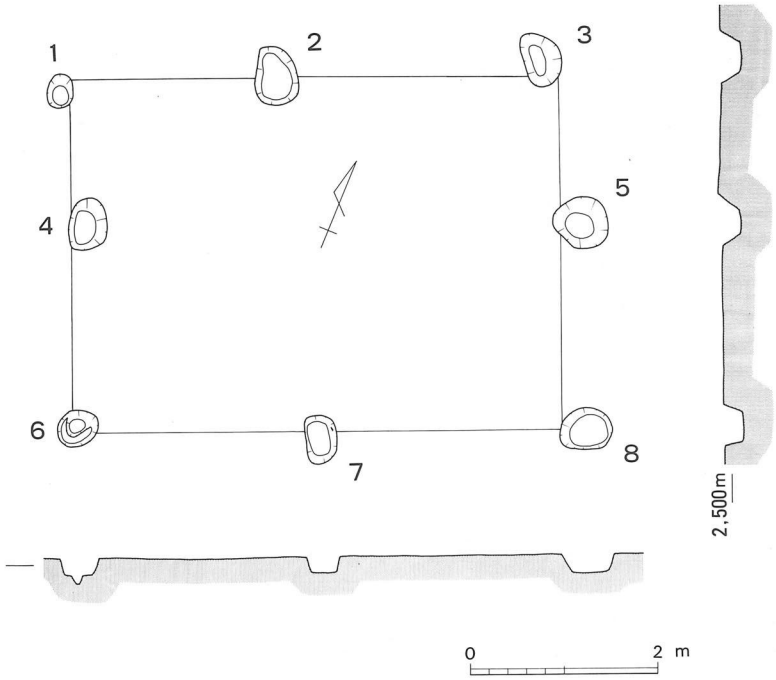
この遺構は、ＳＢ01の南東に隣接しており、棟軸も同一方向であることから同一時期のものと思われる。規模は、２間２間で、5.4ｍ×4.34ｍを測る。柱穴は、径30～60cmと不揃いで、楕円形に近いものが多く、不整形なものとなっている。深さは20cm前後である。柱穴間は、Ｐ１～Ｐ２が1.92ｍ、Ｐ２～Ｐ３が2.48ｍ、Ｐ１～Ｐ４が112ｍ、Ｐ４～６が1.68ｍ、Ｐ３～Ｐ５が1.36ｍ、Ｐ５～Ｐ８が２ｍ、Ｐ６～Ｐ７が2.24ｍ、Ｐ７～Ｐ８が2.4ｍを計る。１～2.36ｍと不揃いである。



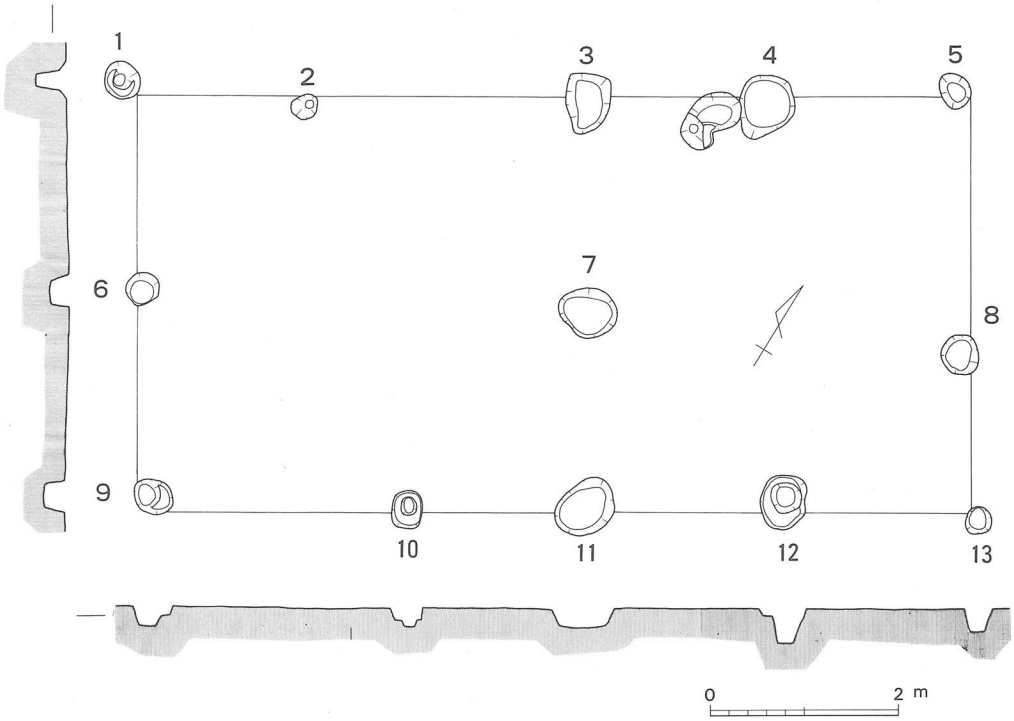
第43図　ＳＢ01付近出土遺物

ＳＢ03（第45図）

この遺構は、調査区の中央部、ＳＤ01の北において検出している。規模は、２間４間で、9.12ｍ×4.8ｍを測る。柱穴は径30cm～40cmのものが中心で60cm程度の大きなものがある。柱間は、Ｐ１～Ｐ２が1.68ｍ、Ｐ２～Ｐ３が2.56ｍ、Ｐ３～Ｐ４が1.28ｍ、Ｐ４～Ｐ５が1.52ｍ、Ｐ１～Ｐ６が1.86ｍ、Ｐ６～Ｐ９が1.86ｍ、Ｐ５～Ｐ８が2.48ｍ、Ｐ８～Ｐ13が1.96ｍ、Ｐ９～Ｐ10が2.3ｍ、Ｐ10～Ｐ11が1.38ｍ、Ｐ11～Ｐ12が1.54ｍ、Ｐ12～Ｐ13が1.7ｍを測る。



第44図　ＳＢ02



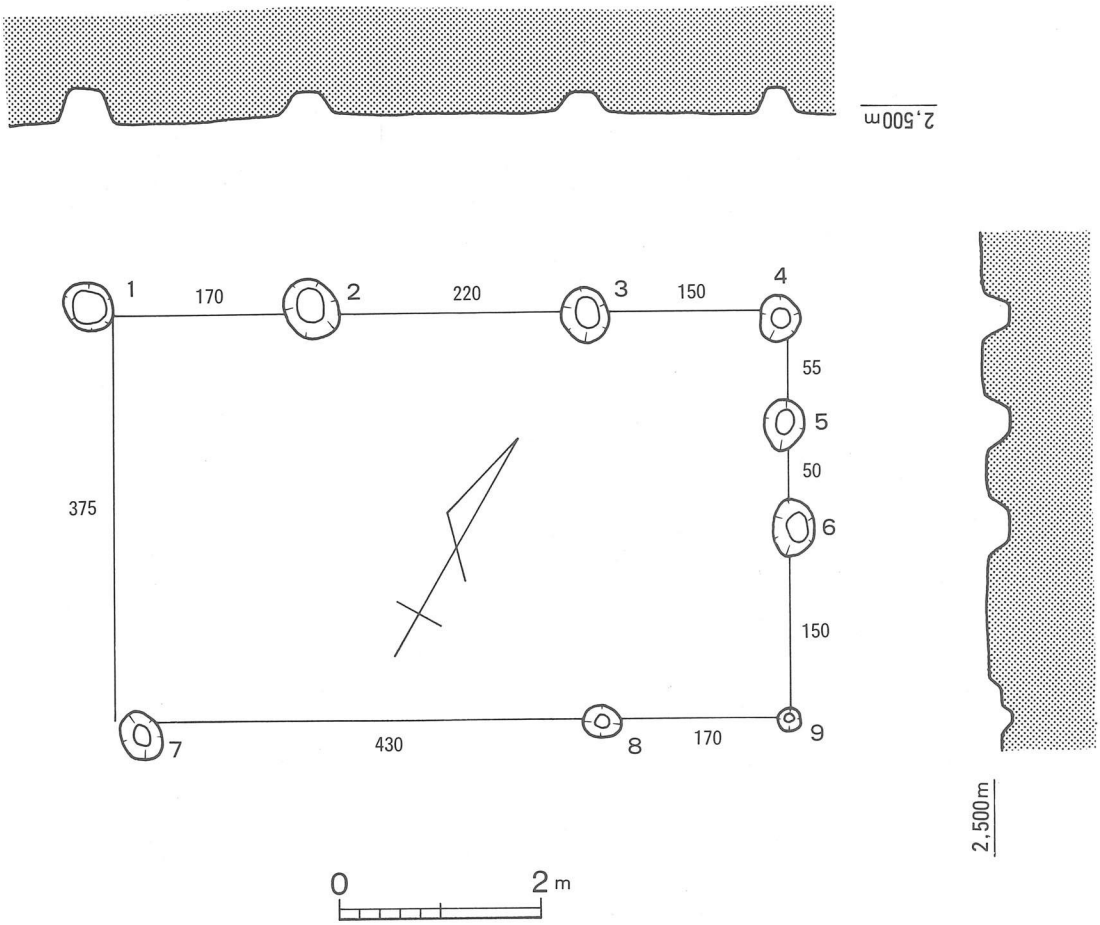
第45図　ＳＢ03

ＳＢ04（第46図）

この遺構は、西側調査区北東で検出している。南側は、ＳＤ05によって柱穴上面は削られている。２間３間の建物で７ｍ×4.25ｍを測り、柱間は、Ｐ１～Ｐ２が1.7ｍ、Ｐ２～Ｐ３が1.5ｍ、Ｐ４～Ｐ５が0.55ｍ、Ｐ５～Ｐ６が0.5ｍ、Ｐ６～Ｐ９が1.5ｍ、Ｐ１～Ｐ７が3.75ｍ、Ｐ７～Ｐ８が4.3ｍ、Ｐ８～Ｐ９が1.7ｍを測り、２ｍから2.5ｍである。柱穴６・７・８は、ＳＤ05によってすでに削られており、かろうじて底の部分を残すのみである。柱穴は平均で径50cm深さ25cmを測る。柱穴からは須恵器・土師器の小片が出土している。

柱穴列（第52図）

調査区南で、Ｉ２～Ｉ５区にかけて、全長18ｍで計10の柱穴がＳＤ11に平行してならんでおり、柵があったものと思われる。柱間は、１ｍ～1.7ｍと不揃いである。柱穴の埋土は、黒褐色土でＳＤ01などと共通である。また、Ｐｉｔ３と４から遺物が出土している。Ｐｉｔ３からは土師質土器の杯が、Ｐｉｔ４からは、青磁椀の口縁部・常滑焼きの甕の小片が出土している。このことからも、この柱穴列は、ＳＤ11でなくＳＤ01に伴うものと思われる。また、ＳＤ01とこの柱穴列の間は、暗渠によって破壊を受けているが、溝で区画された、

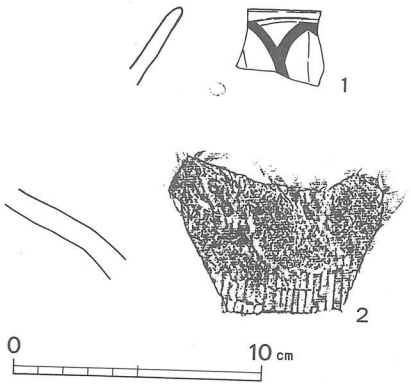


第46図　ＳＢ04

内側と比べて遺構の数が少ないことが指摘できる。

柱穴列出土遺物

第47図は、Ｐｉｔ４より出土している。(1)は、青磁椀の口縁部である。鎬蓮弁で淡緑色を呈する。(2)は、常滑焼きの甕押印帯の部分である。第48図は、Ｐｉｔ３から出土した、土師質土器の杯である。底部は糸きりで、そのほかはナデ調整である。口縁端部は、やや内湾ぎみに立ち上がる。ほぼ、完形で出土しており、口縁端部には煤がついており、燈明皿として使用された可能性がある。焼成は良



第47図　Ｐｉｔ４出土遺物

好で堅緻な仕上がりである。色調は白黄色を呈する。

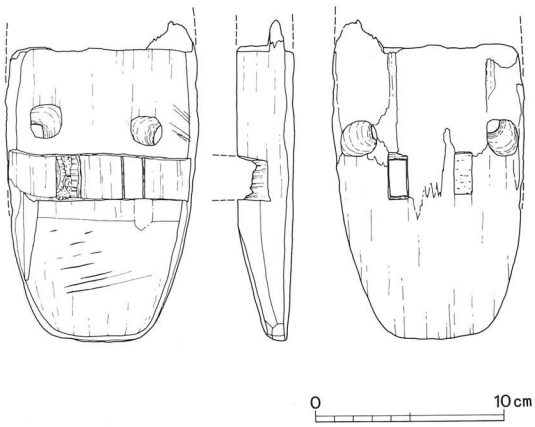
その他柱穴出土遺物

ＰｉｔＡ出土遺物

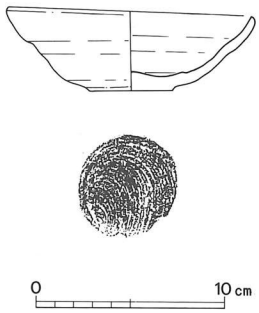
柱列の南側のＰｉｔより土師質土器の小皿が３点出土している。口縁は外方に短く伸び、口径は８cm前後に揃っている。いずれも底部糸切りである。

ＰｉｔＢ出土遺物

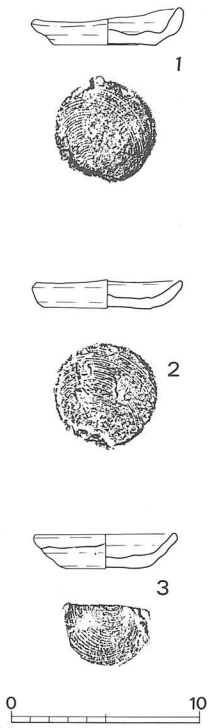
差し歯下駄の台部である。残存長で15.5cm、幅10.1cmである。後歯の受け部は、長さ9.6cm、幅2.1cm、深さ1.6cmである。一つの歯につき２cm×１cmの穴が２か所設けられている。台部の後端は直線気味になっている。



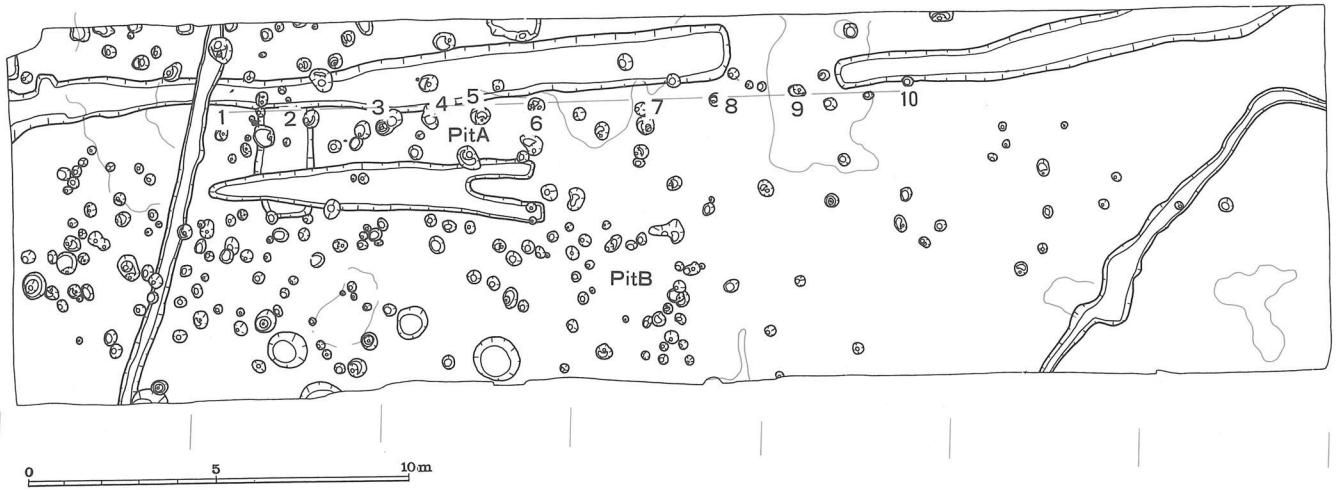
第50図　ＰｉｔＢ出土遺物



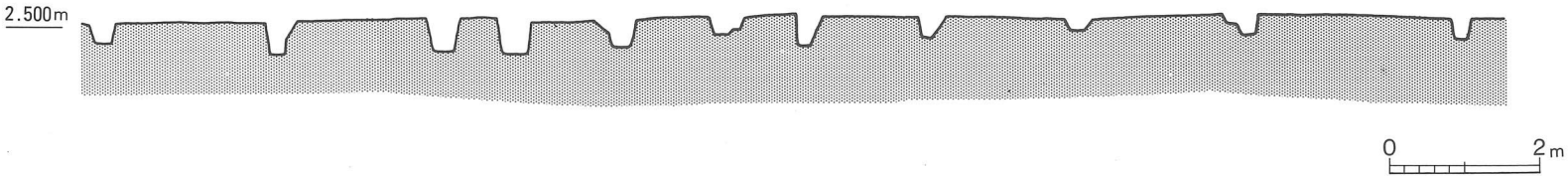
第48図　Ｐｉｔ３出土遺物



第49図　ＰｉｔＡ出土遺物



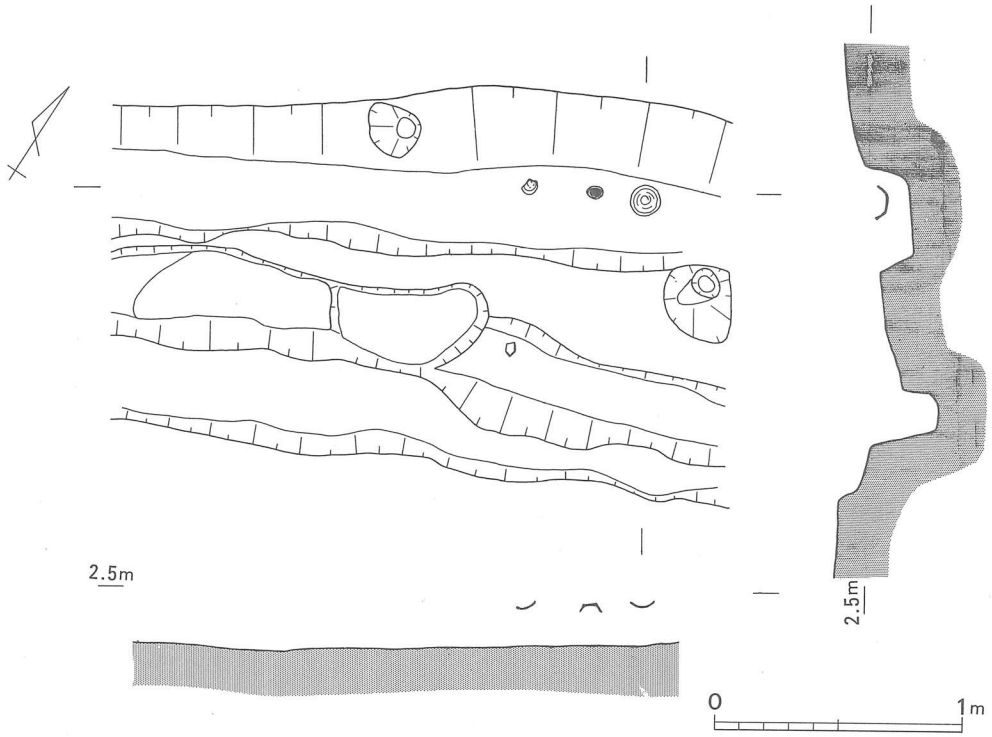
第51図　西側Ｉ～Ｋ区平面図



第52図　柱穴列断面図

ＳＤ－1（第13図・53図）

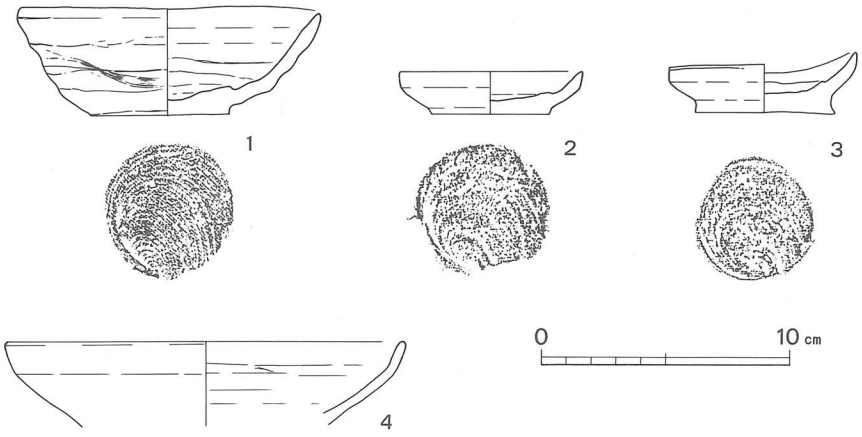
この溝は、ＳＫ01から西にのびる溝で、調査区外へとのびる。幅60cm，深さ30～40cmを測り、北側は２段になっており、１段目は深さ10cm，幅20cmを測りテラス状になっている。また、このテラス部分に溝とは別に幅20cm，長さ152cm，深さ28cmで掘り込まれており、土師質土器の杯１と小皿２が完形でこの落ち込みの上面に近いレベルで３固体が等間隔で出土している。これらは、意識的に埋められたものと考えられる。



第53図　ＳＤ01遺物出土状況

ＳＤ01出土遺物（第54図）

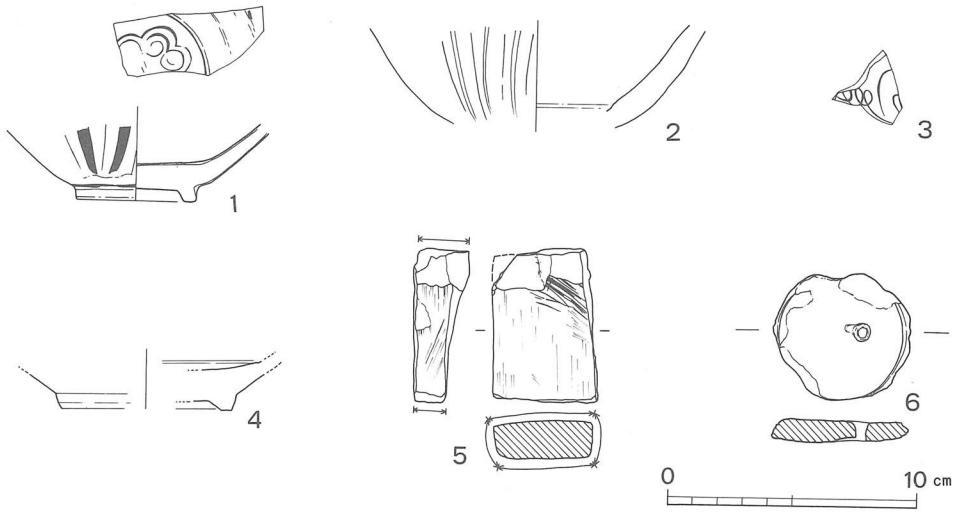
(1)(2)(3)(4)は、いずれも土師質土器である。(1)と(4)は杯で、(1)は、調整痕が著しく全体の形態もやや崩れたものとなっている。底部は、回転糸切りである。(4)は、破片であるが、口縁端部は、垂直気味に立ち上がる。(2)・(3)は、小皿で(1)同様に雑な造りとなっている。口縁部は短く伸び、底部は回転糸切りである。



第54図　ＳＤ01出土遺物

ＳＤ02（第13図）

この溝は、ＳＫ06から東にのびる溝で、東側調査区へと延び、そこでゆるいカーブをえがきながら北に向きをかえている。幅75cm，深さ30cmを測る。この溝は、ＳＤ01と対応するものと思われる。



第55図　ＳＤ02出土遺物

ＳＤ02出土遺物（第55図）

(1)～(3)は、青磁片である。(1)は、鎬蓮弁のもので、内面見込みには花模様がある。高台は、断面四角形で、高台畳み付けとその内部は釉がかかっている。釉は、緑色を呈し、断面は淡灰色である。(2)も鎬蓮弁のものである、釉は淡い褐色を呈し、口縁部と底部の境には

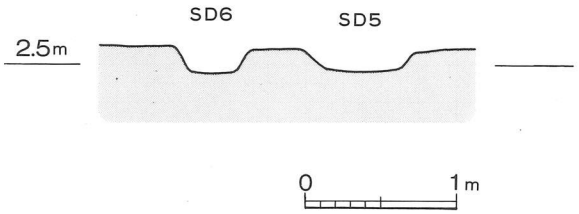
段を持つ。(3)は、椀の底部と思われる破片で、内面には、幾何学模様が施されている。釉は深緑を呈する。(4)は、白磁椀の底部である。高台は削り出しは浅く内面は斜めになっている。また、底部と体部の境には、沈線状の境がある。(5)は、砥石である。全ての面を使用している。(6)は、紡垂車で土師質土器の底部を利用している。

ＳＤ03

この溝は、ＳＫ06からのび屋敷地の東側を区画する溝である。ＳＫ06から北に23ｍ延びそこから西に向きかえ９ｍほどのびる。

ＳＤ04～ＳＤ06

屋敷地の北と東を区画する溝は、複数が切り合っているが、その切り合い完形を明確にすることは、出来なかった。



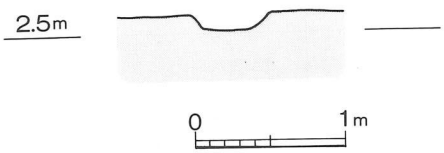
第56図　ＳＤ５・６

北側では、ＳＤ05とＳＤ06とが平行して伸びており、ＳＤ06は、途中で終息しＳＤ05がそのまま屈曲し南へと向きを変えるものと思われる。この２つの溝は、同時期か相前後する時期のものと思われる。東側を区画する溝は、ＳＤ03の外側に４本の溝が検出されている。基本的には、北側から連続している、ＳＤ05と東北コーナー付近から伸びているＳＤ04の２本が平行に伸びており、これを切る形で、東北コーナー部分にてＳＤ16が検出された。また、ＳＤ03とＳＤ04の間でＳＤ17を検出している。この溝はＳＤ03に切られている。

第57図　ＳＤ5出土遺物

ＳＤ－07

この溝は、ＳＤ05、ＳＤ06の南側に平行して伸びている。途中切れている部分があるが一連のものと思われる。備前焼の擂鉢の破片が１片出土している。ＳＤ05、ＳＤ06と同時期かやや新しいものと思われる。



第58図　ＳＤ07

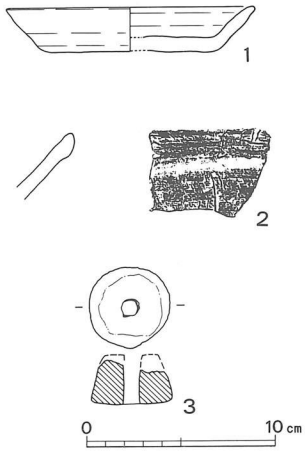
ＳＤ－08

この溝は、ＳＤ－3とＳＤ－9の中間に位置し南北に伸びている。深さ18cm・幅40cm・長さ６ｍと小規模なものである。出土遺物は、須恵器の長頸壺の底部と思われる。

ＳＤ－09

ＳＫ－01から北に伸びており、ＳＫ08とＳＫ03を切っている。幅60～70cm・深さ22cmと小規模である。

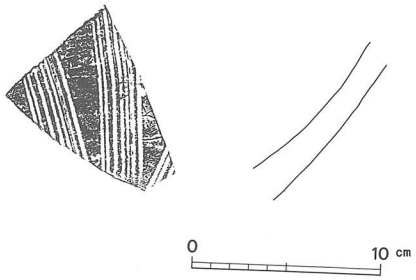
(1)は、須恵器の杯である。底部から体部にかけてやや丸みがある。(2)は、須恵器系の鉢の口縁部と思われる。口縁端部は玉縁状になる。(3)は、石製の紡錘車である。最大径4.3cmである。断面は台形を呈する。孔の大きさは径１cmを測る。



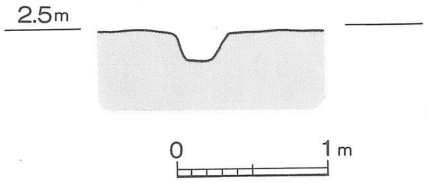
第62図　ＳＤ09出土遺物

ＳＤ－10

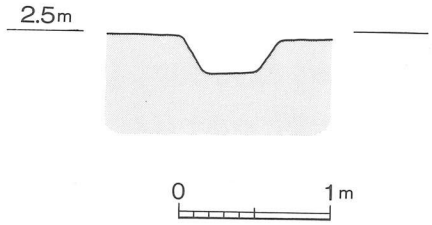
ＳＤ９の西側を平行して南北に延びてＳＫ08とＳＫ09を切っており、ＳＫ08の中で終息する。須恵器の底部が出土しており、高台が外側に開いて付いている。また、底部外面にはへら記号がある。



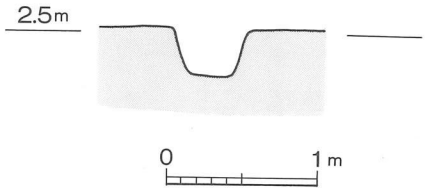
第59図　ＳＤ07出土遺物



第60図　ＳＤ08



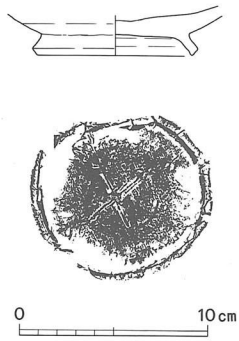
第61図　ＳＤ09



第63図　ＳＤ10

ＳＤ－11

この溝は、調査区の南端で検出しており、幅80cm～140cm・深さ42cmを測り、東西方向に伸びている。途中切れている部分があるが一連のものである。出土遺物は、須恵器・土師器の杯などが完形に近いかたちで出土している。



第64図　ＳＤ10出土遺物

ＳＤ－11出土遺物（第66図）

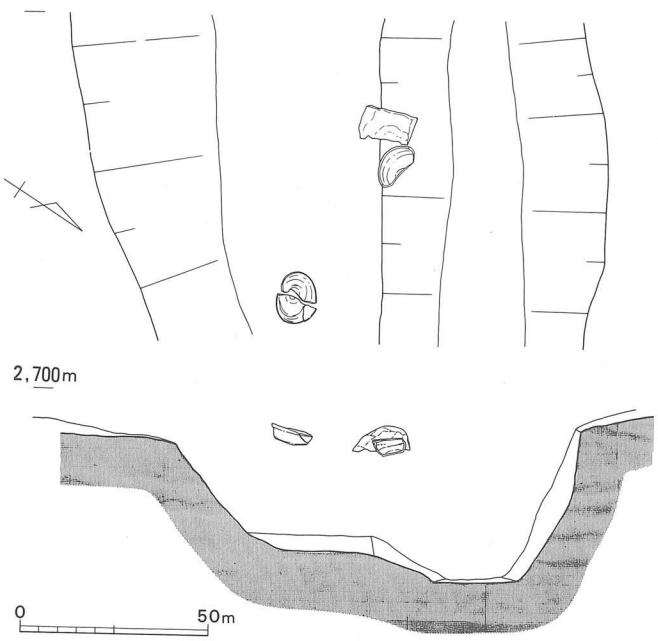
(1)～(3)は、須恵器の杯である。体部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部はあまりシャープではないがくびれをもつ。(1)は内面も稜がある。(4)・(5)は、土師器の杯である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外側に折れる。底部はヘラケズリで、中心が膨れている。両者とも、丹が塗られている。胎土はよく精製されており、砂流はほとんど含まれていない。(6)・(7)は、須恵器の長頸壺の口縁部と胴部の破片である。(8)・(9)・(10)は、土師器の甕である。(8)は胴部から口縁部にかけて屈曲せずに、直線的に立ち上がりそれから外方に折れる。内面胴部以下は、ヘラケズリである。(9)は、器壁が厚く口縁部は短小である。

ＳＤ－12

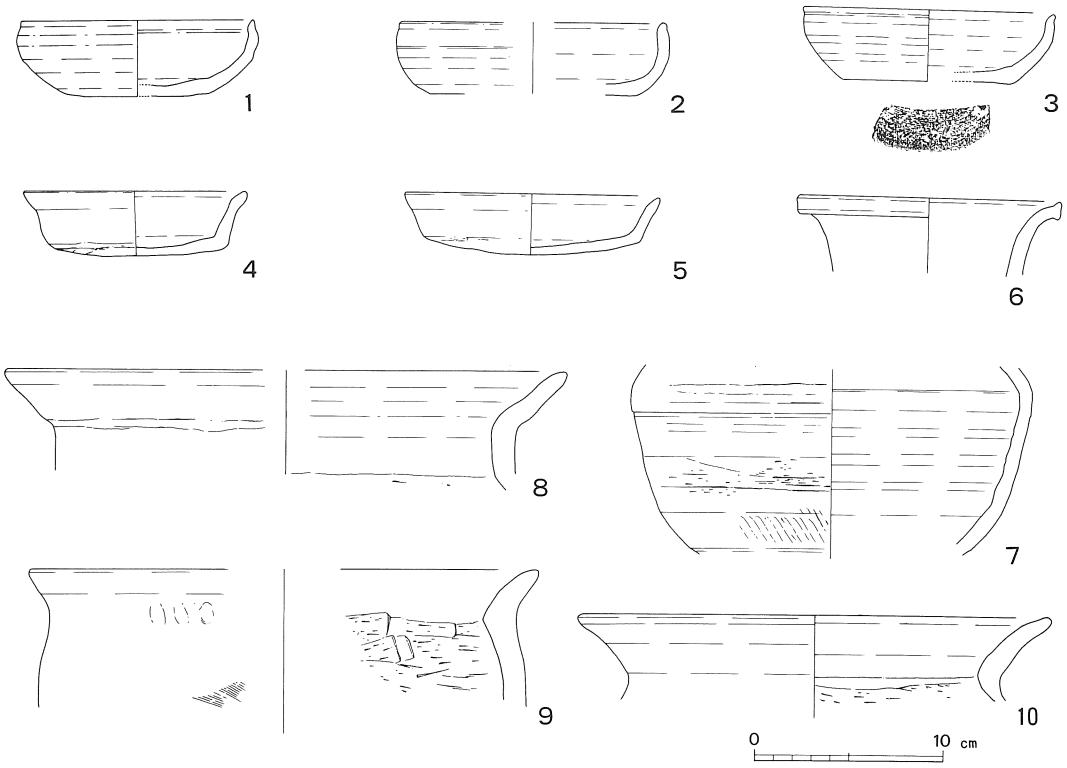
この溝は、調査区南西隅で検出しており、幅45cm・深さ15cmを測る小規模なもので、南北に伸びている。また、ＳＤ11を切っており、北端は暗渠によって消失している。遺物は、須恵器・土師器の小片が出土している。

ＳＤ－13

ＳＤ11の南側に東西にのびる。不整形溝である。幅120cmを測る。土師器の杯でほぼ完形で出土している。体部は直線的に立ち上がり、口縁部もそのまま伸びてい



第65図　ＳＤ11

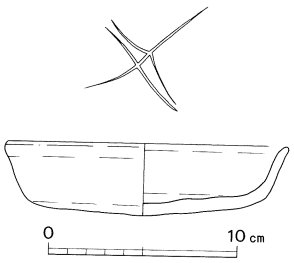


第66図　ＳＤ11出土遺物

る。底部との境は丸みを帯びており、底部中央はやや膨らみ気味である。底部は、ヘラケズリが施されている。丹が塗られており、底部内面にはへら記号が書かれている。

ＳＤ14

この遺構は、調査区南東隅で検出している。幅50cm・深さ24cmと小さな溝である。須恵器の杯と土師器の小片が出土している。須恵器の杯は、高台はなく、口縁部は直線的に延び、端部は丸く収めている。焼成はやや悪く断面は、灰白色を呈する。



第67図　ＳＤ13出土遺物

ＳＤ－15

この溝は、調査区の北東隅で検出、ほぼ南東に伸びており、南側はやや東向きに変えており、東側調査区で検出されておらず、西側調査区と東側調査区の間で終息するものと思われる。

出土遺物

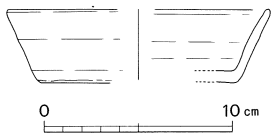
(1)は、土師器の甕で、胴部はあまりはらないタイプのようである。胴部内面はヘラケズリが施されている。(2)は、須恵器の直口壺である。口縁部は、直線的に外方に伸び、端部は外側を丸く収めている。肩部外面は、灰を被っており、内面は指頭圧痕が著しい。

ＳＤ16

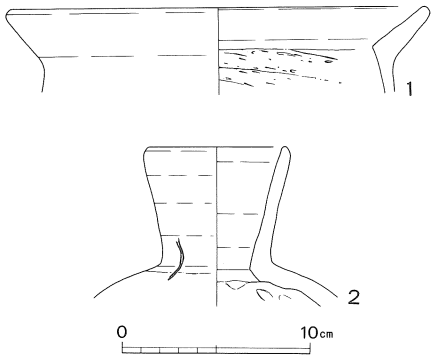
この溝は、ＳＤ04やＳＤ05など屋敷地を区画している溝の北東コーナー部分のみに設けられている。ＳＤ04とＳＤ05を切っており、この２つの溝よりも深く掘りこまれている。

ＳＤ17

この溝は、ＳＤ03とＳＤ04の間に南北に延びており、長さ９ｍ・幅60cm・深さ20cmを測る。南端は、ＳＤ03によって切られている。



第68図　ＳＤ14出土遺物



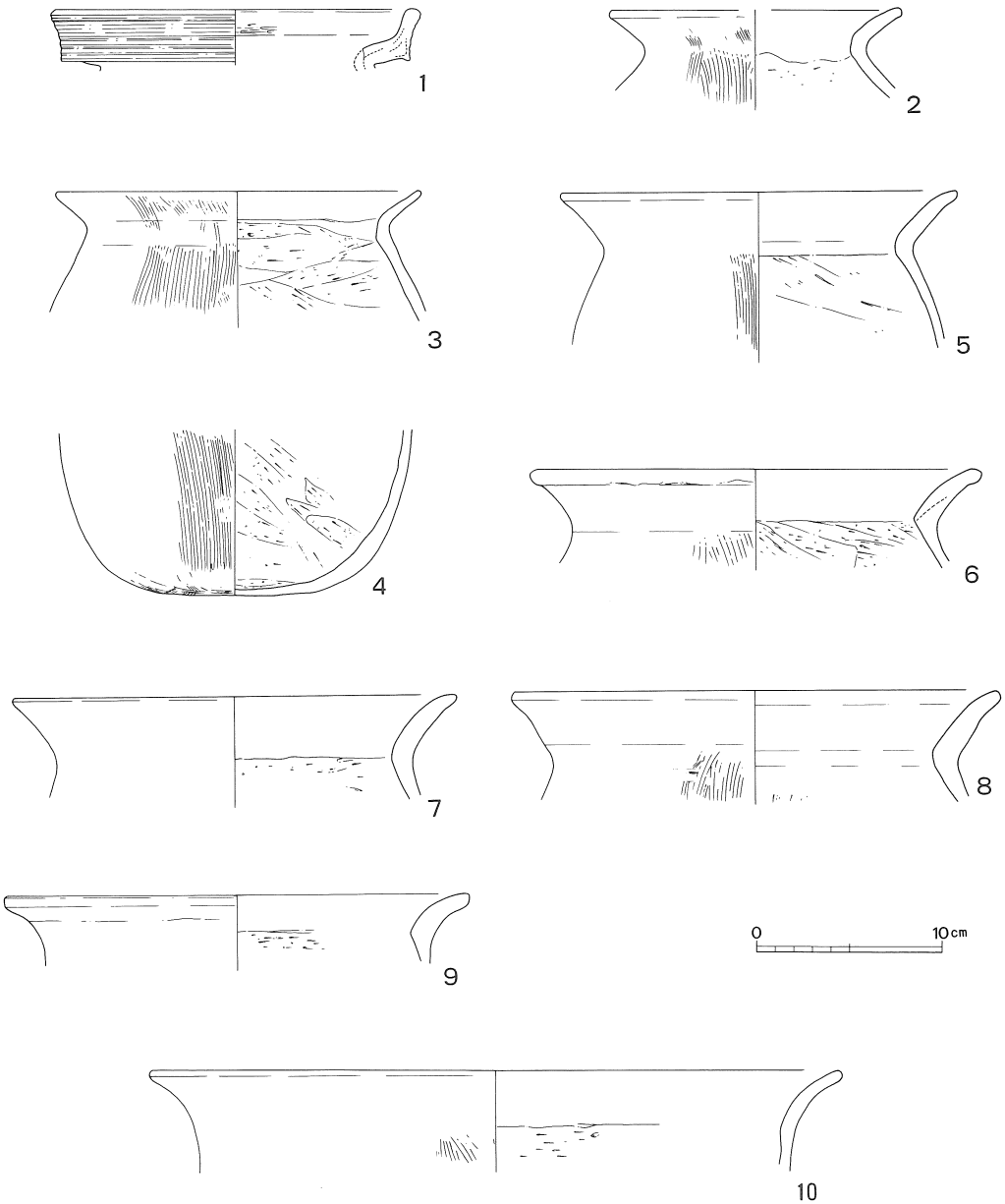
第69図　ＳＤ15出土遺物

遺構外出土遺物

弥生土器・土師器

(1)は、弥生時代後期の甕である。口縁部外面には６～７条の沈線が施されている。口縁部内面は、横方向のミガキ。(2)～(9)は、単純口縁の甕である。口径は20cm前後に揃っており、(2)のみ、15cm前後と小型である。調整は頸部以下外面は、縦方向の刷毛目、内面はヘラケズリである。(3)(4)は、同一固体のと思われるもので、底部は、丸底であるが、器形的には平らに近くなっている。(10)は、口径が75cmと大きなことから甕と思われる。

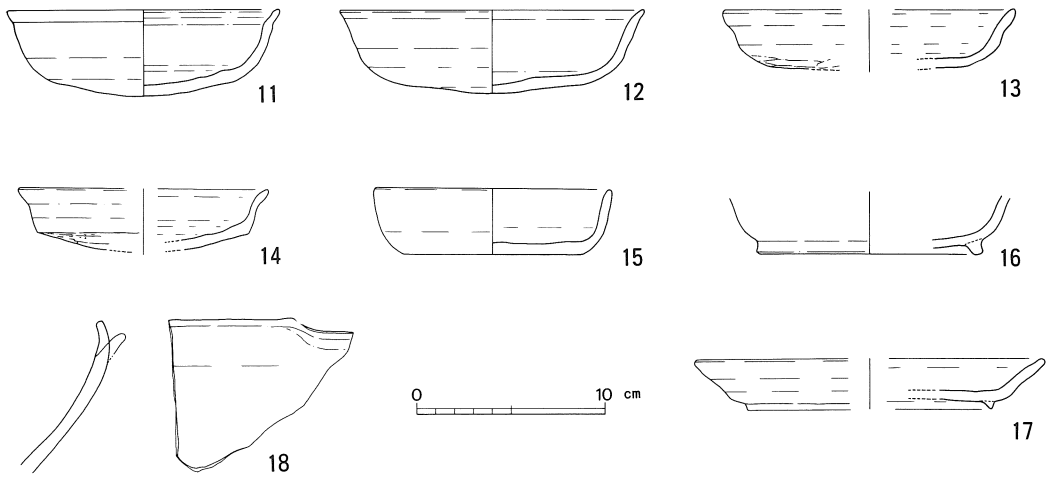
(11)～(17)は、杯であるが、すべて内外面に丹が塗られている。(11)は、底部は丸底でゆるやかに口縁部へと移行する。口縁端部は、外方に折れ曲がり、若干括れたように成っている。底部外面は、ヘラケズリである。(12)も、(11)同様丸底で、外面はヘラケズリされている。口縁端部は、外方に薄くのびる。(13)は、器形は(12)とよく似ており、底部はヘラケズリされている。(14)は、やはり底部は丸く中央部分が膨らんでいるが、口縁部との境に明瞭な稜ができている。底部ヘラケズリで、口縁端部は、外側に折れている。(15)は、平底になり、口縁部は垂直に立ち上がっている。(16)(17)は、高台付きの杯である。(16)は、方形に近いしっかりした高台で、口縁部は、直立気味に立ち上がる。(17)は、断面三角形の小さな高台が、底部と体部の境に付き、口縁部は、外傾している。(18)は、鉢の口縁部であろうか、口縁端部は、直立し、片口を持つ。



第70図　遺構外出土遺物(1)（弥生土器・土師器）

須恵器

(1)は、山本編年３期の杯身で底部はヘラケズリが施されている。(2)(3)は、山本編年４期の須恵器で、口径11～12cmと小形化している。口縁部と天井部の境には、沈線と撫でによって段が出来ている。(4)～(8)は、輪状つまみの付くもので、天井部は水平になり、全体に平らな器形となっている。(9)は、宝珠状のつまみが付いており、口縁端部が屈曲する。(10)～



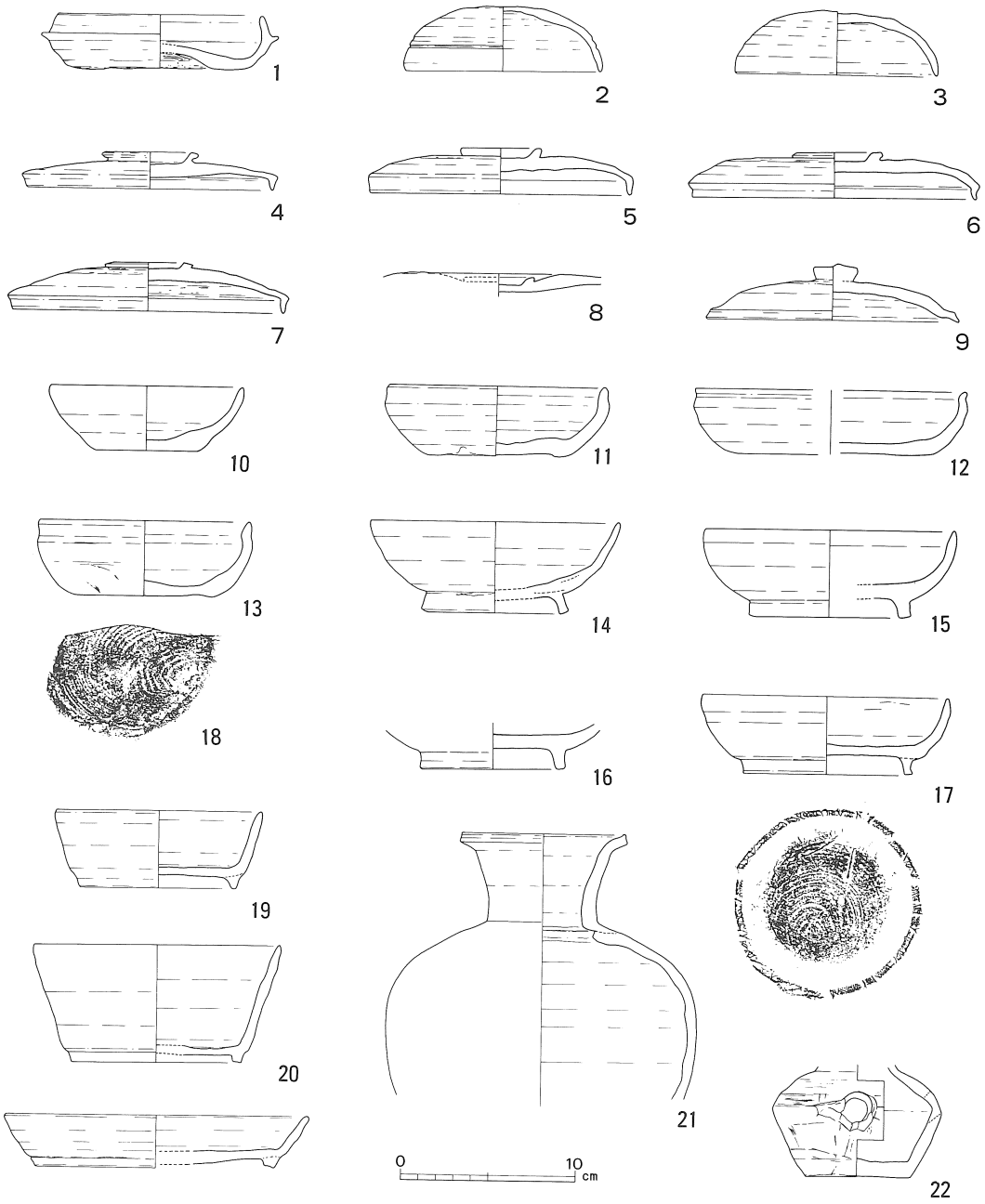
第71図　遺構外出土遺物(2)（土師器）

⒀は、無高台の杯である。⑽は、小型で体部は直線的に外方に伸び端部は、薄くのびる。⑾～⒀口縁端部に括れを持つものである。

⒁～⒆は、高台付きの杯である。⒁～⒄は、体部は内湾気味に立ち上がり、高台もしっかりしている。これに対して、⒅⒆は、体部は、直線的に立ち上がり、高台も小さく底部の外側につく。⒅は、底部糸切り後ナデ調整している。⒇は、高台付きの皿で、体部は、直線的に開き、高台は底部の外側に整している。㉑は、壺である。口縁端部は、上方にやや肥厚している。㉒は、瑤である。

須恵器系

(1)～(5)は、鉢であり、(1)は、口縁端部が玉縁状になっており、外面はへらのようなもので撫でており、内面はクシ状の物でナデている。(2)は、端部が面を持ち、そこに２条の凹線が施されている。内面は、粗い刷毛調整である。(3)は、小片であるが、内面は、櫛状のナデが施され、また、２条の擂目が見られる。(4)は、底部でやはり横方向のクシ状のナデが施されている。(5)は、３㎜前後の、格子目叩きがある。(6)は、鍋の口縁部と思われるものである。

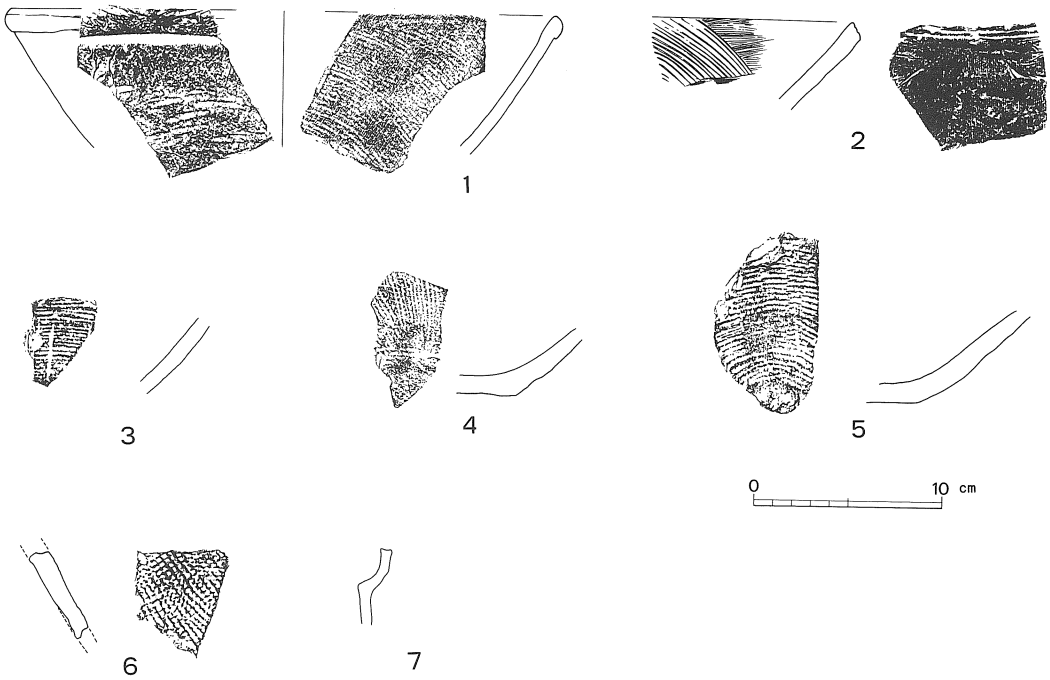


第72図　遺構外出土遺物(3)（須恵器）

その他

陶器

(1)～(6)は、常滑焼と思われる。(1)は、甕の口縁部である。口縁端部は、外側に面を持ち上方に肥厚している。(2)は、底部である。(3)～(6)は、肩部の押印体の部分で、縦９㎜・横３㎜の格子が３段になっている。(7)(8)は、備前焼の擂鉢である。口縁部は、内傾して立ち上がり、端部上面は内傾するように面ができている。



第73図　遺構外出土遺物(4)

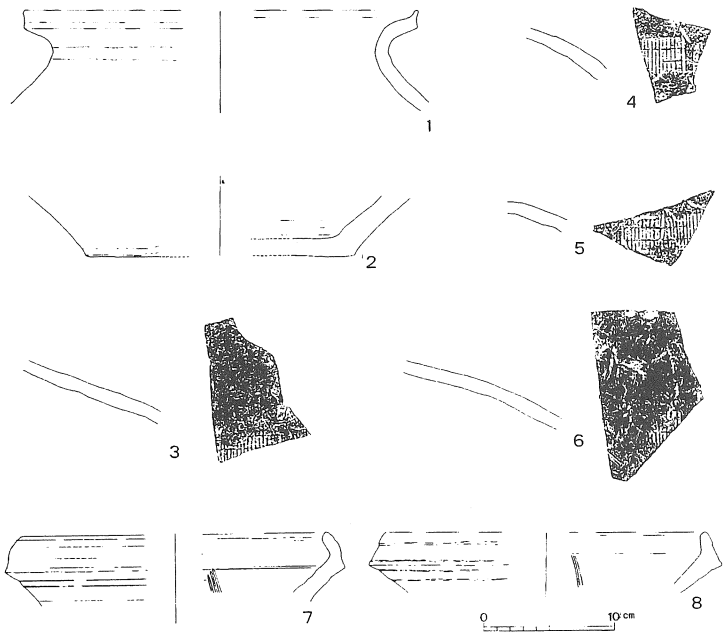
土製支脚

(1)は、片方の腕と突起部分が欠損している。腕部分は、指頭圧痕が著しく、胴部から脚部については、ヘラケズリされている。(2)は、高さ10.5cmと小型のもので、脚部もあまり広がらない、内面は、中空にならず、ほぼ水平である。

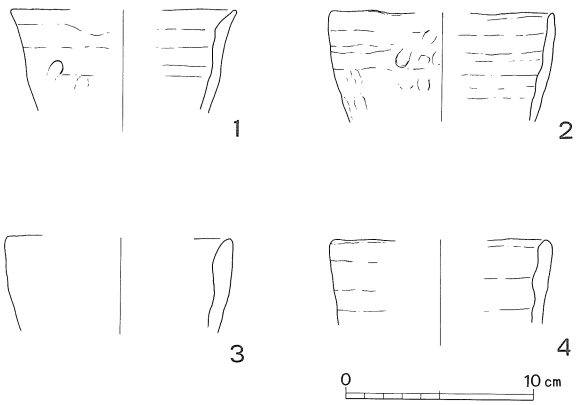
製塩土器

(1)～(4)は、製塩土器である。粘土紐の接合痕・指頭圧痕が顕著である。(1)(2)は、あまり砂粒を含まず、精製された胎土で、器壁も薄い。(1)は、口縁端部に行くに従い器壁が厚くなり端部は、特に内面が外側に折れている。(2)は、器壁が非常に薄く、口縁端部も薄くのびる。(3)(4)は、３～５㎜程度の砂粒を多く含む。(3)は、口縁端部の内側が膨らみ端部が薄

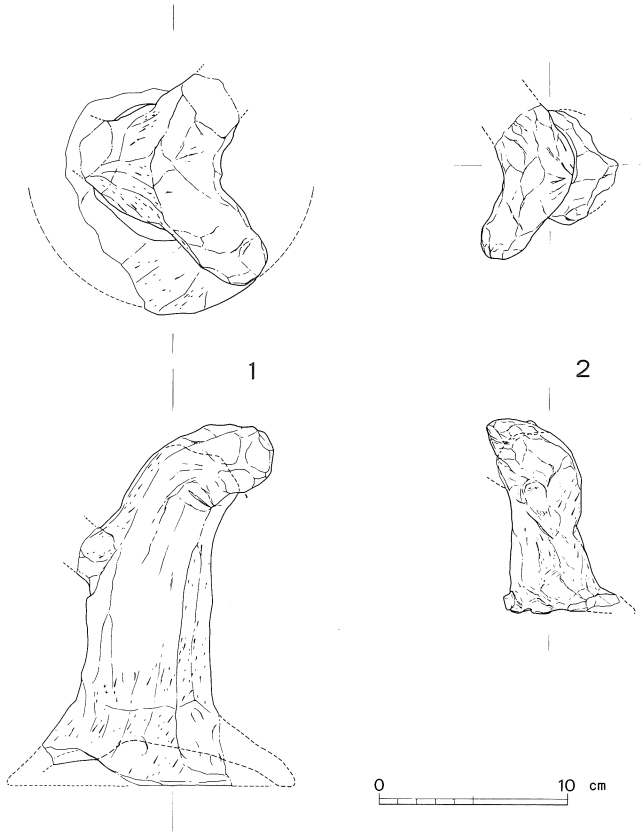
くなる。(4)は、口縁端部が丸くなり、内側にやや膨らむ。



第74図　遺構外出土遺物(5)



第75図　遺構外出土遺物(6)

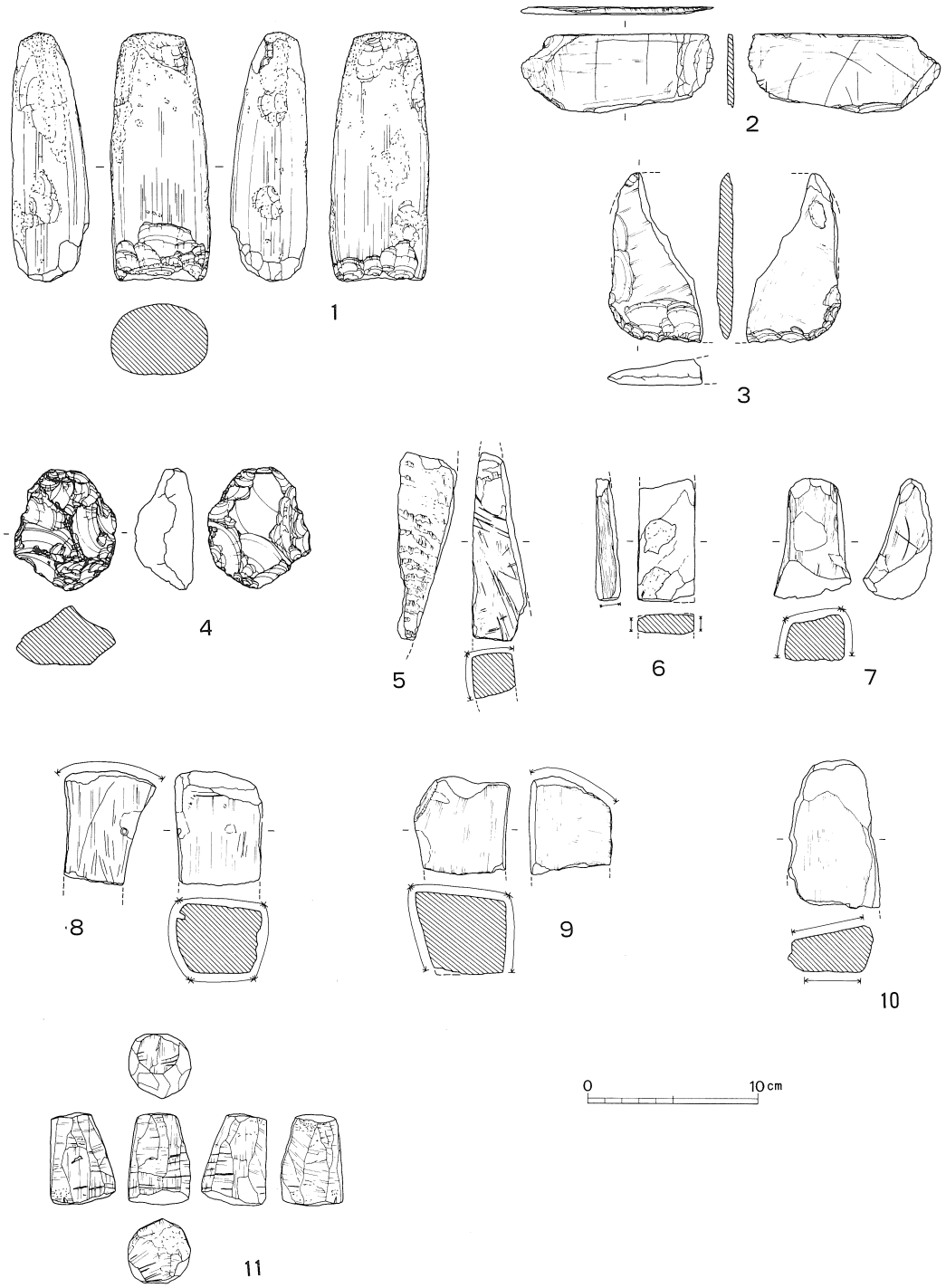


第76図　遺物構外出土遺物(7)

石器

(1)は、磨製石斧である。刃部は欠損しており、現存している部分で、長さ4.5cm・最大幅5.6cm・最大厚4.5cmを測る。刃部は補修することなく使用され、かなり摩耗している。(2)は、石疱丁である。大部分欠損しており、現存している部分で、長さ11cm・幅4.6cm・厚さ0.3cmを測る。(3)は、石鏃か、半分以上欠損しているが、長さ10cm・幅は現状で5.5cmを測る。刃部は、使用により先端は剝離している。

(5)～(11)は、砥石である。(5)は、残存長11cm・幅3.2cm・厚さ2.5cmで、上面と左側面の2面を使用している。側面は、上面に比べて目がやや粗い。(6)は、残存部分で長さ7cm・幅3cm・厚さ1.2cmで裏面以外の残っている面は、すべて使用されている。(7)は、残存長7cmで、残っている面は、すべて使用されている。(8)は、断面は、3.5cm×5cmの方形で、残っている面は、全て使用されており、特に両側面は使用頻度が高く、弓なりになっている。(9)は、断面方形で3面が使用されている。(10)は、主に上面が使用され若干裏面も使用され

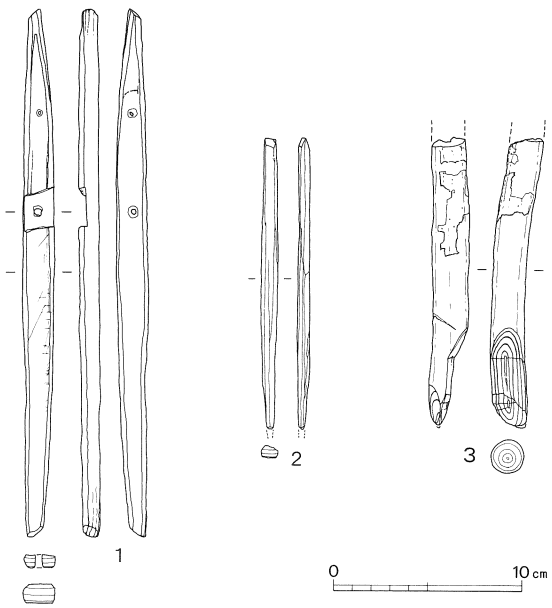


第77図　遺構外出土遺物(8)

ているが、そのほかの面は使用されていない。⑾は、円柱状をしており、全面使用されている。側面には８面の面がある。

木器

⑴は、長さ28cm・幅1.7cm・厚さ１cmを測る。両端は尖らせてある。真ん中よりやや外れた部分に、幅２cmの凹枘が斜めに施されこの真ん中に径３mmの小孔が貫通している。またこの孔と片方の先端の中央にも径２の孔が貫通している。⑵は、一部しか残っていないが、片方が徐々に細くなっており箸と思われる。⑶は、端から４cm程は半分が削られ、先端が鋭角に加工されていることから、杭の一部と思われる。



第78図　遺構外出土遺物(9)

３．第２地点東側調査区の概要

(1)　東側調査区の概要

この調査区は、南北方向の排水路を挟んで東側の、東西35ｍ、南北50ｍの部分である。西側調査区には建物跡、土壙、柱跡、溝跡など各種の遺構が、調査区全面にわたって検出されたのに比べ、東側調査区ではかなり遺構が少なかった。

検出した遺構は、10Ｂグリッド付近で確認された２間×２間の総柱の倉庫と考えられる建物跡のほか、ＳＤ18～ＳＤ27をはじめとする溝状遺構があり、柱跡は11ラインより西側にあるが、東側にはほとんどない。

倉庫と考えられる建物跡は、1.5～２ｍ間隔で配置された柱穴９穴で構成され、ほぼ南北に主軸を持つ。同種の遺構は今回の調査では確認されていない。溝状遺構は10数条検出されたが、西側調査区から延びるものはＳＤ18とＳＤ23がある。ＳＤ18は、西側調査区の東を北から南に伸びる溝が東に分岐したもので、12Ａ付近で消失している。ＳＤ23は、西側調査区のＳＤ02に繋がると考えられる溝で、９Ｇ付近から東側調査区に入り、緩やかに弧を描くようにして11Ａ付近をさらに北へ伸びている。それら以外には、ＳＤ19、20、21、22、24のようにほぼ南北方向に伸びる溝があるが、このうちＳＤ20とＳＤ24が規模が大きく、とりわけＳＤ24は、上面の幅が２～３ｍ、深さ0.3～0.6ｍある大溝で、南から北に流れＢ12付近で消失している。また、ＳＤ24のすぐ東側には、周囲よりやや高まった部分が４～８ｍの幅で、その溝と同方向に伸びている。さらに、高まった部分の東側には、幅0.5～１ｍの溝（ＳＤ27）がそれに沿って北に伸び、Ｃ14付近で消失している。

東側調査区での出土遺物は、全般的に少なかったが、例外的にＳＤ24からは古墳時代後期の土師器、須恵器などがかなりの量出土している。また、ＳＤ24の西側には、中世の包含層がひろがり、漆器や木札などの木製品が認められた。

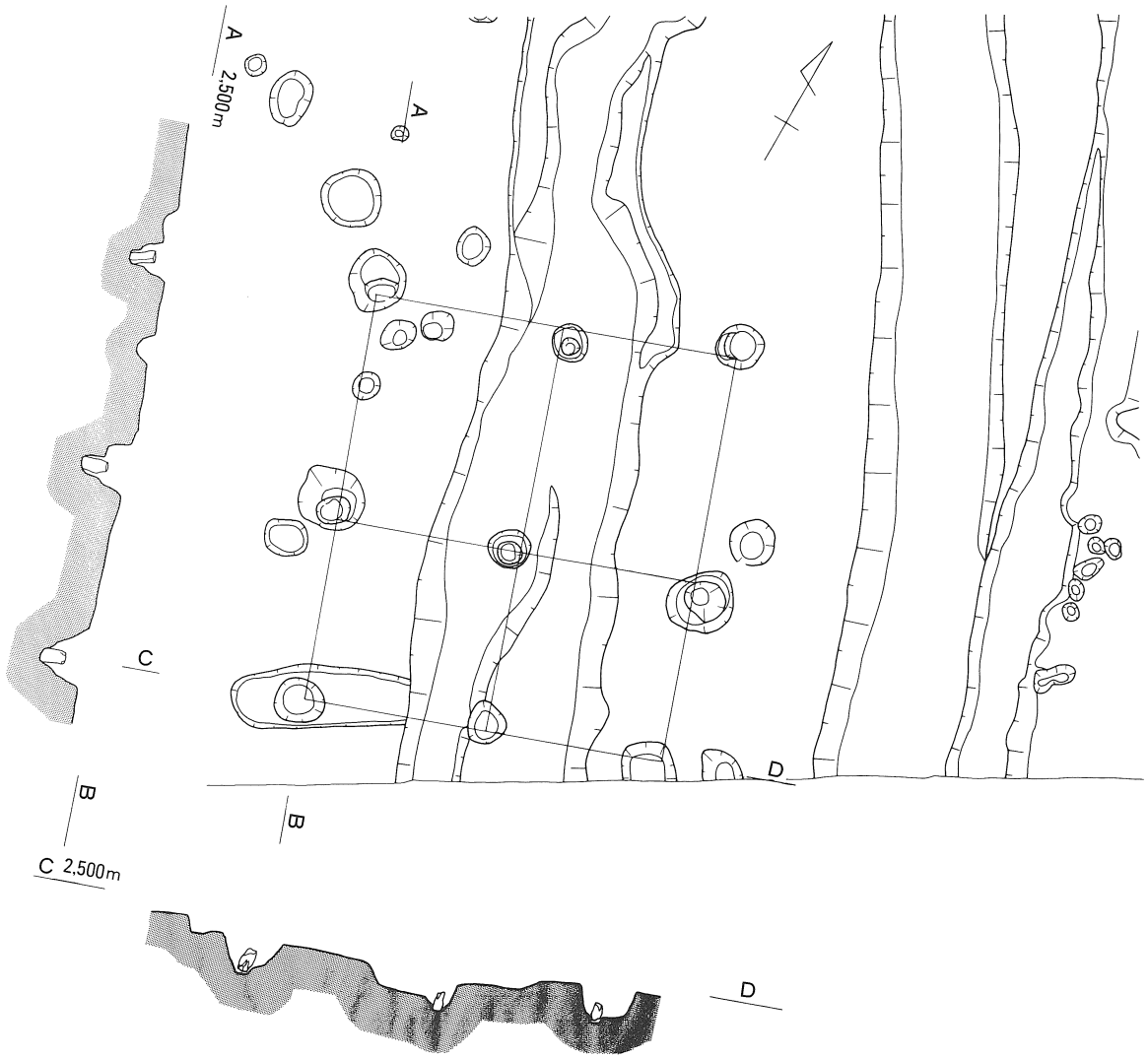
検出した遺構からみると、１４ラインから西は居住区域として、建物跡、土壙、溝、柱跡などが全面的に広がっているが、それから東側は集落前面の可耕地であったと考えられる。

(2)　遺構と遺物

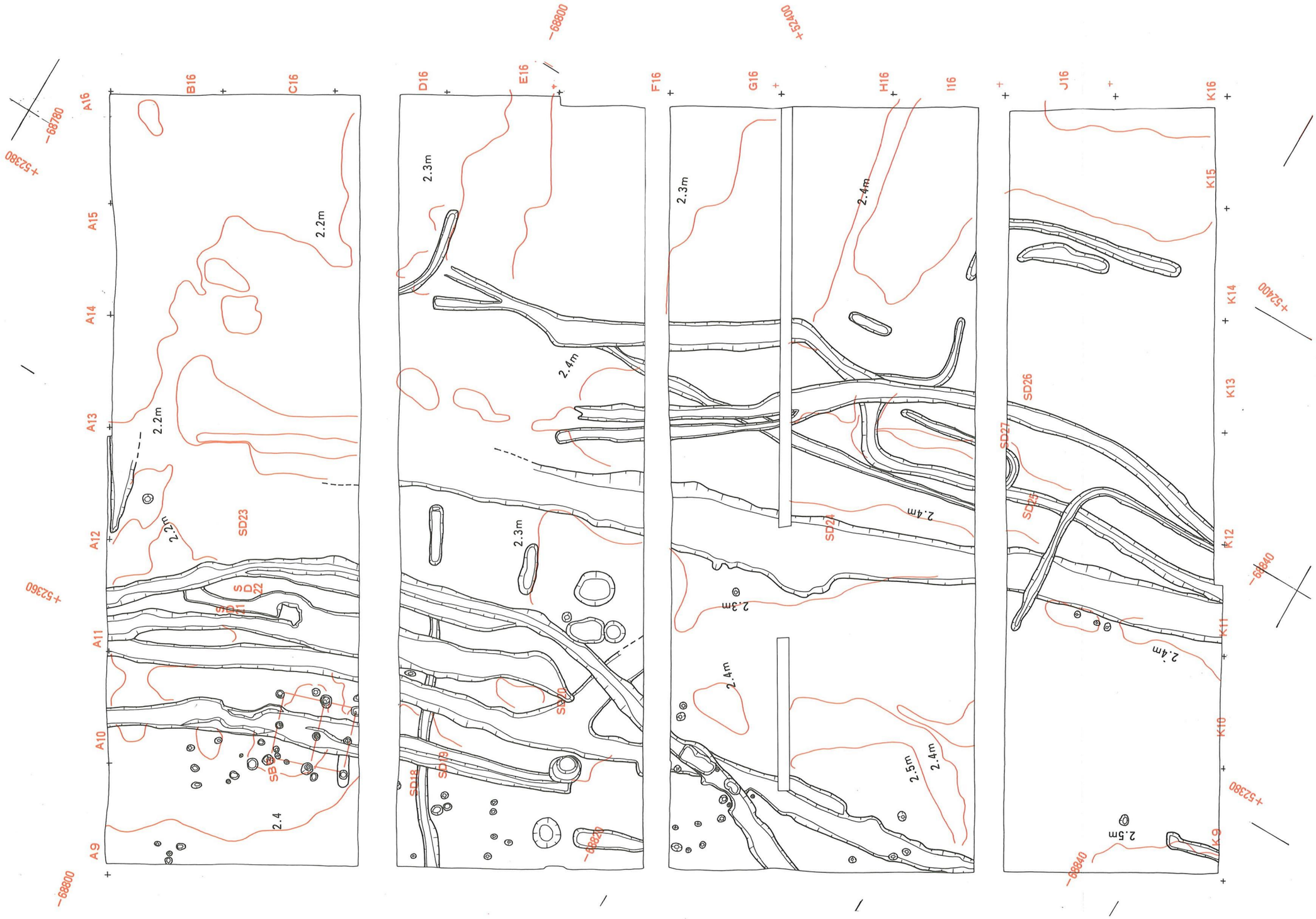
倉庫

倉庫と考えられる遺構は、東側調査区の北東部に位置している。溝状遺構が多く検出された地点の一画にあり、東西３ｍ、南北3.5ｍの総柱で構成された２間×２間の掘立柱建物跡である。建物の主軸方位はN－17°－Wで、東西の柱間寸法は、1.6ｍ、1.4ｍで、南北は、1.8ｍ、1.6ｍを測る。平面プラン円形の柱穴は、径0.3～0.5ｍ、深さ0.3～0.4ｍの大きさ

で、全ての柱穴に径0.1m、長さ0.2mの柱根が残っていた。遺物は、西側中央の柱穴から土師器が出土しているだけであり、明確な時期は不明である。建物跡の南側は、暗渠があるため幅２ｍを掘らずに残してあり、建物がさらに南へ１間伸びる可能性はある。倉庫と考えられる建物跡は、調査区からは他に確認されていないし、また、遺構が少ない地点から検出されていること、建物規模が小さいことなど、この建物跡の性格については、不明な点が多い。



第79図　倉庫実測図



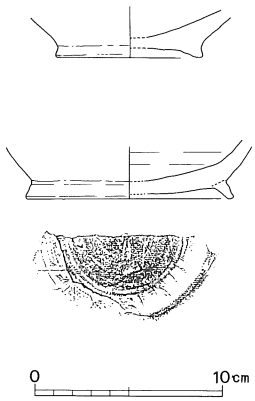
第80図　東側調査区遺構配置図

ＳＤ18

倉庫と考えられる掘立柱建物跡のすぐ南を東西に伸びる延長16ｍの溝状遺構である。西側調査区の北東部にある溝が分岐して東に伸び、12Ａ付近で消失している。溝は、幅0.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍで、西からＳＤ19、20、21、22、23の溝に切られている。溝の下底のレベルは、標高約2.2ｍで西側がやや高くなっている。遺物は、須恵器の甕片と、土師器片が少量出土しているだけであるが、ＳＤ20によって切られている点からみて、古墳時代後期（7世紀前半以前）の遺構と考えられる。

ＳＤ19

東側調査区北西部を南北方向に伸びる溝状遺構群の中で、最も西側にある溝である。他の多くの溝（ＳＤ20、21、22、24）とほぼ同方向に伸びているが、Ｅ10付近で消失している。Ｂ10付近にある倉庫と考えられる掘立柱建物跡や西から伸びるＳＤ18と重なり、先端部では東西1.2ｍ、南北1.5ｍの南北にやや長い楕円形の土壙に切られている。溝の北端は調査区外に伸びており不明だが、調査区内での溝の延長は21ｍである。溝は、幅0.8～1.6ｍで、Ａ10からＢ10にかけて広くなっており、一部を除いて二段になっている。溝の東側の部分が浅くテラス状になっており、広いところでは幅0.8ｍもある。溝の下底のレベルは、最も北で標高2.2ｍ、南端付近で2.16ｍあり、北がやや高い。溝の上面からの深さは、0.2～0.3ｍで、二段になっている浅いテラスの部分が上面から約0.1ｍの深さである。

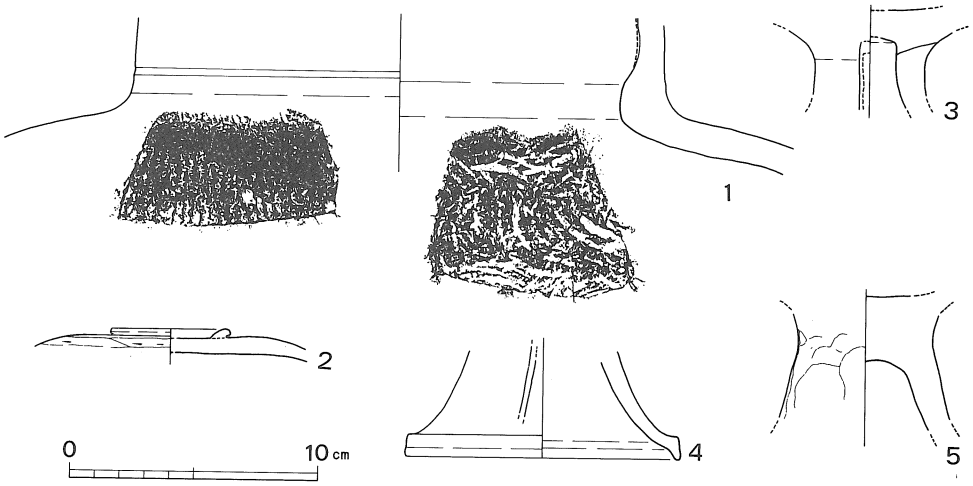


第81図　ＳＤ19出土遺物実測図

遺物は、須恵器と土師器が少量出土し、須恵器には甕のほか高台の付いた坏底部や蓋があり、土師器では赤色塗彩されたものもある。遺物の出土量は、ＳＤ24、ＳＤ20に次いで東調査区では多いが、量的にはビニール袋１袋に過ぎない。土器からみて、平安時代初期の溝状遺構と考えられる。

ＳＤ20

東調査区では、ＳＤ24とならんで規模の大きい溝である。ＳＤ19の東１～２ｍをほぼ平行して伸びているが、調査区内では延長約40ｍで、ＳＤ19の２倍の長さがあり、さらに調査区外へと両端とも伸びている。溝は、幅１～２ｍ、深さ0.15～0.25ｍで南が深くなっている。溝の下底のレベルは、北が2.18ｍ、南が2.36ｍで、南から北に流れる溝で、Ｉ９付近から調査区に入り、Ｆ10付近で西側調査区から伸びるＳＤ23に切られ、Ｃ10付近で西側調査区から分岐して東西に伸びるＳＤ18を切り、Ａ11付近で調査区外へ出ている。Ｅ11付



第82図　ＳＤ20出土遺物実測図

近では、幅1.4ｍ、深さ0.1ｍの浅い溝状遺構と重なっているが、切り合い関係は不明瞭で、ＳＤ20との関連は不明である。南端付近で、溝は二段に掘られて西が深く東に浅いテラスとなっており、ＳＤ19に似ているが、規模は小さい。

ＳＤ20　出土遺物（第82図）

遺物には、須恵器と土師器があり、ＳＤ19よりやや多いが、遺物の量は少ない。須恵器と土師器はほぼ同量あるが、小さな破片が多い。須恵器では、壺や高坏があり、壺(1)は、頸部から肩部にかけての器肉の厚いもので、胴部外面に平行タタキ目、内面に同心円タタキ目で調整し、外面には深緑色の自然釉が微かに残っている。蓋(2)は、外面天井部に径4.5cmの低い輪状つまみのつくものであるが、口縁を欠いている。高坏(3)は、坏部と脚柱部との接合部の一部であるが、一対の透孔がある。高坏(4)は、ハの字状に開き脚端部で平坦面をなし、透孔をもつ。土師器では、甕や高坏があり、高坏(5)は、坏部と脚柱部との接合部の一部で、脚柱外面に赤色塗彩している。出土土器からみて、古墳時代後期後半の遺構であろう。

東調査区では、ＳＤ21がほぼ同時期の遺構と考えられる。

ＳＤ21・22

ほぼ南北に伸びる溝状遺構で、ＳＤ20・23に挟まれるように位置している。北端は、ＳＤ21はＳＤ20と、ＳＤ22はＳＤ23と切り合っており、Ｂ11付近で一つになり南端はＳＤ19とほぼ同じ長さで消失している。溝の上幅は0.5～1.5ｍで、深さは0.1～0.3ｍあり、Ｃ11付近でＳＤ18を切っている。

出土遺物はかなり少ない。須恵器と土師器があるが、時期は不詳である。

ＳＤ23

西側調査区のＳＤ02の延長にあたると推定され、北から西寄りに緩く弧を描きながら北の調査区外へ伸びる。溝の上幅は0.6～1.2ｍ、深さは0.2～0.3ｍで、ＳＤ18とＳＤ20を切っている。溝の下底のレベルは北側が低く、標高1.97ｍである。

遺構の規模の割りには出土遺物はかなり少なかったが、須恵器、土師器、土師質土器がある。ＳＤ18とＳＤ20を切っていることや、西側調査区のＳＤ02の出土遺物からみて中世の遺構と考えられる。

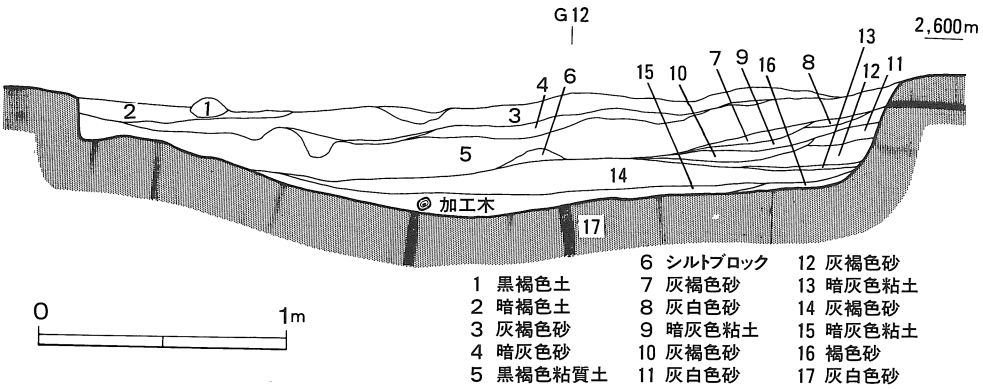
ＳＤ24

今回の調査で検出したなかで、最も規模の大きな溝状遺構である。溝の上幅は1.5～3.5ｍ、深さは0.3～0.6ｍもある。南の調査区外からＮ－18°－Ｗの方向で直線的に40ｍ伸びて、Ｃ12付近で消失している。Ｃ12の北から東にかけては、遺構らしきものは明確ではないが、北に伸びている形跡も微かに認められるので、さらに北へ延長していた可能性がある。また、重なる遺構は、Ｉ11付近でＳＤ25によって切られている。

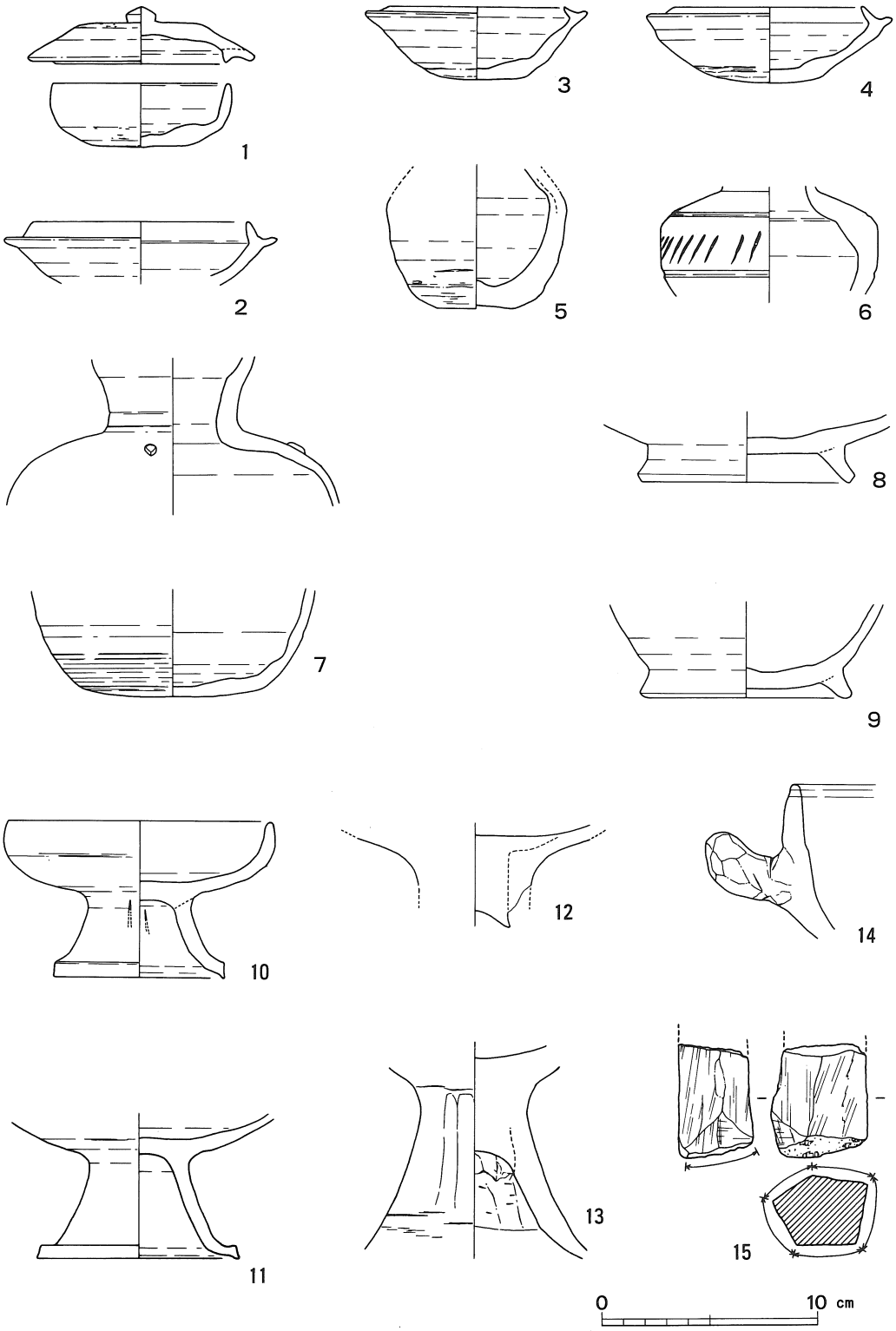
溝は、黄褐色シルト面を掘り込んでおり、Ｇ12付近の断面観察では、上幅3.3ｍ、深さ0.6ｍの溝内に埋土が十数層あり、性質の異なる砂と粘土が互層に堆積していた。溝の断面は、西側が緩やかなのに比べ、東側は急に深くなっている。また、東側から１ｍの部分には、0.1～0.4ｍの砂と粘土の薄層が密に堆積しており、堆積環境が複雑な様相を示している。上層は、西側から続く灰褐色土（中世の層）が堆積し、溝の西側の上部が少し掘り込まれている。溝の下底には、0.1ｍの暗灰色粘土が堆積し、層中から長さ1.15ｍの加工木製品が出土している。

ＳＤ24　出土遺物（第84、85図）

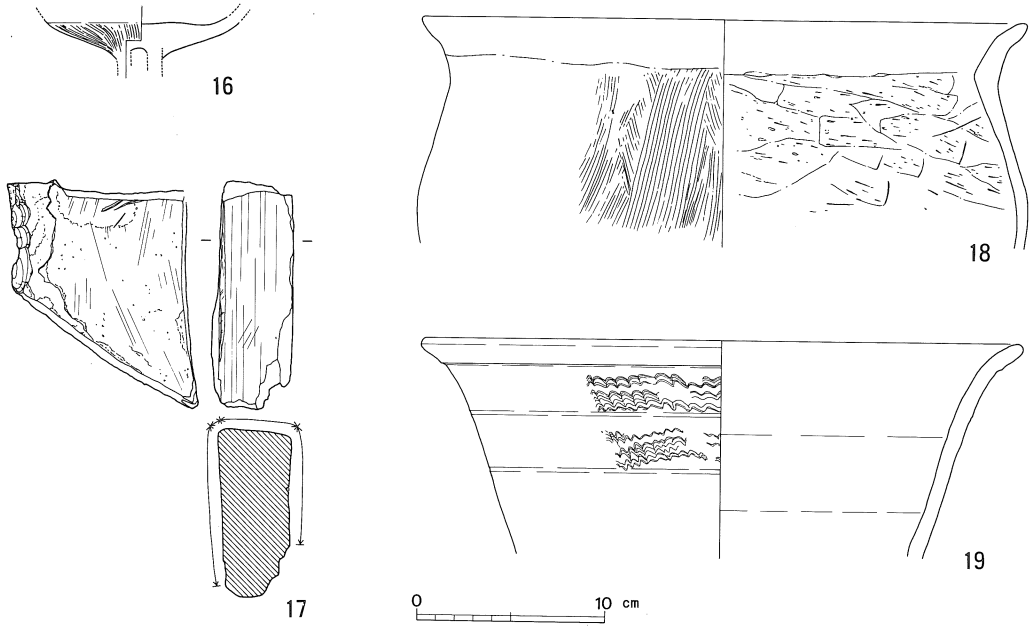
出土遺物としては、須恵器、土師器の土器類のほか、木製品がある。量的には、須恵器



第83図　ＳＤ24断面図



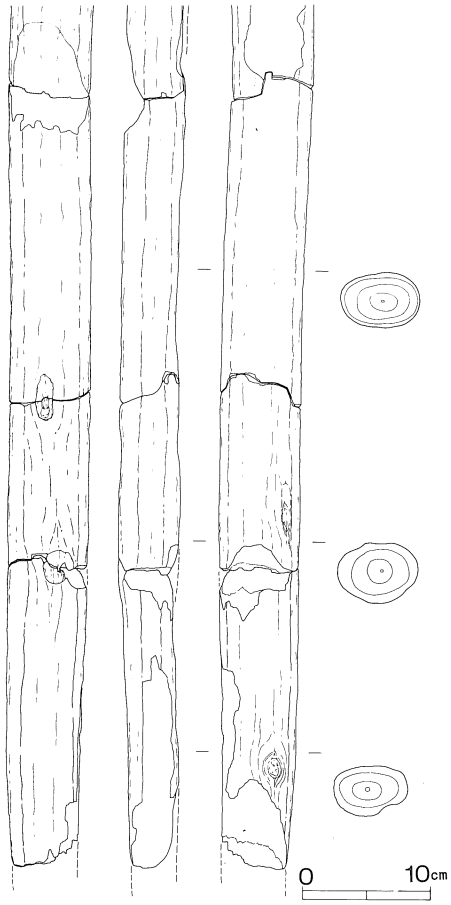
第84図　ＳＤ24出土遺物実測図



第85図　ＳＤ24出土遺物実測図

が土師器よりやや多い。遺物は溝の各地点からほぼ均等に出土している。須恵器には甕、蓋坏、高坏、平瓶、などがあるが、蓋坏、高坏が比較的多く、土師器に比べ大形の破片が多い。蓋坏(1)は、口縁内面にかえり、天井部に宝珠状のつまみがつく蓋と、セットになると思われる坏である。坏（2、3、4）は、口縁に受部があり、３は立ち上がりが短く内傾する。５、６は、頸部から上を欠いた体部の一部で、５は粗雑なつくりだが、６は体部の２条の沈線の間に櫛描刺突文を施している。平瓶(7)は、頸部から上はほぼ直線的に立ち上がり、肩部に円形浮文を付けている。長頸壺（8、9）は、いずれも底部で、高台がつく。９の底部外面には、「⊻」のヘラ記号がある。高坏（10、11）は、10が低い脚部に一対の線上の切り込みを持ち、大きく湾曲する坏部に接合し、11は緩やかに内傾する坏部と、切り込みや透しのない脚部を持つ。甕(19)は、ハの字状に開き、口縁下に２列の波状文を施している。土師器には、壺、甕、高坏、竈などがあり、高坏の多くは赤色塗彩されている。高坏（12、13）は、接合部のみの12のほか、13は緩やかに広がる脚部を持ち、外面を赤色塗彩している。土師器(14)は、把手が付き内外面を赤色塗彩しているが、用途不明の土器である。高坏(16)は坏部と脚柱部との接合部で甕(18)は、体部外面にハケメ、内面にケズリを入れている。石製品としては砥石（15、16）があり、15は６面に使用痕があり、砥石(17)は、板状の自然石の小口を使用し、現状で幅3.5cm、長さ11cmの研磨面がある。また、木製品（第86図）

は、溝の最下層から出土した芯持材で、一端を欠いているが、現存長1.15ｍである。断面は、長径７㎝、短径５㎝の長円形だが、縦方向に一端を13㎝の長さだけ半分に削り落とし、断面は半円形を呈する。おそらく、この先端を別の部材の穴にいれて組み合わせた建築材として使われたものとみられ、同種の木製品がタテチョウ遺跡（註１）から出土している。これらの遺物は、おおむね高広編年ⅡＡ、ⅡＢ（註２）にあたり、古墳時代後期後半（７世紀前半）と考えられる。また、溝の方向性や規模、同時期の遺物を出土していることからみて、ＳＤ20はほぼ同時期の遺構と推定される。



第86図　木製品実測図

ＳＤ25

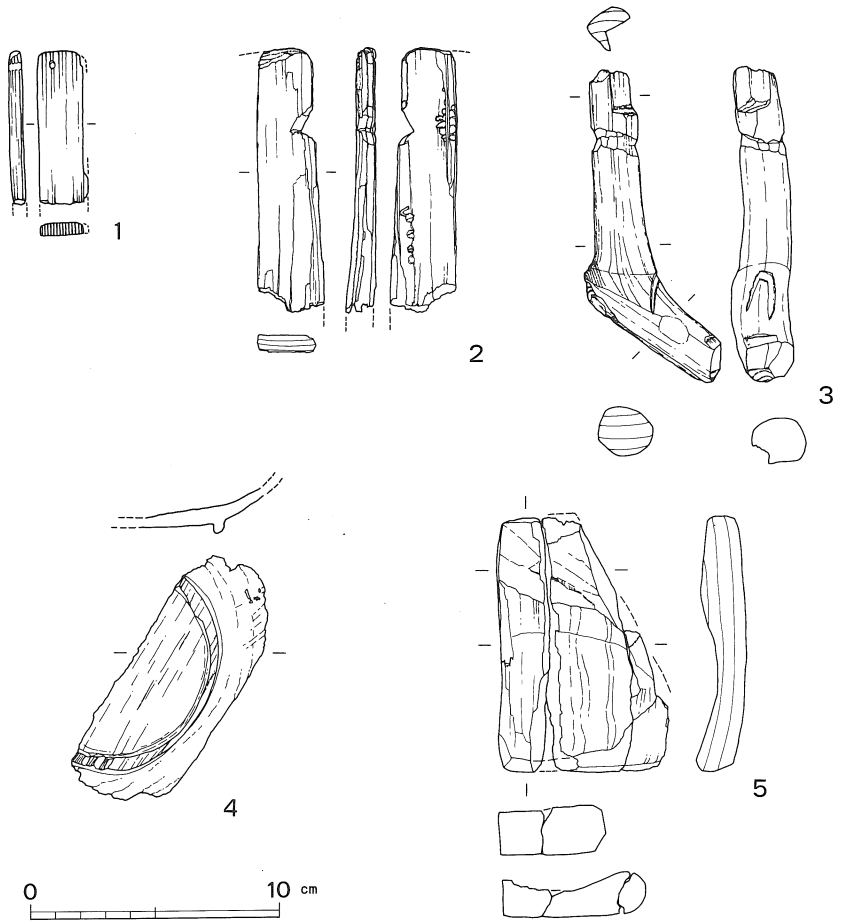
東調査区の南端に検出した溝で、調査区外から北に６ｍ伸び、ほぼ直角におれてさらに西へ７ｍ伸びて消失している。溝の上幅は、0.3～0.5ｍ、深さ0.15～0.2ｍで、ＳＤ24、ＳＤ27を切っている。この溝の北３ｍに同種の遺構があり、同じような遺構は、天神遺跡でも検出されている（註３）ことからみて、中世のものと推定される。また、付近には、同じような遺構がいくつか認められる。

ＳＤ26

南の調査区外から緩やかに弧を描いて北に伸び、Ｇ11付近で２条に分岐したのち、Ｅ11付近で両溝とも消失する。遺物は出土していないが、ＳＤ25を切っていることからみても、中世以降の溝であろう。

ＳＤ27

ＳＤ24の東側には、幅５～10ｍでほぼ南北に40ｍ周囲りよりやや高い黄褐色シルト面が存在する。この面は標高2.5ｍで、一部は東側へ広がっている。そのすぐ東を、沿うようにして南北に伸びているのが、ＳＤ27である。溝の上幅は0.5～1.0ｍ、深さ0.15～0.3ｍで、ＳＤ25、ＳＤ26に切られている。遺物は少ないが、須恵器と土師器があり、輪状つまみの

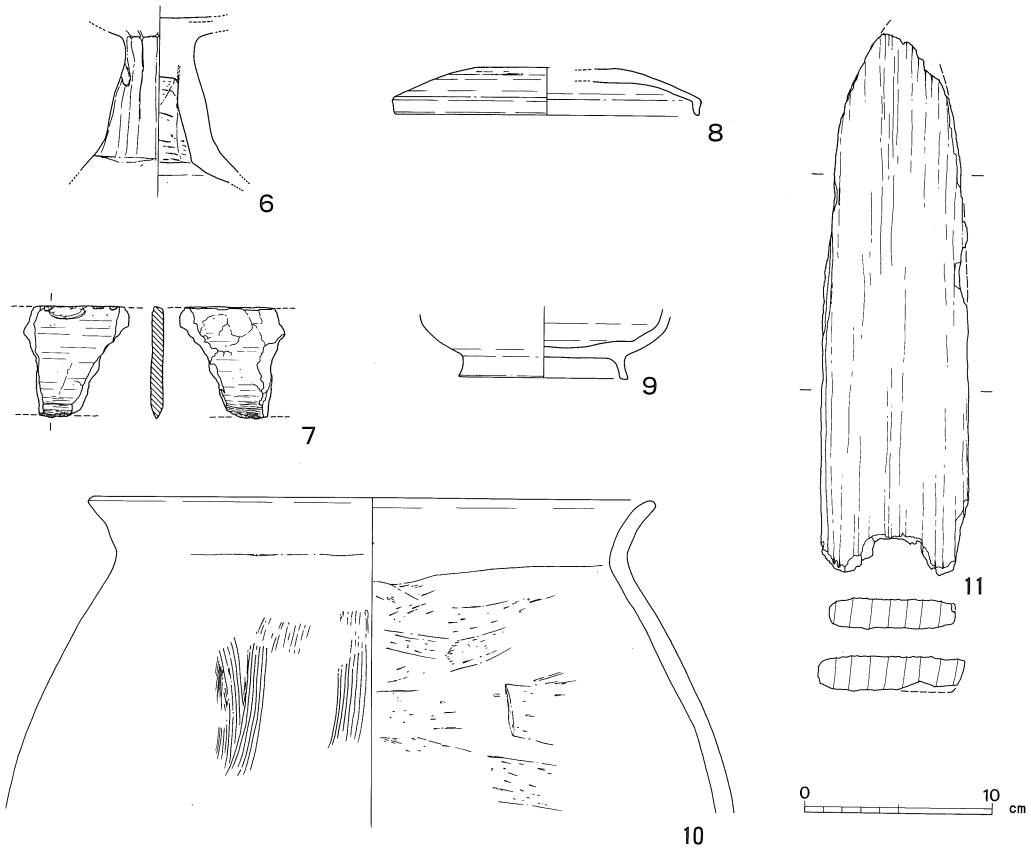


第87図　遺構に伴わない遺物

須恵器蓋があることから、古墳時代後期後半～奈良時代初期の遺構と考えられる。

遺構に伴わない遺物（第87、88図）

ＳＤ24の西側には、幅５～10ｍにわたって浅くやや落ち込んだ灰褐色土層が広がっている。この層は中世に堆積した土層で、数十点の木製品が出土しているが、その多くは自然木に少し手を加えた加工木である。木札(1)は、幅２cm、長さ６cm残存し、直方体の上端近くに小孔をあけたもので、墨書したものを紐で結んで使ったと考えられるものである。木製品(2)は、幅２cm、長さ10cmが残存し、上端から３cmのところを片方のみ0.5cm切り込みを入れているが、用途は不明である。木製品(3)は、径２cm、長さ15cmの、枝が分かれる部分の加工木で、紐をかけるためと考えられる切り込みを廻らしているが、用途は不明である。漆器(4)は、底部の高台が付くもので、椀もしくは皿と思われる。内外面とも黒漆で塗り、



第88図　遺構外出土遺物

外面には朱漆で模様を描いているが明瞭ではない。杓子状木製品(5)は、木の内側を掘りくぼめたものである。11は復元長30cm、幅８cmの木製品である。先端が尖り、他方の端部が２cm内側に抉られているが、用途は不明である。

土師器には、高坏と甕があり、高坏(6)は坏部のほとんどを欠くが、内外面を赤色塗彩している。また、甕(10)は、緩く外反する口縁部をもち、体部外面をハケメ、内面頸部以下にヘラケズリを施している。須恵器では、天井部を欠く蓋(8)のほか、高台のついた坏(9)がある。また、石製品としては、石鋸(7)がある。板状の石材の端部１cm幅を両面から磨研し刃を研ぎ出している。

註

(1)　島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査－Ⅲ－本文編』(1990)

(2)　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』(1984)

(3)　出雲市教育委員会『建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書』(1982)

第7章　ま　と　め

本調査区は、矢野遺跡が立地する微高地の縁辺部にあたり、遺構検出面は2.5ｍと矢野遺跡の中心部と比べると１ｍ以上も低い。また、東側調査区では、柱穴はあまり検出されておらず、西側調査区の範囲が集落を築く限界であったと思われる。

検出した遺構・遺物は７世紀中頃以降のもので、矢野遺跡は弥生時代の遺跡としてよく知られているが、弥生時代～古墳時代の遺物は数えるほどで、遺構についてはまったく検出されてない。これらのことから、矢野遺跡の範囲は７世紀以降拡大しているようである。

今回検出した遺構は、大きく３つの時期に分けることができる。本調査区での集落の開始期である７世紀中頃、そして８世紀～９世紀、集落の最後となる14世紀～15世紀である。

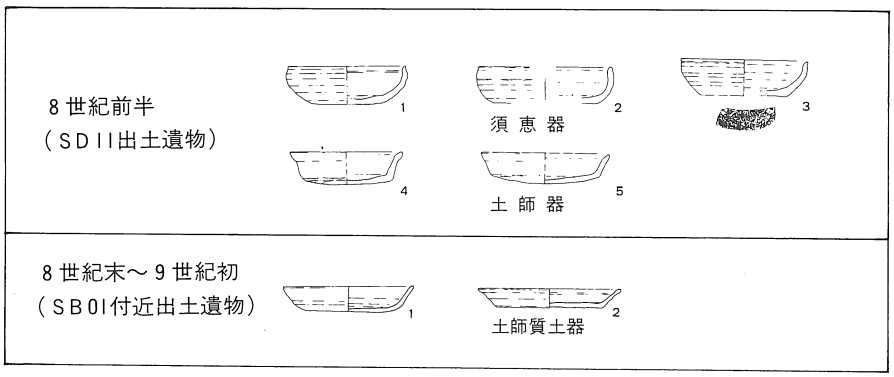
７世紀中頃

この時期の確実な遺構としては、ＳＫ03、ＳＥ01、ＳＤ24がある。ＳＥ01は、井戸の廃棄時の祭祀にともない土器を投げ込んでおり、甕が２次焼成を受け外面全体に煤が付着している。ＳＤ24は大きいところで幅が3.5ｍもあり、多くの土器・木製品が出土している。この溝がこの時期の集落を画する溝かどうかははっきりしない。

８世紀～９世紀

この時期の遺構としては、掘立柱建物４基、井戸１基、そして建物を囲むように南側と東側で溝を検出している。東側調査区で検出した建物は倉庫と思われる。

遺物としては、ＳＤ11の資料[(1)]が比較的まとまっており、須恵器と土師器のセット関係を示す良好な資料といえよう。

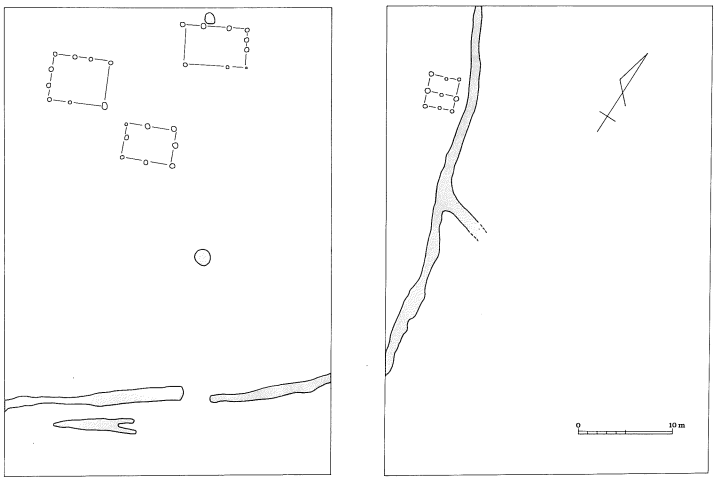


第89図　ＳＤ11・ＳＢ01付近出土遺物

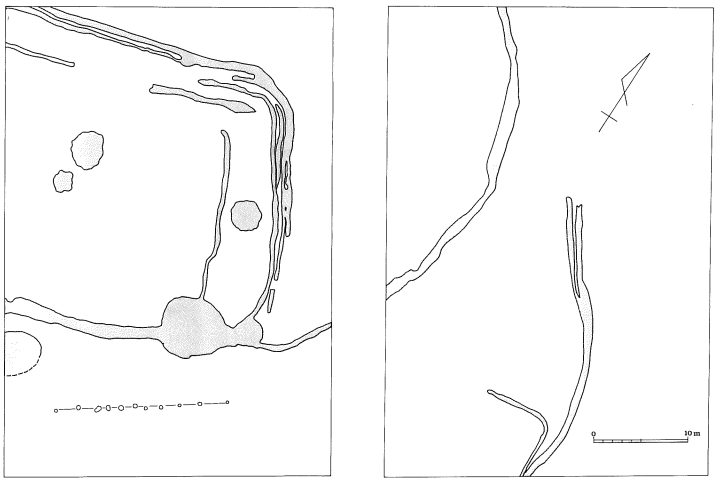
14世紀～15世紀

この時期の遺構としては、南北30ｍ・東西30ｍ以上の溝で区画された屋敷地があげられる。この屋敷地の内側で検出した遺構としては、ＳＫ01・02・04・05が外側にＳＫ08と柱穴列が検出されている。ＳＫ01は径６ｍ以上の大きな遺構で溝と一体をなし屋敷地の南東コーナーに位置しいる。陽物など祭祀的な遺物も出土している。ＳＫ02は、曲物が出土していることから井戸であった可能性がある。ＳＫ04は籾が出土していること、木簡の内容から種籾の貯蔵施設であったようである。このようにいくつかの遺構があるが、これらと同時期の建物遺構を明確にすることができなかった。ただし、ＳＢ03は棟軸が南北の溝の同じ方向であることから、この時期の建物である可能性がある。

遺物としては、青磁椀・常滑焼そして土師質土器の杯・皿・擂鉢などが出土している。ＳＫ01等で出土している土師質土器と同じ胎土をした擂鉢は、出雲市古志本郷遺跡[2]からも出土しており、今後も類例は増えるものと思られる。また、同遺跡でも青磁・常滑焼・土師質土器が出土しており、出雲市荻杼町荻杼古墓[3]の例からも、この時期の食器として、鎬蓮弁の青磁椀、常滑焼の甕、そして在地産の土師質土器（杯・皿・擂鉢）のセットが指摘できる。また、これらをおぎなうものとして漆椀なども加えることができる。また、備前焼はＳＤ07で出土しているが量的には非常に少ないことも注意される。



第90図　８～９世紀 遺構配置図



第91図　14～15世紀 遺構配置図

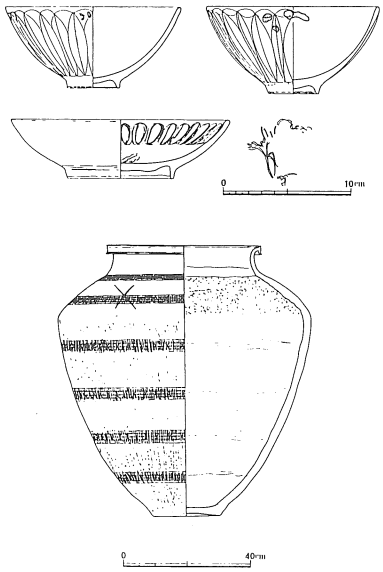
註

(1) ＳＤ11・ＳＢ01付近出土の遺物については、中世土器研究会の方々とくに武田恭彰氏（総社市教育委員会）に御指導いただいた。記して感謝いたします。

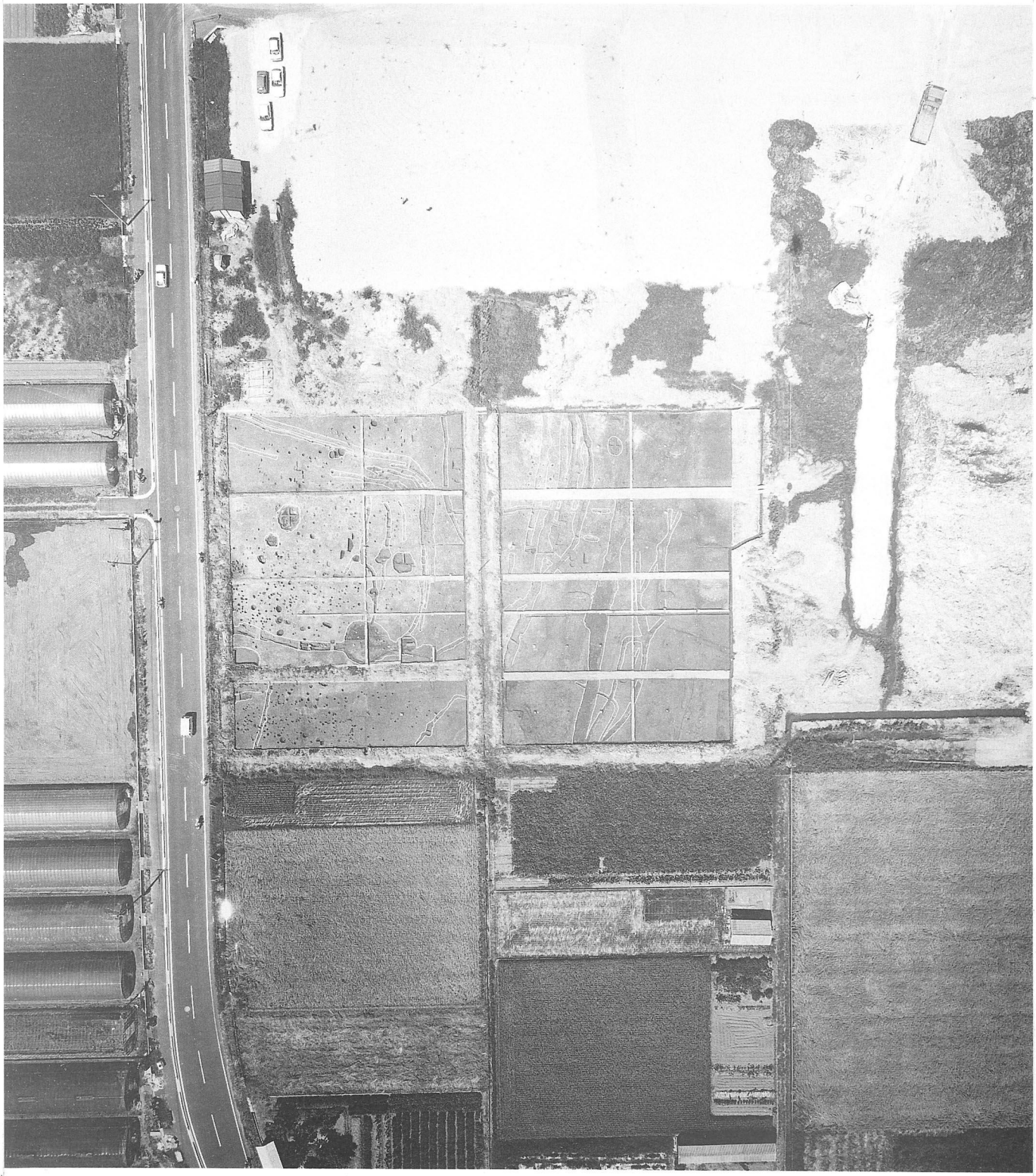
(2) 古志公民館建設に伴う調査で弥生時代～中世の遺構を検出しいる。(川上　稔氏の御教示による)

(3) 近藤　正「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」

(『考古学雑誌』第54巻３号・1969年)



第92図　荻杼古墓出土器



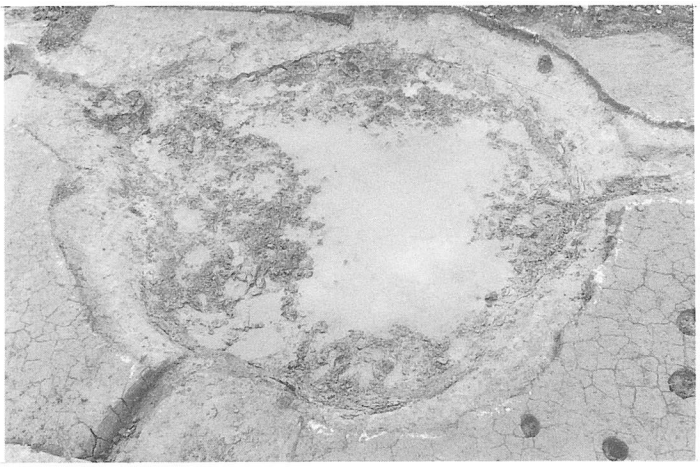
全調査区航空写真

西側調査区航空写真

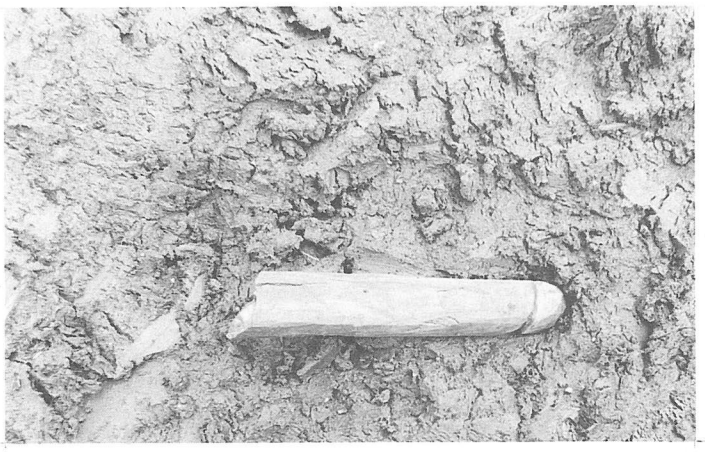
図版 3

西側調査区航空写真

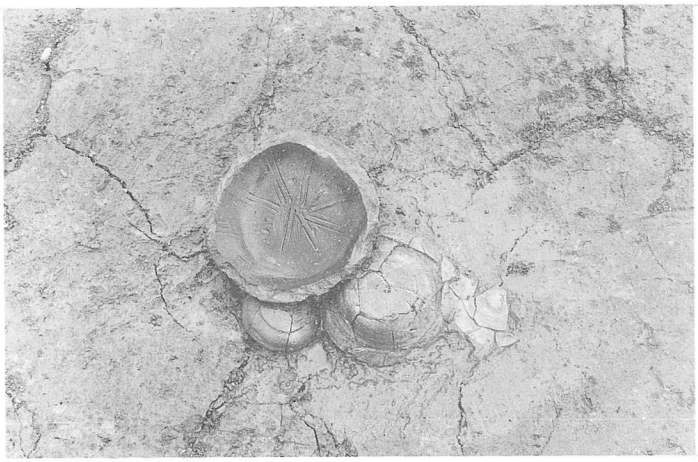
西側調査区航空写真（一部）



S K01



S K01遺物出土状況

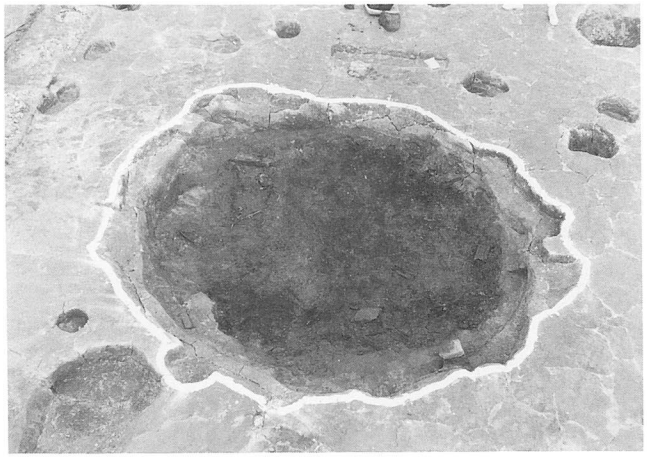


S K01付近
遺物群出土状況

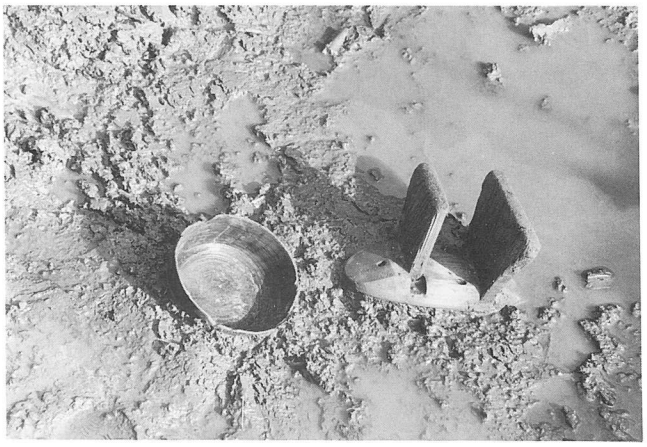
ＳＫ02曲物出土状況

ＳＫ03遺物出土状況

ＳＫ03遺物出土状況



ＳＫ04

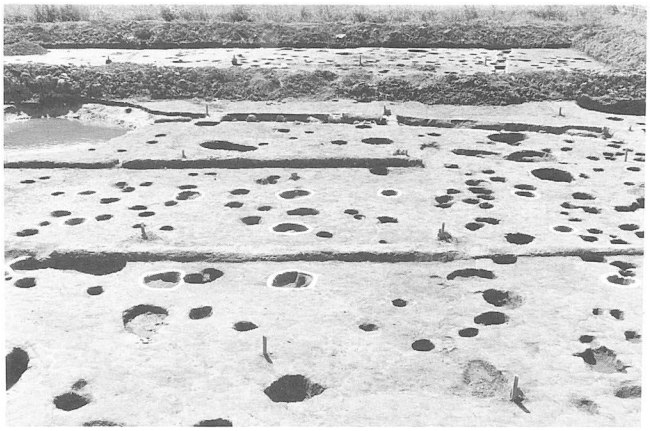


ＳＫ08遺物出土状況

ＳＥ01

S E02

S B01

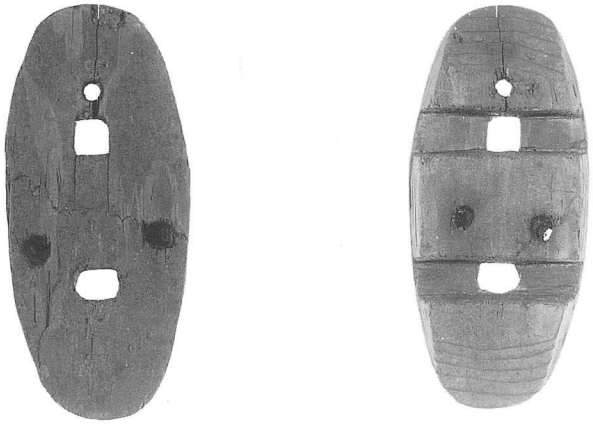


S B03

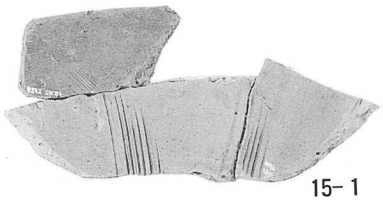
柱穴列　Ｐｉｔ
遺物出土状況

ＳＤ01

ＳＤ11

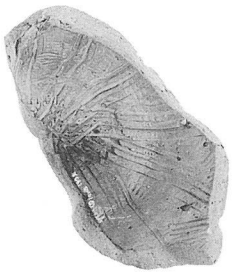


第6地点出土遺物

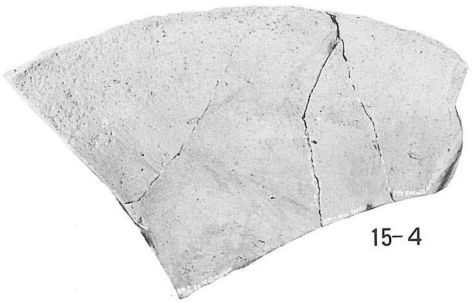


15-1

15-2



15-3

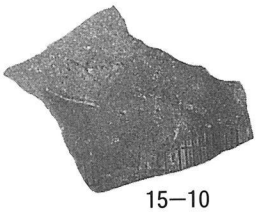


15-4

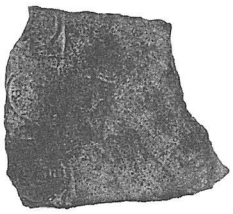
15-5

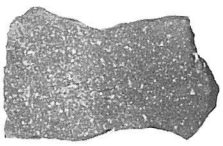
SK01出土遺物

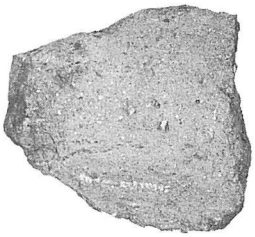
15－9


15－10

15－11


15－12

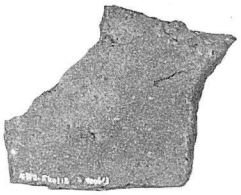

15－13


15－14

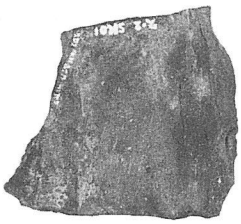
15－15

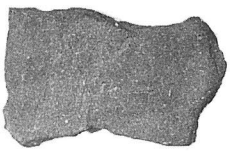
15－16

15－9


15－10

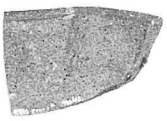
15－11


15－12


15－13

15－14

15－15


15－16

S K01出土遺物

15－6

15－7

15－8

15－6

15－7

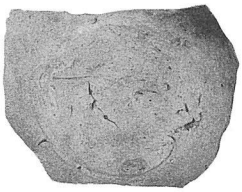
15－8

16－17

16－18

16－19

16－20

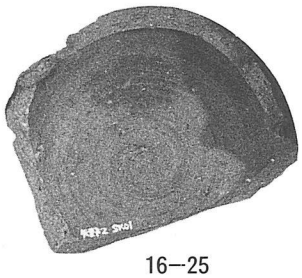


16－21

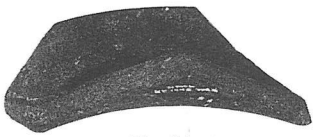
16－22

16－23

ＳＫ01出土遺物



16−25



16−24

16−27

16−26

17−1

17−2

17−3

17−4

17−7

17−6

17−8

17−5

ＳＫ01出土遺物